

第一部 騎士

0と1。

デジタルデータを構成する最小単位の数字がとめどなく溢れては、激しく流れていく。二つの数字が形成する巨大なトンネルと、その中を水のように通る0と1のストリーム以外は何も存在しない場所——それがこの「異次元空間」。

私は今その中に在り、0と1の奔流に逆らって進んでいた。

我々デジタルモンスター——「デジモン」は、デジタルデータの集合体たるデジタル生命体。幼年期から究極体までの六段階の形態や姿かたちは異なれど、その点だけは違いが無い。

つまりはこの空間を流れ行くものと同じ、二つの数字によって構築される存在であり、ゆえにデジモンとこの空間の流れは干渉してしまうため、本来この異次元空間へ入ることは自害にも等しい行為である。

0と1の激流に曝され続けることでわずかにでも表皮が欠ければ、その瞬間に傷口から膨大な量の0と1が流れ込んで来て、体内の要素が無秩序に書き換わり、存在そのものが崩壊してしまうからだ。

私がそうならないのは、私の周囲に展開されている球状をした灰色の障壁——グラ―ネの恩恵である。押し寄せる0と1を受け流す形で防いでくれるそれは、任務遂行のために我が主君から賜った、様々な機能を発揮する複合型プログラムだ。

ふと私は、一体化する形で両手に装着された武器を見つめる。

右手には、万物を貫く長大なランス——グラム。

左手には、あらゆる攻撃を無効化する円形の大盾——イージス。

それらの武装は『弱きデジモンたちを守るために戦う』という己の正義のもとに遂げた進化によってもたらされた、私という聖騎士型デジモンの象徴である。

その正義を私が掲げるに至った始まりは、私自身が弱きデジモンであった頃、同じ形の正義を持つデジモンが私を悪の手から守ってくれたからだ。

分け隔てなく弱きを助けるその気高い正義に強い感銘を受けた私は、十枚の黄金の翼を広げて戦う彼の背中に憧れて、弱きデジモンを害する悪に立ち向かうと決意した。

それから私は戦い続け、進化を重ね、ついに今の姿——デジモンの最上級の形態たる究極体へと至った。そして究極体への進化を機に私は主君に見出され、我々の世界の秩序を守る少数精鋭にして最強の騎士団——「ロイヤルナイト」の一員となったのだ。

世辞も多分に含まれているのだろうが、周囲からの評価によれば、私の実力は歴代のロイヤルナイトの中でも一二を争うものだという。

だが、この異次元空間においては強さなど何の意味も成さない。

流れに抗えるグラ―ネさえあれば、私でなくともこの任務をこなすことは出来るはず。ではなぜ我が主君は、十二体のロイヤルナイツの中から私を選んだのだろうか。

任務に選出された理由を問いはしたが、主君は何も答えてくれなかった。

もつとも、そのように真意を話さないのは我が主君の常であり、そこにはデジタルワールドの管理者としての崇高な考えがあることを理解しているから、私もそれ以上追及はせず任務へ発ったのだが――

「――あれか！」

思索にふける中で不意に目標を見つけ、私は思わず声を漏らした。

0と1が不自然にそこだけを避けて通っている、激流の中にぽっかりと空いた大穴。

まだ距離はあるが、間違いない。あれこそが私の探していた「ワームホール」だ。

私が与えられた任務とは、この穴の先に繋がっている「ニンゲン」というアナログ生命体が支配する異世界――アナログワールドの視察調査である。

主君によれば、ニンゲンの文明においてデジタルデータを用いた技術が発展した影響で、全てがデジタルデータによって構成されるデジタルワールドとの繋がりが偶発的に生じ、両方の世界に通じるワームホールが発生したのだという。

我が主君は以前からアナログワールドの存在を知っていたようだが、行き来が可能になったのは今回が初めてであり、実際にあちら側に渡るのは私が最初とのことだ。

私は早速ワームホールに接近し、ためらわずその穴の中へと飛び込む。

真つ暗闇の中――泡にも似た灰色の障壁プロテクトに包まれた私の体が、自然に下へと進んでいく。

アナログワールドへの出入り口に近付くにつれて、デジタルデータで構成されている私の表皮デスチャと骨格ワイヤフレームが物質化していく。

やがて、遠くに微かな光が見えた。

私は周囲を覆うグラ―ネを解除し、光へと降りていく。

近づくごとに、目に映る光が広がるように大きくなっていく。

眩しさのあまり目を閉じると同時に、私はその光の中へ飲み込まれた――

——風を感じた。

自慢の赤いマントが音を立てながら、背中ではためいている。心地良い涼風を浴びつつ、目を開く。

眼前に広がるのは、既知の風景と未知の光景が入り混じった景色。

雲一つ無く真っ青な空は、デジタルワールドとそう変わらない既知の風景。青空とは、どこの世界で見ても気持ちの良いものだ。が、頭上の巨大なワームホールがどうしても視界に入ってくるのが野暮である。

それよりも私が見張ったのは、未知の光景——足元に広がる街並み。

信じがたいことに、見渡す限りの地平線まで延々と、様々な建造物が敷き詰められるかのように並び建っている。デジタルワールドにも街はあるが、これほど大規模なものは存在しない。

しかもざっと見渡したところ、街はニンゲンたちが行き交うばかりで、争いが起きている様子はどこにも見られない。戦闘の痕跡すらもまったく見当たらなかった。

デジタルワールドを空から見下ろせば、幼年期^{こども}同士の喧嘩から対立する勢力間の存続を賭けた戦争まで、規模の大小はともかく必ず何かしらの争いが入るものだから、これには驚嘆する他なかった。どうやらニンゲンとは、よほど平和的な生命体らしい。

くわえて、この規模の街の維持と管理を問題なく行えていることから、ニンゲンが高度な知能と社会性を持っていることも併せて窺えた。

「まだ判ずるには早計が過ぎるが、ひとまずニンゲンは危険ではなさそうだ。この分ならば、交渉も可能かもしれない」

私を与えられた任務——アナログワールドの視察調査の内容は、デジモンのアナログワールドへの移住が可能か否かをつぶさに調べることだ。

調査するべきことは細かく挙げれば枚挙にいとまがないが、大枠で分ければ二つ。

一つは、デジモンが暮らすのに適した環境であるか。もう一つは、こちらの世界の支配者であるニンゲンとデジモンの共存が可能かどうか。

そもそも、なぜデジモンを他の世界へ移住させる必要があるのかといえ、それは——緩やかにとはいえ、デジタルワールドという世界が減びへと向かいつつあるからだ。

その原因は、デジモンの個体数の増加によってデジタルワールドが容量の限界を迎えようとしていること。

デジモンは戦闘や寿命での死を迎える際、核である「^{デジコア}電脳核」さえ破壊されていなければその場で「デジタマ」に転生し、そこからまた新たなデジモンとして生まれる。ゆえに一体死んだからと言って、全体の個体数も減るとは限らない。

しかも成長段階^{レベル}が幼年期に戻った分はデータ量が減るが、いずれは進化をして元の量に戻るか、あるいは前世よりも強力な進化をしてむしろデータ量が増えるかもしれない。

さらに言えば、デジモンはデジタマから生まれるだけに限らず、デジタルワールドの至

るところに残留している様々な形のデジタルデータから唐突に発生することもある。

そういった特性から基本的にデジモンの個体数は増える一方で、その性質こそがデジタルワールドを滅びに向かわせているのだ。

限界が訪れる時はまだずっと先の話のようだが——主君はいたずらにデジモンたちの不安を煽るべきではないと考えており、この件をいち早く知らされたロイヤルナイツの面々には硬い箝口令が敷かれていた。

二つの世界では時間の流れが異なっており、アナログワールドで五年が経過してもデジタルワールドでは一年しか経っていないとのことだ。そのこともあって、主君からはこの視察調査について『じっくりと時間をかけて入念に調べてほしい』と仰せつかっている。

「……むっ？」

ふと後方の巨大な建造物の存在に気付き、振り返る。

少し離れた場所に、天を突くような白い塔がそびえ立っていた。

デジタル信号の載った電波が広範囲に発信されていることから、何らかの情報を伝達する役割を持った電波塔と分かる。

そして、私の体長の百倍以上はあるというその巨塔の上方——二箇所スペースの中には、大勢のニンゲンの姿があった。

頂上に近い方は輪形で、その下は逆台形。それらには全周に渡って窓が設けられており、ニンゲンたちが塔の外の景観を楽しげに眺めていた。どうやらこの電波塔は、展望台の役割も併せ持っているらしい。

しかしこれほど巨大なワームホールが空に在るというのに、ニンゲンたちはあまり気にしていないようだ。デジタルワールドとの時差を計算するとこちらのワームホールは一年ほど前に発生したことになるが、既に見飽きてしまったのだろうか。

主君からはニンゲンの生態について、わずかながら情報を与えられている。

ニンゲンは基本的に二手二足の人型で、直立歩行で移動する。個体ごとに体格差は広く異なるが、胸部が突き出ているのがオンナ型、そうではないのがオトコ型だという。私も完全体の頃は胸部が突き出ていたが、ニンゲンからすればオンナ型に見えたのだろうか。

中でも小さな個体はニンゲンの子供のようだ。子供の時点でオンナ型かオトコ型かは決まっているようだが、子供と思わしき個体はいずれも胸部が突き出ておらず、いったいどう見分ければいいのか分からない。

そうしてニンゲンたちを観察していると、展望台から外を見ていた一体の子供が、空に浮いている私の存在に気付いた。

その子供が私を指差しながら騒ぎ始めたのを発端に、連鎖して次々と周囲のニンゲンが私を認識していく。騒ぎが伝播していく。

私に視線を送るニンゲンたちの表情からは困惑、あるいは恐怖の感情が窺えた。

思えば私はニンゲンの三倍ほど大きいし、歩行で移動する彼らと違って浮遊している

上に、グラムとイージスで武装までしている。そんな未知の存在を目の当たりにして、ニンゲンたちは戸惑っているのだろう。

しかしながら、私に向くのはそういったネガティブな感情ばかりでもなかった。羨望、憧憬——そんな色で目を輝かせながら私を見ているのは、ニンゲンの子供たち。

「デジモンであれ、ニンゲンであれ……子供というものは、純粹で良いものだな」
子供は常識をまだ知らず、だからこそ心からの素直な反応を見せてくれる。

彼らの視線を受けて私が想起するのは、デジタルワールドで守ってきたデジモンの子供たちのこと。

幼年期から成長期の子供には、進化による無限の未来が広がっている。

実際私が守った子供たちの中には、私があるデジモンに憧れて強くなったように、私に憧れて立派に成長し、多くのデジモンを守れるほどに強くなったデジモンも居る。×

だが、いかなる可能性を秘めたデジモンであっても、子供である内は等しく弱い。

そのような子供だけを狙って襲う卑怯者、誰彼構わず気まぐれに力や悪意を振るう者などに会ってしまったえば、子供の未来はいとも簡単に断たれてしまう。

ゆえにまだ弱き子供たちを守り、そんな悪をことごとく討つことこそが、私というデジモンの生きる道だった。ロイヤルナイツとなる前から、私はずっとそうして活動してきた。

そう——あのニンゲンの子供たちが私へ向けている煌めくような熱視線は、これまで私が守ってきた無垢なデジモンの子供たちがくれる眼差しによく似ていた。

そんな子供たちを見て、私は強く思う。

デジモンとニンゲンが共存していく道を行きたい、と。

「……とはいえ、あまり注目を受けて警戒されてしまつては、今後に支障が出かねないか」
ニンゲン社会に紛れることが不可能と分かった以上、調査はニンゲンの目に映らないように姿を消した状態で行なうべきだろう。

私がアナログワールドへ渡るために使った複合プログラム^グにはそのための機能も備えられているから、任務に支障はない。

だが調査を開始する前にまず、ワームホールを閉じるとしよう。

対策も無しにワームホールに入ってしまったのなら、待っている結末は、異次元空間の激流によって0と1に分解されるのみ。アナログ生命体であるニンゲンもデジモンと同じ結末になるのかは分からないが、このままにはしておけない。

「グラーネ、ペーストモードを起動」

私の言葉に応じて、右手に携えるグラムの穂先が極彩色の球状の光を纏う。

続いてグラムを空に掲げ、白く光るワームホールの縁を穂先でなぞるようにして範囲を指定すると、自動的に光の球がグラムから射出された。

極彩色の光球はワームホール目がけて一直線に飛んでいくと、そのまま巨大な穴の中に飲み込まれた。

数秒後、ワームホール全体が徐々に透明になっていき、やがて元々何も無かったかのような跡形も無く消え去った。

実のところワームホール自体はまだそこに存在しており、外側から蓋をしただけに過ぎないのだが、これで私がグラマーネによって蓋を外さない限りは、ニンゲンがワームホールに入ってしまうことは無くなった。

同時にデジタルワールド側からデジモンが出てくることも不可能になったが、主君は私の任務が終わるまでは他にデジモンを寄越すつもりはないらしく、そもそもワームホールを閉じるように命じたのも主君なのだから問題は無い。

「さて…：感謝こそすれ、非難されることはないと思いたいが…：」

本来あるべき青空がそこに戻ったことを見届けてから、私は白い電波塔に居るニンゲンたちの反応を窺う。

他の場所に居た者もいつの間にか集まってきたらしく、窓際に立っているニンゲンの数がかかり増えていた。

大半は茫然としていたり、何のつもりか長方形の小型機器を私に向けるような形で掲げている。だが中には拍手を送ったり、笑顔でこちらに手を振っているなど、ポジティブな反応を示してくれている者も見られた。その多くはやはり子供だが、今度は何体かの大人もそういった好意的なリアクションをしていたから、ワームホールが閉じたことはきつと彼らにとっても喜ばしいことなのだろう、と解釈する。

しかし、やはり他者から感謝や称賛を受けることはとても心地が良い。

私は常に己の正義と主君への忠義に従って動いているだけに過ぎず、守るべき相手に対して見返りを求めて行動したことは一度たりとも無いつもりだが、働きに対して何かを返してもらえるのはやはり嬉しいものだ。

感謝さえ籠めてくれていればその形にかかわらず、等しく私は喜べる。

「いずれまた会おう、ニンゲンたちよ。グラマーネ、ヒドウンモードを起動」

私は深紅のマントを大袈裟に翻しながら、塔に背を向ける。

音声認識でグラマーネのヒドウンモードが起動し、武装を含めて私の体に沿う形で展開された無色の障壁によって、私は透明な状態となった。その障壁は私の姿を不可視のものとし、私から生じる一切の音も消してくれるものだ。

「まずは、言語や地形のデータを手に入れなければ」

ニンゲンたちの生活する巨大な街に向かい、ゆっくりと降下する。

早速、視察調査を始めるとしよう。



アナログワールドを訪れてから三週間が経過した、春風のそよ吹く2017年の四月。

私はワームホールから降り立った地——日本の東京にて、視察調査の日々を送っていた。白い電波塔——「東京エアーツリー」の建っていた墨田区は一通り見て回ったため、現在は都市機能が集中して人口の多い、都心と呼ばれる地域で主に活動している。

アナログワールドに来てからは常にグラマーネで姿を消しているため、初日以降はニンゲンに気付かれたことはない。くわえて万が一にもニンゲンや建物に当てないようにと、両腕の武装はデータを圧縮し、体内に格納してある。

今は六本木の夕暮れの空に浮きながら、オレンジ色に染まる街並みと、思い思いに過ごすニンゲンたちの生活を観察しているとろだ。

今日は平日の同じ時間よりも人通りが多く、賑やかだ。

その理由は、休日の前日である金曜日だからに違いないだろう。これまでの三週間の滞在によって、私もニンゲンのそういった常識や傾向を徐々に把握してきた。

不意に視界の端で街頭の大型ビジョンがニュース放送に切り替わり、そちらに視線が引き付けられる。

ニュースのテロップは、『「赤マンントの怪人」街の反応は？』。既にアナログワールドで扱われている全ての言語データをインストールしてあるので、問題なく読めた。

続いて大きな画面に流れた映像は、大型のランスと大盾を携えた「赤マンントの怪人」が、極彩色の光球を放ってワームホールを閉じ、自慢の赤いマンントを翻しながら忽然と姿を消すまでの一部始終。

赤マンントの怪人とは要するに、この私のことである。

私の活躍を収めた動画に続き、街頭インタビュウの映像が始まった。

両腕を組んで、私はそれに耳を傾ける。

『怖いです。槍みたいの持ってましたし、人間よりすごく大きいですし……』

『むかし、子供の頃に流行ってましたねえ、赤マンントの噂。実在したんだあって、今になって。恐ろしくてたまらないですよ』

『デカくなっていく一方だったあの穴を閉じるとか、ヤバいスよね。そもそもあの穴を作ったのもアイツな気が……？』

様々なニンゲンが次々と赤マンントの怪人に対する印象を話していくが、彼らの反応から垣間見える感情はいずれも恐怖、不安、動揺など、それぞれ程度は違えど決して良いものではなく、肩を落とす。

偏った意見ばかりを取り上げているかと思いたいところだが、インターネットを通じて色々なメディアで調べてみても、赤マンントの怪人の存在を憂慮する意見はとも多かった。

「デジタルワールドではしばらく称えられるばかりだったがゆえに、悲しいな……」

言語データの他にも歴史や地図、知識に法律と挙げればキリがないが、とにかくアナログワールドで生活していくために必要となるであろう基礎的なデータは既にひと通りインストールしてある。

それらのデータの参照と三週間の視察によって、私はニンゲンの性質をある程度は理解したつもりだ。

ニンゲンは、デジモンと同じように進化をする。ただしその仕様は異なり、デジモンのように一瞬で姿と性能が変わるといふ段階的な進化ではなく、長い時間をかけて徐々に変わっていくという連続的な形の進化である。

これはニンゲンに限らず、アナログワールド——この地球という星に生ける全てのアナログ生命体の進化の仕様だ。そしてニンゲンは他のアナログ生命体よりも総合的に優れた進化を遂げたことで、これまで600万年の間、地球の支配者として君臨し続けてきた。

しかしそれは、ニンゲンよりも上位の存在が一度も現れなかったからこそ。

「自分たちよりも強力な種族が現れたともなれば、無理もないか。反対の立場だったのなら……もしもニンゲンがデジモンよりも強力で、それがある日突然デジタルワールドに現われたとなれば、私も彼らと同様の反応をしていたはずだ」

自分たちではどうにも出来なかったワームホールを、いとも簡単に閉じる——そんな超常的なことをやってみせた存在が突如として出現したことで、ニンゲンは約600万年続いていた人類史が脅かされるかもしれないという危機を感じているのだろう。

だが、実際のところその危機感は正しい。

なにせニンゲンは、デジモンに比べれば桁がいくつも違うほどに弱いからだ。

シミュレーションした結果、まずアナログワールドで主に使用されている兵器は、銃器からミサイルまで、いずれもデジモンにはダメージが通りにくいようだ。

銃器さえあれば幼年期には負けないと思うが、相手が一つ進化して成長期となると、訓練を積んだニンゲン数十人が徒党を組んで戦って、ようやく倒せるかと言ったところ。

さらにもう一つ上の成熟期と戦うとなれば、戦闘機や戦車のような兵器を大量に運用しても勝負になるかどうか。

そして完全体ともなると、複数国の連合軍だろうと勝ち目は無いだろう。完全体の中でも比較的パワーの弱いデジモン単体なら勝機はあるだろうが、反対にもし相手が強力な完全体だったとしたら、アナログワールドを丸ごと制圧されてしまいかねない。完全体の中でも特に強力なデジモンの放つ「必殺技」は、ニンゲンの最強の破壊兵器である核弾頭にも相当するほどの威力なのだから。

個体数では圧倒的にニンゲンが勝っているが、もしニンゲンとデジモンの戦争が起きたとすれば、私のような究極体が出るまでも無く、それはたった数体のデジモンによる一方的な蹂躪で終わるだろう。

「デジモンとニンゲンの戦争……いよいよデジタルワールドの容量に限界が差し迫れば、主君も強硬手段を選択せざるを得ないだろう。そのような結末を迎えないためにも、主君は私をこの世界に送り込んだのだと思っっているが……難題だな」

胸の前で組んでいた腕を解いて、片手を顎に添える。

ニンゲンが力で制圧出来る相手だと知れば、デジモンたちはアナログワールドに来るなり暴れ始めるだろう。私のように強力なデジモンが監視に就けばある程度は抑制出来るかもしれないが、そもそも前提として、そのような凶暴な存在をニンゲンが受け入れてくれるはずがない。

では大人しいデジモンだけを送ればいいのではないかと思っただが、これも駄目だ。
デジモンとは元来、戦う種^{しゅ}である。

比較的大人しいとされるデジモンもその大半は、周囲が自分よりも強いからそうしているに過ぎず、自分より弱いニンゲンばかりの世界に来れば、一転して凶暴なデジモンになり得る。幼年期に限れば、そう攻撃的でもないが。

「むう……どうしたものか。それこそ、ニンゲンの長所たる優れた頭脳を活かして、彼らに何か案を出してもらえないだろうか？」

戦闘力^{バトル}についてはデジモンの方が圧倒的に秀でてはいるが、ニンゲンはデジモンよりも素晴らしく賢い。単純な演算能力だけならデジモンの方が優れているが、彼らの頭脳は思考や発想が柔軟性に富んでいる。

私は人類史のデータをインストールする以前まで、ニンゲンのことを争うことの無い平和的な生命体だと思っていたが、戦争がほとんど起きなくなったのはごく最近であり、時代を遡ればニンゲン同士が覇権を巡って戦い続けていた時代も長くあったようだ。

私が人類史において特に注目したのは、過去の戦争においてニンゲンが講じた戦略の数々である。

かつてこの日本で繰り広げられたという戦国の乱世、中国の三国志、世界中のあらゆる国を巻き込んだ世界大戦——そういったニンゲンの戦争の記録に目を通した際、私はその戦略の多角性に驚かされた。

戦略というものの重要さは身に染みて理解している。ロイヤルナイツの団員にも、戦略家を担うデジモンが居るからだ。

彼が指揮を執った戦いにおいて、彼の所属する勢力の勝率は驚異の100パーセントである。ロイヤルナイツとなる以前から、彼が率いた勢力は一度たりとも負けていない。

なぜ彼がそれほどまでに勝ち続けられているのかといえば単純な話で、彼に比肩するレベルの戦略を扱える者が他に存在しないからだ。

だが、それはあくまでもデジモンの中に限った話。

デジモンよりも平均して高い知能を持っているニンゲンならば、彼に匹敵するか、あるいは彼を超えるような戦略家も存在するかもしれない。

過去の戦略家から挙げれば、両兵衛、孫武に諸葛孔明、ナポレオン、ハンニバル——彼らニンゲンの戦略家と我らがロイヤルナイツの戦略家では、果たしてどちらの策が上だったのだろうか。

そして、そんな数多の戦略家たちを輩出してきたニンゲンならば、デジモンとニンゲン

の両者が共存するための妙案も思いつくのではないか、と私は考えていた。

「……逸るな。今の私に与えられた任務はあくまで視察調査……ニンゲンとの交渉ではないだろう。赤マントの怪人が今姿を現すわけにも……」

独り言を呟きながら悩み込んでいると、街のどこかのスピーカーから、ノスタルジックな曲調の童謡が流れ始めた。

時刻が午後五時になったことを知らせるチャイムである。これはスピーカーの無線が正常に作動しているかの検査の他、仕事を終えて帰宅する時間が訪れたことを人々に伝える役割を兼ねているのだという。

時報のチャイムならば適当な分かりやすい音を鳴らすだけで済むというのに、あえてそこに民衆に慣れ親しんだ歌を採用しようと考えるセンスもまた、ニンゲンの頭脳ならではの素晴らしい発想と言えよう。

効率ばかり求めるのではなく、何事にも楽しさを添えようという豊かな心をニンゲンは持っているのだ。デジモンの中にはそれを非効率だと思える者も多いかもしれないが、少なくとも私は、そんなニンゲンのエンターテイナーの心をとても気に入っていた。

「定時だ。今日の任務はひとまずここまでとしよう」

私はアナログワールドに来てから、少しでもニンゲンのことを理解するためにと、可能な限りは彼らのルールとリズムに倣って生活するようにしている。

八時に始動し、十二時から一時間の休憩を取って十三時に再開、十七時で任務に一旦区切りをつけるという流れが、私のここ三週間における任務のスタイルだ。

ニンゲンの社会には残業という制度もあるようだが、休まずに働き続ければ良い結果が出るというわけでもないから、私はそれをしていない。

その代わりニンゲンと違って休日も働いてしまっているが、私に与えられているのはデジタルワールドの存続に関わる任務なのだから、そこには目を瞑っている。

それに、もし丸ごと二日も休んでいたら私はきつと気が気ではなく、休日だということにむしろ疲労してしまうことだろう。だからこれでいいのだ。

私は上空に戻ると、そのまま六本木の街から飛び去った。



アフターファイブ。一日の労働を終えた後の自由を謳歌する時間のことを、ニンゲンはそう呼んでいるらしい。

食事や娯楽を楽しんだり、趣味に没頭したりと、過ごし方はヒトそれぞれ。

そして私もまた、ニンゲンを真似てアフターファイブを満喫している。

特に今日のアフターファイブは、まさしく格別の味となることだろう。

なぜなら私はついに、“おでん缶”を手に入れたのだから。

私がやって来たのは、電気とサブカルチャーの街——秋葉原。

デジモンとしてはエネルギー源の一つである電気にまず興味が行くだろうが、私の目的は専ら後者の方である。電気はアナログワールドの街ならどこでも摂取出来るが、これほど多くのサブカルチャーが集まる街は他には無い。

私は秋葉原駅前の大型街頭ビジョンの上空に浮遊し、念願のおでん缶を片手にとあるイベントが始まるのを待っていた。

おでん缶はもちろん、正規の手段で入手したものである。

日々の任務の最中に拾い集めたアルミ缶とペットボトルを、無人リサイクルステーションにて電子マネーポイントと交換し続け、三週間かけてようやく溜まったポイントを使い切り、自販機で購入したのだ。

物理的なポイントカードは今の私には入手が困難だったため、仮想ポイントカードの機能を自身に追加することで解決した。デジモンだからこそ成せる業と言えよう。

「記念すべき一口目には、このウズラの卵とやらをいただこう」

右手で摘まんだ串に刺す形で、左手に乗せた小さな缶から小さな小さな卵を取り出す。

ニンゲンの長さの単位で表すと体長約5メートルとなる私からすると、缶も具もあまりにも小さいが、果たして味が分かるのかどうか。期待と不安が心中を飛び交っている。

「その名の通り、ウズラという鳥型生物の卵らしいが……卵と言われると、どうもデジタマを食べるかのようで少しばかり背徳感があるな。……どれ……」

ひとしきり眺めた後で、私はそれを兜の面頬ベンゲルに施されたスリットを通して口へと運ぶ。

一噛みするたび、柔らかな白身と黄身がほぐれていく。染み込んだ出汁が溢れ出す。まろやかな甘味と濃厚な旨味が、口の中から全身へと広がっていく。

「美味しい……！」

それは、これまでの生涯で口にしたことのないほどの筆舌に尽くしがたい美味。

デジタルワールドから持ち込んだ肉よりも、この任務に発つ前に用意してもらった豪華な食事のどれよりも遥かに美味しい。

咀嚼しながらウズラの卵のデータを解析してみた結果、ニンゲンの食物はデジモンが摂取してもエネルギー効率が悪いという結果が出たが、解析が間違っているのではないかと思えるほどに凄まじい多幸福感に心身が包まれている。栄養を摂ったり腹を満たすには足りないが、この世界の食物は嗜好品としては極上だ。

自分では確認出来ないが、今の私はさぞかし満足気な表情をしていることだろう。

「このおでん缶というものが特別美味しいのか……!? もしアナログワールドの食べ物が全てこのクオリティだったとすれば、デジモンが押し寄せて来かねないぞ……！」

興奮しながら次はどの具を食べようかと迷っていると、足元から多数の拍手が聞こえてきた。

拍手をしているのは私と同じく、イベントを目当てにこの場所へ集まった者たち。

様々なところに散らばって立っているニンゲンたちが、しかし揃って大型ビジョンに注目し、一斉に拍手をしている。イベントに無関心な通行人たちは彼らを一瞥するも、すぐに前へ向き直って通り過ぎていく。

私にとっては既に見慣れた景色だ。その拍手はイベントの開始に対する儀礼。私は両手が塞がっているので、今日は心の中で拍手をした。

まもなくして大型ビジョンに映し出されたのは「ジークの剣^{つるぎ}」というタイトルロゴ。そして始まったのは、秋葉原で繁栄するサブカルチャーの内の一つ——アニメである。イベントとは、去年テレビで放送されて人気を博した子供向けアニメ、「ジークの剣」の全五十一話を大型ビジョンで毎日三話ずつ放映するという企画だ。

二週間前に初めてこの秋葉原を訪れた際、私は偶然このイベントに遭遇した。

何の因果か、そのタイミングこそまさにこのイベントの初回、つまりストーリーの始まりで新参者にも入りやすい第一話から第三話までが放映されるタイミングであり、私はすっかりその内容の虜になってしまったのだ。

「ジークの剣」は、困っている者が居れば放っておけない性格のジークという主人公の少年が偶然手に入れた光の剣——「グラム^{グラム}」をめぐる冒険譚である。

物語の主軸となる剣の名前が私の扱う聖槍と同じグラムだったことも気に入った要素の一つだが、私が毎日欠かさずこの場所を訪れるようになるほどに惚れ込んだのは、子供向けらしく分かりやすくも、しかし単純な勧善懲悪ではない深みのあるストーリーだ。

デジタルワールドにも物語というものは存在するが、大抵はただ正義のデジモンが悪のデジモンと戦って勝つだけの——言ってしまうえば、退屈な話である。

しかしこの「ジークの剣」は倒される悪側の事情、戦う理由までもをしっかりと描いているのだ。それが子供のみに留まらず、大人にも人気が出た理由の一つだという。

作品のキャッチコピーは、『正義の反対は——』。
続く言葉は公式には名言されておらず、諸説ありつつもファンの考察では『また別の正義』というのが最有力らしい。

私はこれまでの生涯においては自らの正義に従い、弱きデジモンを守るためには悪を問答無用で挫いてきた。だが、あるいはその悪にもそうせざるを得ない事情があったのかも知れないとは、一度たりとも考えたことが無かった。

私の所属するロイヤルナイツの面々が、同じ主君に仕えていながらもそれぞれ異なる形の正義を掲げているように、私が倒してきた悪たちも『また別の正義』を持っていたのかもしれない——そう教えられたのだ。

これから私は悪と戦う時、もしも相手が何らかの事情を抱えて致し方なく悪となった者だと気付けたのなら、その時は戦って倒す以外の解決法を見出そうとするだろう。

「ジークの剣」は、私というデジモンの在りようを確かに変えたのだ。

だから私は、自身にそのような影響をもたらしたこの作品に深く感心し、いたく気に入

ったのである。

同時に私は、この作品を作ったニンゲンがいったいどんな人物なのかをこの目で見てみたいと前々から思っていた。

そして今日、私はこのイベントが終わった後には、「ジークの剣」の製作総指揮を手掛ける甘岡鈴二あまおか りんじという男に会いに行くつもりだ。

「ジークの剣」に関する情報をSNSで調べている際に知ったのだが、どうやら彼は三日ほど前から東京都内の大学病院に入院しているらしい。

情報の出どころはSNSのいちユーザーの書き込みで、一時的に広く拡散されたようだが、現在は削除されている。

その件に関する公式メディアからの反応もないため、情報の信憑性は薄いとは思いますが、会える可能性がわずかにでもあるのなら、足を運んでみようとは私は考えていた。

入院しているという話が真っ赤な嘘で、甘岡鈴二が無事である方がもちろん喜ばしいのだが——今はその件については考えず、ただ「ジークの剣」とおでん缶の味を楽しもう。



この世界での長距離移動について——物質化した体を再度デジタル化し、デジタルデータとなってインターネット回線を通じて移動するという方法も一度試してはみたのだが、デジモンのデータ量の移動に耐えられなかったのかパンクさせてしまったため、以降は物質化した体のままで空中を移動することになっている。

デジモンは究極体ほどの力を持った形態レベルに進化すると、翼や推進器スラスターを持たずとも『この位置に移動したい』と意識するだけでY軸方向への移動——つまり実質的な飛行や浮遊の能力を得る。

私はその能力を用い、すっかり暗くなった夜の空を駆けて、甘岡鈴二が入院しているという噂の大学病院へと向かっていた。

「あの方は……私ならばこの世界に興味と愛着を持ち、デジモンとニンゲンの共存の道を真剣に探すだろうと踏んで、私を送り込んだのだろうか。……むっ！」

目的の大学病院が見えてきた。

えんじ色をした、箱を積み重ねたような形状の病院である。屋上の看板がライトアップされており、そこには「仁馬門じんばもん大学医学部附属病院」と記されていた。

営業は夕方に終了しているようだが、明かりの点いている部屋がまだいくつもある。

私は病院の上空で停止すると高度を下げ、締め切られたカーテンから明かりが漏れている一室を覗いてみた。

私の目が良いお陰か、目を凝らせば、カーテン越しにうっすらと部屋の中の様子が窺える。看護師の女性がパソコンに向かい、キーボードを打っていた。

ゆっくりと病院の周囲を浮遊しながら、他の部屋も順番に確認していく。

照明が点いている部屋にはいずれもニンゲンが居て、それはこの病院に務めている医療従事者であったり、ベッドの上でテレビを見たり読書をしている患者であったり。

そうして十室目に訪れた最上階の個室で、私は彼を見つけた。

「……これは……」

しかし私の心に訪れた気持ちは、「ジークの剣」の製作者に会えたというファンとしての感動などではなく、崖から突き落とされたかのような衝撃と動揺だった。

凄腕のアニメーターでありながら、監督や脚本家として「ジークの剣」を含む多数のヒット作品に関わり活躍してきた若き天才——甘岡鈴二。

ベッドの上に横たわる彼の顔や上半身には、周囲に配置された機器から伸びる無数の管が絡みつくかのように繋がれていた。

目を閉じたまま動かない彼の傍らには、幼い子供と金髪の外国人男性が椅子を並べて座っている。子供は恐らく甘岡鈴二の息子か娘、体格の良いスーツ姿の男性の方は彼の友人だろうか。

子供は今にも泣きそうだが我慢していて、男性は沈痛な面持ちをしながらもその子の頭を優しく撫でていた。

ダウンロードしておいたアナログワールドのデータを用いて、甘岡鈴二の状態や周囲の機器から得た情報を照合したところ、彼は脳死の状態にあると分かった。

脳とは体に命令を出す役割を持つ人体の中核であり、デジモンで言うところの電脳核デジコアにあたる器官だ。その機能が不全になっていることはつまり、生きながらにして死んでいる状態。脳幹がまだ動いている植物状態とは異なり、脳全体が停止している脳死は、回復の見込みも無いようだ。

入院しているということは、もしかすれば重症なのかもしれないとは覚悟はしていた。

だが、これほどまで酷い状態だとは思いもしなかった。

失意。落胆。意気消沈。

心が暗くなつていき、私は茫然自失と立ち尽くしていた。

しかし、私はその中で——ついに泣き出してしまった子供の姿を目の当たりにし、我に帰る。

甘岡鈴二の状態がどうこうではない。

私の掲げる正義は、弱きデジモンを——いや、弱き者を守ること。相手がデジモンであれニンゲンであれ、泣いている子供のことを見過ごすわけにはいかない。

甘岡鈴二の手がけた「ジークの剣」のジークも同じ状況に在れば、絶対にあの子の涙を止めようと行動するはずだ。

「あの子を泣き止ませるには、恐らく甘岡鈴二を目覚めさせる他ないだろうが……」

私は腕を組み、目を閉じて考える。

自身にインストールされたニンゲンの脳や体に関するデータを探る。

そうしてひたすらに思考を巡らせ、やがて一つの案に思い至った。

「……いずれにせよ甘岡鈴二の体は長くは持たない。なら、やってみるしかない」

私は、甘岡鈴二の脳への侵入を試みることにした。

当然ながら前例は無いし、どうなるのかは分からない。私の計算では途中までは問題無いのだが、どうしてもニンゲンの脳が備え得る未知の力ポテンシャルを信じなくてはいけない部分がある上に、脳内に入れたところで何も出来ない可能性もある。

甘岡鈴二という存在がまだこの体の中に残っているのかも分からない。あるいはその試みによって、私が甘岡鈴二の肉体を死に至らしめてしまうことになるかもしれない。

だが仮に失敗する可能性が高いと分かっていたとしても、このままでは死にゆく一方の彼を救える可能性がわずかにでもあるのなら、怖れてなどいられない。

私は覚悟を決め、甘岡鈴二の側に設置された生命維持装置へ窓越しに手をかざした。

同時に、私の体のデジタル化が始まる。

実体を持っていた体が、足元から消えるようにして不可視のデジタルデータへと変換されていく。

五秒ほどをかけてデジタルデータの塊となった私は、窓をすり抜けて、甘岡鈴二に繋がったデジタル機器——生命維持装置の内部へと入り込んだ。

デジタルデータのままではこれ以上は進めない。

だが、ニンゲンの体は脳から発される電気信号によって動いており、脳と体は神経という電気の通り道で繋がっている。つまり私が電気信号となれば、人体から遡って脳へ入ることも可能なはず。

そこまではいいが、問題は脳に入った後のことだ。電気信号の状態では幼年期のデジモンよりも単純で単純な思考しか出来なくなるため、脳まで辿り着いたのなら体をデジタルデータに戻さなければならない。

戦闘の必要が無い以上は、容量を抑えた圧縮状態にまで体を戻せば事足りるだろう。しかしそれでもなおニンゲンの脳というストレージが、莫大なデータ量を持つ究極体デジモンである私の存在に耐えられるかは分からない。

諸説ある中の一説によれば、驚くべきことにニンゲンの脳の記憶容量は250万ギガバイトにも及ぶという。

正直なところ信じがたい話ではあるが、もしそれが事実なら私一体が脳に入ってきたところで問題は起きないだろう。だから、信じよう。

私は己の体を構成するデータを分解して、デジタルデータから電気信ごうへとへんかんすると、あまおかりんじのあたまにむかった——

——あたたかい。それに、どうしてか力が湧いてくる。

体を電気信号から圧縮状態のデジタルデータに戻した際にまず感じたのは、全身を優しく包まれるような心地の良い暖かさ、得体の知れない力の湧き起こりだった。

ニンゲンの脳にはニンゲン自身も解析し切れていない未知の部分が多いと聞くが、デジモンに影響を与える何らかの要素も備わっているのかもしれない。

私の目に見えているのは、規則性の無い形で無数の灰色の紐が周囲に張り巡らされている、真つ暗な空間。

ひとまず、甘岡鈴二の脳への侵入には成功したようだ。ここは恐らく、甘岡鈴二の脳内のどこかに存在する、実体を持たないデジタル領域——電脳空間とでも仮称しようか。デジタルデータ状態の私にはこの空間の形がはつきりと見えていて、触れることも出来る。

ニンゲンの脳はアナログとデジタル両方の特徴を併せ持つ、いわばハイブリッドの構造をしているとの話だったから、データ化した状態であればこういったデジタルな領域に入り込めるかもしれないと踏んだのだが、ひとまずその賭けには勝つたらしい。

私がこの暗い脳内空間に辿り着けたということは、体の方とはかく脳は私という大容量データの侵入には耐えてくれたのだろう。

まずは何が出来て何が出来ないのかを調べなければ、と思っていたその時——

《なんだろう……この懐かしいドット絵は……？ 今時、16×16ピクセル……？》

男の声。脳から発せられた波動が声のような形になって、聞こえてきた。

ドット絵というのは、データを圧縮したことで描画が簡易化されている私の姿のことだろう。彼には私の姿が認識出来ているようだ。

《甘岡鈴二か。良かった。脳が死んでいても、まだ意識は残っていたのだな》

《喋った!? いや、それよりも脳が死んでいるって……やっぱり僕は、一芽ひめを庇って階段から落ちた時に……そうだ、一芽——僕の娘が無事かどうか知らないか!?》

《娘か。ここへ入ってくる時に見かけたが、ケガをしている様子は無かった》

《そう、か……なら、良かった。でも僕がこれじゃあ、良くはないか……》

初めに私の正体を知りたがると思っていたのだが、まず娘の心配をするとは感心だ。

デジモンには血の繋がりと概念が無いものだからその気持ちは量りかねるが、彼は娘のことをよほど大事にしているのだろう。

《ところで、可愛いドット絵の君は何者なんだい？ 僕を迎えに来た死神とか……？》

《死神ではない。そうだな……私は、この地球とは異なる世界から来た者だ》

《異なる世界——異世界！ 本当にあるんだね、異世界って！ でも、その異世界からやって来た君がなぜ僕の中なんか？ ……もしかして、僕の体に乗っ取るつもりか!?》

《落ち着いてくれ。そんなつもりは毛頭ない——と言えば嘘になるか。私は可能ならば貴方の体を勝手に動かして、あの子——貴方の娘を泣き止ませようと思っていたのだから》

《えっ？ 泣き止ませ、ようと……？ じゃあ君は……見ず知らずの僕の娘を慰めてくれ

ようとして、わざわざ僕の中に？」

《そうだ。泣いている子供を見過ごすなど、私の正義に反することだからな》

私は彼いわくドット絵に見えるという両腕を挙げながら、自分の頭上に太陽を模したアイコンを表示させてみた。

《……なんだい、その動き？》

《少しでも貴方の警戒心を解きたくて、やっている。ボディランゲージというやつだ。むっ、そういえば……ニンゲンの男性はアレが好きだと聞いたな。どれ……》

私はふと思ひ立ち、自分の中の不要なデータを指定して一つに纏める。

そして、それらに黒く塗った三角状のテクスチャを貼り付けてから、体の外に排出した。

《なっ……そ、それ、もしかして……!?》

《どうだ？ 好きなのだろう、これが》

《……ぶっ、フッフ……！ 異世界人が、僕の中で、ウ、ウン……つくく……あははっ！》

私の一芸を見て、甘岡鈴二は大笑いしていた。姿は見えなくとも声色だけで彼が楽しんでくれたことが伝わってくる。ニンゲンの男性がアレを好むという話は事実だったようだ。

《はーっ……すまなかったね、ドット絵さん。僕の娘のためを思って行動してくれた君を疑ってしまうなんて、本当に申し訳ない》

《構わない。反対の立場だったのなら、私もきつと侵入者のことを恐れていたはずだ》

ひとしきり笑った後で謝ってきた甘岡鈴二にそう返しながら、私は波状のエフェクトを放って例の不要データを削除した。そのまま残しておくわけにもいくまい。

《そうだ、異世界と言えば君はもしかして……エアーツリー近くの空の穴から現れた、赤マントの怪人だったりしないかい？》

《いかにも。ニンゲンにはそう呼ばれて……恐れられてしまっているようだ》

《おお、やっぱり！ 白黒だから色は分からないけど、ドット絵がなんとなく似ているから、そうじゃないかと思ったんだ！ まさかこんなところで会えるなんて！》

奇妙なことに、私が「赤マントの怪人」と知った甘岡鈴二は、興奮している様子だった。

《僕も娘も君のファンなんだけど、あれ以来いつたどこに隠れていたんだい！？ 人間の体内を渡り歩いてたとか!?》

《いや、ニンゲンの体に入ったのは今回が初めてだ。今までは姿を透明にして活動していた。それよりも、私が恐ろしくはないのか？》

《全然！ 周りみんなビビってたけど、僕は初めに君が穴を閉じる動画を見た時から、赤マントの怪人は悪いヤツなんかじゃないって思ってたんだよ！ そして今、それが確信に変わった！ だって本当に悪いヤツだったなら、わざわざあんなものを見せびらかしてまで僕の気を引こうだなんて考えるわけが——っぶ、フ、フッフ……！》

甘岡鈴二は早口で話している途中で吹き出し、また笑い始めた。

《そこまで面白がってもらえるとは思わなかった。アレは我々の世界においては、一部の

種族を除いては、そう有難がられるものではないのだが……」

「い、いや、こつちでも大体同じ扱いだよ。僕の感性が子供なだけで……一般的な成人男性だったらドン引いちやうだろうし、今後は封印することをおすすめするよ」

「そうなのか……難しいものだな、ニンゲンの感性は」

私は唸りつつ腕を組もうとするが、描画が簡略化された体では腕に腕が届かず、諦める。《話が逸れちゃったけど……君は僕の名前を知っていたよね？ ってことは、君が僕の入院している病院を訪れたのは偶然じゃなくて、僕に会いに来たからだと思うんだけど……違うかな？》

「察しが良いな。元々私がこの世界にやって来た目的は、視察調査のためなのだが……その任務の最中にジークの剣を見て、すっかり気に入ってしまったな。それでどんな人物があのアニメを作ったのかを知りたくなって、こうして貴方に会いに来たのだ」

《それ……もしかして、秋葉原で!?!》

《そうだ。こうして脳内にまで入ってきたのはあの子のためだが、計らずも直接貴方と話す機会を得られて嬉しい。貴方があのイベントを開催してくれたお陰で、私は一層とこの世界のことを好きになれたのだ。ありがとう》

私は頭を下げてお辞儀を試みようとしたが、圧縮状態では首が描画されておらず頭が動かせなかったため、屈むような形でなんとか謝意を示した。

「いや、こちらこそありがとう！ まさか赤マントの怪人さんに気に入ってもらえるなんて、思いもしなかった！ ノリで考えて強行したイベントだったんだけど、まさかこんな奇跡に繋がるなんて思いもしなかった……勢いって、やっぱり大事だな……!」

甘岡鈴二の表情や身振り手振りは分からないが、私の気持ちは伝わったようだ。彼の声は喜びの感情に溢れていて、それは私にとつても嬉しい反応だった。

《あっ、日程的にまだ最終話まで見てないと思うけど……現時点で一番好きな話は!?!》

《第三十二話、命尽き果てるその刻まで。それまで幾度となくジークの行く手を阻んできた、闇の剣「バルムンク」の使い手であるライバル——》

「——シグルドの戦う理由が初めて明らかになる話だね！ 即答なんて、大ファンじゃないか！ あの回のバトルシーンには、僕も久し——アニ——ター————参加し————」
突然、甘岡鈴二の言葉が途切れて、それから聞こえなくなった。

甘岡鈴二の意識と普通にやり取りが出来ているお陰で忘れかけていたが、彼の容体が危険な状態にあることに変わりはない。あるいは、今の会話が最後だということも——

《————さん——怪人さん？ 聞こえるかい？》

《ああ、聞こえる。戻ってこれたか、良かった》

再び彼の声が響いてきて、私はひとまず安堵する。

《頭の中にまでファンが押しかけてきてくれたことが嬉しくて、つい興奮しちゃったのがいけなかったのかな。それか、もしかしたら……もう時間が無いのかもしれないね》

《…：…：そうか》

ジークの剣について、語りたくないこと、問いたいことは山ほどある。

しかし、悠長に話してはられないようだ。

《単刀直入に聞きたいんだけど…：…：怪人さんって、僕を蘇生させたりすることって出来ないかな？ ほら、あんな大きな空の穴を閉じてみせたぐらいだし、僕の頭の中に入ってくるなんてこともやれる君なら、もしかしたら…：…：》

《調べてみよう。少し待っていてくれ》

《本当かい!? よろしく頼むよ!》

脳内空間の解析を開始。体の描画こそ簡略化しているものの機能のデータは圧縮していないから、問題無く万全に扱える。

甘岡鈴二に残されている時間がどれほどか分からないため、詳細な解析ではなく速度を重視しての解析を行ったところ、十秒ほどで答えは出た。

もつとも、それは芳しくない結果だった。

《…：…：正直に伝えよう。蘇生は可能だが、貴方の意識を残したままの蘇生は出来ない》

《それは…：…：どういう？》

《どうしてか貴方はまだ意識が残っているが、脳は全体的に損傷していて、機能が完全に止まってしまっている。だが私がこのまま貴方の中に留まり、それらの機能を補う新しい脳となって電気信号で命令を出せば、貴方の体を動かすことは出来る。全体的な損傷に加えて脳神経が断線しているところも多いが、デジモン——デジタル生命体の私ならば、断線したままでもレーザー通信のような形で電気信号を伝えられる》

解析によって導き出された確たる事実を、淡々と伝えていく。

《だが、私が貴方の体を動かすためには、貴方の意識が接続されている中枢部——いわば操縦席とも言うべきたった一つの席に、貴方に代わって私が座らなければならない。そして貴方がその席を私に譲った時、抛り所を失った貴方の意識は恐らく、ただちに消滅してしまうだろう》

つまり、どうあっても甘岡鈴二本人はもう娘と会うことは出来ない。

直接そうとは言わなかったが、察したのだろう。彼は反応もせず、ただ沈黙していた。

《…：…：そうか。君が言うのなら、そういうものなんだろうな。調べてくれてありがとう》

しばしの沈黙の後、甘岡鈴二は感謝を述べた。

その口調はまるで全てを受け入れたかのように、静かで落ち着いていた。

《君に頼みたいことがある。受けるかはともかく、聞いただけ聞いてくれないかな?》

《ああ。話してくれ》

よほどの無理難題でもなければ頼みを受け入れる気で、私は甘岡鈴二に続きの話を促す。私に新たな視点をもたらした“ジークの剣”という作品を創り、私に出会わせてくれた甘岡鈴二というニンゲンには、何らかの形で報いたい。

《このままじゃ、僕の体は死んでいく一方だ。だけど、君なら僕の体をい・か・す・こ・が・出・来・る。生存させるって意味での生かすと、活躍させる方の活かすって二つの意味でね。だから君さえ良ければ……僕の体を君に譲りたいと思うんだ》

《何……？》

《君は僕たちの世界の視察調査に来たんだよね。デジモンって言ったか、君たちの種族がこの世界を調べようとしている理由は、移住か——侵略を考えているからじゃないかい？》
想定外の提案に困惑させられた直後に今度は凶星を突かれ、私は押し黙る。

我々デジモンが場合によってはこの素晴らしい世界を侵そうとしているという事実は私にとって負い目であり、その事実を原住民であるニンゲンに——しかも、私がこの世界を気に入った大きな要因である“ジークの剣”を創った甘岡鈴二に見抜かれたことで、私は強い罪悪感に苛まれたのだ。

だが、それを罪だと感じるならば尚のこと、私は正直に彼と向き合わなければならぬ。
《……その通りだ。我々の世界には緩やかながら滅びの危機が迫っていて、ゆえにデジモンはワームホールで繋がったこちらの世界への移住を検討している。そして我が主君は、可能であればニンゲンと共存したいと考えつつも、事と次第によっては強硬手段を取ることも考えているようだ。だが、私は——》
《——人間と平和的に共存したいと思っっている？》

私を遮って甘岡鈴二が言ったのは、一言一句違わず、まさしく私の言葉の続きだった。
《お見通しか》

《優しい君ならそう考えてくれるだろうな、って思っただけのことだよ。それに、エアーツリーに現われた君の大きさとか挙動を見るに、多分僕たち人類はまともに戦っても勝ち目がない。だから君には是非、人類とデジモンの共存ルートを推し進めてもらいたくて》
《それは私にとっても望むところだ。しかし、貴方に体を譲ってもらうことと、共存についての話の繋がりとは？》

《ほら、君の体はこの世界で活動するには大きすぎるだろう？ 現状じゃ調べられることにも限界があるはずだ。けど僕の体を使えば、人間の社会の中に紛れて、もっと詳しく人間とこの世界のことを調べられる》

《確かに……この体では地上を歩いたり、建造物に入ったりすることは出来なかったな》
意図的に成長期まで退化して体格を小さくすれば、それらも可能になる。しかし私がそうしなかったのは、再度究極体まで進化するには莫大な進化因子が必要だからだ。

アナログワールドにはその因子が含まれる電力とデジタルデータが溢れているが、成長期から究極体に進化するための量をそれらだけで賄うとなると、電力なら災害レベルの大規模な停電を、デジタルデータなら大規模なデータ消失事故を引き起こすこととなり、ニンゲンに多大な損害を被らせてしまう。だから、しなかった。

《人間と共存する道を考えるのなら、僕たち人間と同じ視点に立って、君自身の目で色々

なものを見てみるべきだとも思うんだ。どうだい？」

「確かに、魅力的な話だ。だが……頼み事というのはそれだけではないのだろうか？」

私は確信の上で、そう聞き返す。

甘岡鈴二は良いニンゲンだ。ニンゲンとデジモンの共存を望んでいるのも本心だろう。

しかし彼には、もっと大事にしているものがある。

《察しが良いね》

彼は様々な想いを込めるかのように、勇気を出すかのように、数拍を置いて――

《……君にしばらくの間、僕の娘――一芽の面倒を見てもらいたい》

甘岡鈴二が言い放ったのは、私の考えていた通りの願いだった。

《知り合って間もない私に、大切な娘を任せるのか？》

《僕は人を見る目には結構自信があつてね。僕がイケると見込んだ人に頼みごとをした時、

それで上手くいかなかったことは今まで一度も無い、つてぐらいにはね》

《大した慧眼だな。私が初の失敗例にならないといいが……》

彼の体を借りてニンゲンとして生活することは、甘岡鈴二がアピールした通りに任務の一環となり得るだろう。

子供の世話についても私はむしろ好きならいで、幼年期や成長期のデジモンの面倒を見た経験も少なからずある。

だが、甘岡鈴二がきつと何より大事に思っている娘を安易に預かるわけにはいかない。

《仮に私がそれを受けたとしてだ。私がデジタルワールドに帰るタイミングか、私の不手際によってかは分からないが……いずれあの子は何らかの形で、父親の正体が偽物に変わっていたと知る。その時彼女は何を感じると思う？ そこまでは考えたか？》

《それは……分からない。こんなことは確かに、苦し紛れのその場しのぎでしかないのかもしれない。でも僕が一芽のために出来るのはもう、君に後を頼むことぐらいなんだよ》

甘岡鈴二の声は迷いの色を内包しつつも、しかし強い意思を宿している。

彼は本気で、私に娘のことを託すつもりのようなのだ。

《言っていないが、金髪の男が貴方の娘と一緒に居た。あの男に任せられないのか？》
《……力矢か。忙しいだろうに、わざわざドイツから来てくれたんだな。あいつは子供の

頃からの親友で、確かに良いヤツだ。きつと一芽の父親代わりにはなってくれと思うけど、

実の父親そのものにはなれない。でも、君なら……甘岡鈴二になれるんだよ》

《脳内に残された記憶を読めば、貴方の真実は出来るかもしれないが……それでも中に入っているのはあくまでも私だ。ましてや私はデジモンで、心まではニンゲンにはなり切れない》

《僕はそうは思わない。君は相手に寄り添おうとする気持ちをしっかりと持っていて、そこらの人間よりよっぽど優しい。他のデジモンがどうかは分からないけど、少なくとも君の心は人間とそう変わらないよ。多少のボロは……頭を打って性格が変わったことでこ

まかせばいい」

初対面からそれほど時間が経っていないというのに、甘岡鈴二は私のことをずいぶんと高く評価してくれているようだ。

彼の頼みを聞き入れるかはともかく、それは素直に嬉しい。

「そもそも、偽物の中身を入れてまで維持しなければならぬほど、実の父親という存在はあの子にとって重要なものなのか？ 我々デジモンには血の繋がった親族という関係性が存在し得ないから、どうにも分からない」

「親族が存在し得ない……：：：そうなのか。でも、仲間みたいなものは居るだろ？」

「今でこそ同志や盟友、私を慕ってくれる仲間のデジモンは多いが……：：：子供の頃の私は独りだった。デジモンには大抵同族が居るものだが、私にはそれが居なかったからな」

「……：：：そっか。でもそれなら、君はなおさらあの子の気持ちを分かってくれはるはずだよ。今のように仲間が出来るまでは、君は同族が居なくて寂しかっただろ？」

「……：：：ああ、そうだな。寂しかった」

思い起こすのは、孤独に過ごしていた成長期の頃のこと。

幼年期の時は他のデジモンに混じって暮らしていたが、爬虫類型の成長期へ進化した際、古代のデジタルワールドにおいて暴虐の限りを尽くしたという邪竜型デジモンと同一の刻印が体に現れたせいで、私は「災いをもたらす者」と見なされ、住処を追われた。それから行く先々で忌み嫌われるようになり、時には迫害すらされた。

昼は誰にも見つからないようにと衆目を避けて行動し、夜は一日一度のわずかな量の食事を独りで口にして、硬い地面の上で身を丸めて独りで眠る。

同族がどこかに居るはず。明日こそはきっと見つかるはず——

そう信じ続けて毎日を生きていたあの頃は、確かに寂しくて寂しくてたまらなかった。

「実は、僕は親に捨てられた孤児ってヤツだね。同じ境遇の子が集まっている孤児院に居たから君ほどじゃないと思うけど、僕も同族——血の繋がりがある親族が居ないってことが寂しかった。そして、一芽には……：：：血の繋がった親族がもう僕しか残ってないんだ」

「何？ 母親の方はどうした？」

「一芽を産む時に亡くなった。僕も、亡くなった妻も孤児だったから、血の繋がった親戚は居ない。これで僕まで居なくなったら、あの子は天涯孤独になる」

天涯孤独——血縁関係にある人物が一人も居ないこと。

そのままの意味を適用するとデジモンは全ての個体が天涯孤独ということになるが、同族が他に存在しているのなら、血縁関係にある親族が居るようなものだろう。

それならば、同族のデジモンが存在しない私は天涯孤独の身と言える。幼年期から究極体に至るまで、自分と同じ姿をしたデジモンと出会ったことは一度たりとも無いのだから。

ゆえに私には分かる。天涯孤独は、とても寂しいものだ。

「僕はなんとか乗り越えられたけど、一芽も同じように上手くいくとは限らない。何より

…一芽には、僕と同じ寂しい思いをさせたくないんだ。形だけの偽物だろうと——って
言ったら君には失礼だけど…一芽にはなるべくの間、実の父親と過ごしてほしいんだ》
《…：父親、か》

私は確かに天涯孤独だった。だがそんな私にも、手を差し伸べてくれたデジモンが居た。
父親の定義は意味こそ理解していても感覚が曖昧だが、あのデジモンこそが私にとつて
は父親にあたる存在なのかもしれない。

成長期の頃——悪意を持ったデジモンに襲われていた私の前に現れた彼は、一撃でその
完全体デジモンを撃退すると、ケガの手当てだけでなく、孤独な私を慮ってじっくりと話
を聞いてくれた。

その後も彼は、頻繁に様子を見に来てくれた。デジタルワールドの要所の守護を担う「三
大天使」にして、善の象徴たる天使型デジモンたちの総指揮を執るといふ多忙の身にもか
かわらず、いちデジモンに過ぎない私によく目をかけてくれたのだ。

《思えば…：私には、父親のような存在が居た。命を助けられたこともあったが、それだ
けではない。一時的にだろうと彼が側に居てくれたことで、私の心がどれだけ救われたこ
とか。私が腐らず己なりに正しく在れているのは、あのデジモンのお陰だろう》

《良い人——いや、良いデジモンだね。僕もそのデジモンに会ってみたかったな。君とこ
うしているように、色々なデジモンと話してみたかった》

甘岡鈴二の言葉からは名残惜しさがにじみ出していた。消えたくないのだろう。

しかし彼はまもなく、間違いなく、消えてしまう。このままでは、娘を独り残して。

ならば、私は——

《——安心してくれ、甘岡鈴二。かつて私がそうしてもらったように、今度は私があの子
の側に居よう。何もかも貴方のようにとはいかないだろうが、私なりに努める》

《…：ありがとう》

甘岡鈴二は、私に礼を言った。短くともその言葉には、私に対する大きな感謝と、娘に
対する万感の思いが籠もっていた。

《ただし、いつまでも一緒に居てやれるわけではない。先ほども言ったが、視察調査の結
果を報告するためにも、私はいずれデジタルワールドに戻らなければならないのだ。そう
だな…：長くとも五年が限界だ》

《いや、むしろ五年も一緒に居て——かい？ 充分——》

そんなところでまたしても、甘岡鈴二の声が途絶え、聞こえなくなってしまった。

《聞こえ——かい——怪人さん？——さん——》

《聞こえてはいるが、声が断続的なままだ。いよいよ、時間は無いか》

《——本当は一芽の——何を——のか、どうやっ——世話したら——教え——けど——》

《その辺りは貴方の記憶を読んで、上手くやってみせよう。それよりも、あの子に…：ヒ
メに何か、貴方から伝えたいことはないか？》

私が問いかけると、少しの間を置いてから、甘岡鈴二は答えた。

《——ベタ——けど——今までも——からも——ずっと——るよ——って——》

《……確かに聞き届けた。私が甘岡鈴二として目覚めたら、伝えよう》

肝心な部分が聞こえなかったが、確認する必要はない。

当てはまる言葉は一つだ。

《——最後——君の——名——教え——》

《……そうだったな。名乗るのが遅れた非礼を詫びさせてくれ》

デジタルワールドにおいて我々ロイヤルナイツの面々の名は広く知れ渡っているから、わざわざ名乗る機会がめっきり減っていたため、つい忘れてしまっていた。

《私の名は、デュークモン。デジタルワールドの管理者——「イグドラシル」に仕える聖騎士、ロイヤルナイツが一角だ》

《——デューク——公爵——君に——しい——前——》

恐らく彼は『君に相応しい名前だ』と言ってくれたのだろう。

断片的ながらも彼が言ったように、アナログワールドの言語での「デューク」という言葉は、最高位の貴族にあたる「公爵」を意味している。

最も高貴とされる者の名が相応しいとは、我が名に対する至高の称賛である。

《あり——とう——デューク——あとは——しく——》

《話せて良かった。貴方と「ジークの剣」に誓って……ひと時といえどヒメと共に在り、そして必ずこの世界を守ると約束しよう》

消え行く甘岡鈴二へ誓いを立て、私は覚悟を決めた。

私はこれから甘岡鈴二を——この手で殺す。

そうせずとも少し待っていれば、甘岡鈴二の意識は自然と消滅することだろう。それならば私は手を汚さずに済むが、彼の意識が不具合に大きく侵されていることから推察するに、消滅を待っているその間にも体の方に致命的な不具合が生じる可能性がある。

そうなつては、甘岡鈴二からの頼みを果たせなくなるかもしれない。

情けを掛けて本懐を遂げられなくなるなど、私も彼も望むものか。

ゆえに私は、甘岡鈴二の意識を脳の中枢に存在する操縦席コックピットから切り離し、そこへ座ることによって彼の体の制御権を奪い取らなければならない。

《さらばだ。甘岡鈴二——いや、鈴二よ》

彼に別れを告げて、私は鈴二の脳の中枢への進入を——いや、侵入を開始する。
本物の鈴二を消し、偽物の鈴二となるために。

デジモンとニンゲンが共存する未来のために。

鈴二の娘——ヒメのために。

すぐ側から聞こえる、すすり泣く子供の声。

薬品類のそれが混じり合った、何とも言えない匂い。

顔や体のところどころに纏わりつく管と、全身を包む柔らかなシートとブランケットの感触。

舌に当たっている、口から喉奥まで挿入されたチューブの微かに苦い味。

——ゆっくりと、薄目を開く。

視界に映ったのは、埋め込み式の照明に照らされた天井。

この体が数日ほど目を開けていなかった影響か、白い天井が眩しくてたまらず、私は再び目を閉じた。

ひとまず、五感はそれぞれ正常に機能しているようだ。

体の節々に痛む感覚があるのも、体内に何らかの気体を供給するためのチューブが喉奥まで入り込んでいることを不快に感じるのも、私が鈴二に成れた証拠である。

シートの内側で、拳を握る。開く。握る——それを何度か繰り返す。

自分の体を動かす時よりもわずかに遅延があるが、体も動かせている。

勿体つけて感動的に起きる必要などない。

私は口に突っ込まれているチューブを掴むと、一息に引き抜いた。

「——オエッ——げほっ、ごほっ！」

反射的にえずき、激しく咳込む。もう少しゆっくり抜くべきだった。

「パパ!?」「鈴二!?」

二人分の驚きの声が同時に聞こえた。

「パパっ！　パパーっ!!」

咳をしながらも体を起こすと、短い黒髪の幼女——一芽がベッドに乗り出して、私の胸に勢い良く飛び込んできた。

鈴二として目覚めた私が初めにやるべきことは決まっている。

本当の鈴二が遺したメッセージを、私の口から彼女に伝えなければ。

自分の胸で泣きじやくる一芽を優しく抱き締め、そして云う。

「今までも、これからも……ずっと愛してるよ」



私が鈴二として目覚めてから五日が経過した、六日目の昼過ぎ。

目覚める可能性が限りなくゼロに近い脳死判定後の状態から回復するという極めて稀な事例となったお陰で、これまでの日々は多種多様な検査と、数十人もの医師や研修医による代わる代わるの質問攻めの毎日だったが、明日の午後には退院する予定だ。

ちなみに現在の鈴二の脳の状態を見た医者たちは、『損傷したままなのに正常に機能し

ていて、まったく意味が分からない。まるでゾンビだ』と頭を抱えていた。

私はベッドの上から、窓の外に広がる青空を眺めていた。

窓にはうつつすらと、ベッドに座る青い病衣に身を包んだ細身の男——鈴二の姿が映っていた。短い黒髪の毛先が跳ねているのは、私が手入れを怠っているわけではなく、彼の髪質が元々そういうものだからだ。

ふと、病室の外からパタパタと忙しない足音が聞こえてきた。徐々に接近してくる。

私はこれから起こることを予測し、山積みの本が乗ったオーバーテーブルをベッドの足元側まで押しつけ、両腕を広げつつあぐらを掻き、受け入れ態勢を整えた。そして——

「——パパー！ おみまいだよーっ！」

「一芽——おっと！」

ガラスとスライドドアを開けて病室に入ってきた、保育園の黒い制服に身を包んだ幼い少女——一芽は、ベッドの横まで走るとその勢いのまま跳躍し、私の胸に飛び込んできた。

「一芽は運動神経が良いな。同年代でそこまで跳べる子はそうは居ないようだぞ？」

「どー、ねんど？ わかんないけどヒメね、ようちえんでもすごいジャンプだねっていわれる！ はしるのもいちばんって、せんせーも！」

一芽は私の胸の中で顔を上げ、毛先の跳ねた短い黒髪を揺らして一所懸命に話しながら、満面の笑みを見せてくれた。その様子がたまらなく愛らしくて、私はつい笑顔になる。

尊敬する鈴二の娘であるとはいえ、果たして見ず知らずの、しかもデジモンではない人間の子供を愛せるものだろうかと初めは心配していたのだが、それはまったくもって杞憂だった。可愛くて可愛くて仕方がない。

小柄な姿かたちもそうだが、挙動も言動も天真爛漫で、何もかも全てが愛おしい。

頬ずりしたくなるほどだ。いや、頬ずりしてしまおう。鈴二の遺した記憶を見た限りでは鈴二もよくそうしていたようだから、再現するべきだ。

「まったく可愛いな、一芽は」

「あひひひ！ おひげくすぐりたいー！」

一芽がこうして私に無邪気な愛を向けてくれているのは、私が鈴二の姿をしているがゆえ。当然彼女が愛しているのは中に居る私などではなく、鈴二という父親だ。

それで構わない。そのことが寂しくないと言えば嘘になるが、そうと分かった上で彼女を愛することが、鈴二にその体と娘を託された私の務めるべき役割なのだから。

愛されているのが自分でなくとも、その笑顔が自分に向けられたものでなくとも、取り戻せた笑顔をこうして見られるだけで、私には充分だった。

「一芽、走るなって言っただろー？ 転んで怪我したら痛いのはお前なんだぞー？」

頬ずりをして一芽とじゃれていると、スーツの上からでも分かるような分厚い体格をした金髪の男性が、小走りで病室に入ってきた。注意をしつつもその口調は柔らかく優しく、彼もまた一芽を可愛がっていることが伝わってくる。

男の名は、力矢・ラインハルト。生まれも育ちも日本ではあるが、濃い造形の顔立ちから察せる通りドイツ人の父を持つハーフの人間で、オールバックに撫でつけた金髪や整えられた口周りの髭は地毛である。瞳の色も天然のもので、水晶のごとく青い。

「毎日一芽の面倒を見させてしまつて悪いな、力矢」

「構わねえさ、一芽と一緒に居るとずーつと楽しいからよ。なあ、一芽ー？ 一芽も俺と居ると楽しいよなー？」

「リキヤといっしょのときはふつー！ パパというほうがたのしい！」

にこやかに同調を求めてくる力矢に対し、一芽は私の胸に顔をうずめながら首を横に振っていた。

「マジかよ……楽しかったのは俺だけだったのか……」

「フフ……一芽、世話になっているといふのに力矢に失礼だろう。そういう時は嘘だろうと楽しい、と言っておくべきだ」

「えっと、リキヤといるときも、たのしーはたのしーよ！」

一芽の正直な反応を受けて肩を落とす力矢を憐れんで私が促すと、一芽は彼に笑顔を向けながらそう言い直した。

「まあ、いいとするか……。それより鈴二、お前また口調が仰々しくなってるぞ？」

「ああ、すまない——いや、ごめんごめん。気付くと変になってるんだ」

からかうようにニヤニヤとする力矢に指摘され、私は鈴二の口調を真似てごまかす。

鈴二として目覚めて以来、彼らしく振る舞うことを常に意識しているつもりではあるが力矢にはこうして度々指摘されてしまっていた。

その時突然、私もよく知っているとおある楽曲のイントロが聞こえてきた。

「あ！ ジークのつるぎのうた！」

私と同じく熱心なファンである一芽が反応した通り、その楽曲は「ジークの剣」のオーブニング主題歌。

音の源は力矢のズボンのポケット。彼もまた、「ジークの剣」のファンなのだ。

「おっと、マナーモードにし忘れちゃってたか」

力矢は素早くポケットからスマートフォンを取り出す。

そして画面を見るなり舌打ちをすると、画面を親指で押して即座にコールを切断した。

「研究所からか？」

「おうよ。ウザくてたまんねえから着拒しとくか。あ……ば……よ……つと」

力矢は苛立った顔をしつつ私にそう返し、片手でスマートフォンを操作し始める。

「本当に戻らなくていいのか？ 十年も居た職場なのに」

「ケツ、誰が戻ってやるもんかよ、あのカス——いや失礼、畜生どもの巢窟なんかによ」

「一芽のために言い直してくれたようだけど、一般的には畜生も良くない言葉だよ、力矢」

力矢は元々、ドイツの大学に附置されている生物学研究所に勤める研究員だった。

親友である鈴二が脳死状態に陥ったことを知って日本へ向かおうとした際、『そんなことのために研究を放り出していくのなら研究所を辞めてもらおうし、学会からも永久に追放する』と上司から脅迫じみた文句をつけられたため、その上司を殴り飛ばして自ら辞職してきたようだ。

もつとも、力矢が畜生どもの巢窟と言ったことからして、彼には上司以外にも気に入らない連中が居たらしく、辞めるのも時間の問題だったのかもしれない。

インターネットで力矢・ラインハルトとその名を検索すれば、彼の論文や功績を称える記事がいくつも出てくる。界限ではそれなりに名のある人物だったようだ。

「ま、心配すんな。マジで学会から追放されることになったって、もうくたばる——いや死ぬまで遊んで暮らせるぐらいには貯金もあるからよ。研究自体は続けてえから、一応コネがある日本の研究所に掛け合っってはみるが、断られたら遊び人に転職するまでよ」

「そうか……受け入れてもらえるの良いね。……あっ」

ふと気付くと、隣に座っている一芽が私を見つめながらむっと頬を膨らませていた。

「パパ……ヒメよりリキヤとしゃべるほうがいいの!？」

「ごめんごめん。もちろん、一芽と喋る方が好きに決まっているよ」

「でしょ! はやくいっしょにほんでもよも!」

私が謝ると一芽は機嫌を直して笑顔になり、あぐらを掻いた私の脚の上に座った。

「じゃ、俺はそこらへんブラブラしてくるからよ。土産はいつも通りでいいな?」

「ああ、ありがとう力矢」

「ありがとうリキヤー! ばいばーい!」

小さく手を振る私と両手で大きく手を振る一芽に見送られ、力矢は病室から出ていった。力矢は毎日欠かさず一芽を連れてお見舞いに来てくれるが、毎回必ず一芽を私の元に置いてどこかへ出かけていき、そのまま一時間前後は戻ってこない。

直接そうとは言わないが、わざわざ私と一芽が二人きりで過ごせる時間を作ってくれているのだろう。力矢は外見こそ厳つく口調も少々乱暴ではあるが、鈴二が良いヤツと評していた通り、そのようによく気が回る優しい男だ。

一芽もぞんざいな扱いをしているように見えて、力矢にはよく懐いている。

「新しい絵本を買っておいたから、今日はそれを一緒に読もうか」

「やった! どんなやつ!？」

私はオーバートーブルの上から新品の絵本を取り上げると、後ろから抱きかかえる形で一芽に両腕を回し、見やすいようにと彼女の前に絵本を構えて、読み聞かせを始めた。



一芽と力矢がお見舞いに訪れてから、一時間ばかりが経った頃。

私は窓際に佇んで、日の暮れ始めた夕空を眺めていた。窓越しに射す夕陽によって、病室はフィルターをかけたように綺麗なオレンジ色に染まっている。

ベッドでは私の代わりに、一芽が穏やかな寝息を立てながら眠っていた。

不意に病室のスライド式ドアがゆっくりと開く。現れたのは、右手に一芽の好物の抹茶ラテが入っていると思わしき紙袋、左手におでん缶を持った力矢だった。

「おっ？ ……ああ、ベッドを一芽に取られちゃったか」

「保育園で疲れていたのかな。絵本を読んであげた後、すぐに眠ってしまったよ」

丸まって横になっている一芽の愛くるしい寝姿を二人で眺めながら、私と力矢は彼女を起こさないようにと小声で会話する。

「目が覚めた時にお前が居なかったら寂しがるだろうし、起きるまで待つとすっか……」

「悪いな、力矢。しかし明日で退院だというのに、それぐらいで寂しがるものかな？」

「お前……寂しいに決まってるだろうが、この朴念仁のバカタレが」

力矢は呆れ顔を浮かべつつも、押し付けるようにしておでん缶を渡してきた。

私は一言「ありがとう」と礼を言い、おでん缶を受け取る。缶は熱すぎず冷めてもおらず、ほんのりと暖かい食べごろの具合だ。

「で、退院した後はどうすんだ？ まさか、すぐ仕事に復帰するとか言わねえよな？」

「新しいアニメのアイデアを思い付いたから、本当はすぐにでも仕事に戻りたいけど……」
おでん缶の蓋のプルタブに指を引っかけながらベッドの足元側、端まで押しつけられたままのオーバートーブルを一瞥する。

卓上に山積みされたライトノベルやハードカバーの小説の側に置いてある、一冊のメモ帳。その中には、私が考案したアニメ作品に関する様々なアイデアが書き記されている。

私は鈴二と一体化している間、演算や処理などごく一部の機能を除いてデジモンとしての能力はほぼ発揮出来ないが、代わりに彼の体に備えられた能力を使うことが可能になっている。

ゆえに私は視察調査を続けつつも、鈴二の技術と知識、そして名声を借りて、まずは架空の存在という形でデジモンを知ってもらうためのアニメ作品を創ろうと考えたのだ。もし成功すればそのアニメは、私の目指すデジモンと人間が共存する未来への足がかりとなってくれるだろう。

本当は一刻も早く製作の準備に取り掛かりたいところなのだが、今の私にはそれよりも優先すべきことがある。

私はおでん缶を開けるのを一旦止めてプルタブから指を抜き、視線をベッドの上で眠る一芽に移す。体勢が横向きから仰向けに変わっていて、安心しきった寝顔が拝めた。

「……しばらくは仕事を休んで、一芽と一緒に居ようと思う。父親が死ぬかもしれないって思いながら三日も耐え忍んだ一芽の心は、きっと深く傷ついてしまっているだろうから」
鈴二はその意識が消える直前、一芽にどんなことをしてあげればいいのか、どのように

世話をすればいいのかということの詳細を、記憶の最後に遺してくれていた。

併せて、『デジモンと人間が敵対してしまっただけは元も子もないから、人間とは共存するべきだとアピールするためにも、イグドラシルさんから与えられた任務のことを最優先にしてくれ』という意思も。

そんな鈴二の意思に従うのなら、デジモンと人間の融和の第一歩となり得るアニメ製作を優先すべきなのだろうが、私は一芽としばらく一緒に居てやりたいと思っていた。

この体を託された者としての責任などではなく、私自身がそうしたかったのだ。

「おう、イイじゃねえか。そうだ、旅行にでも連れて行ってやったらどうだ？ いっただったか電話で話した時によ、仕事が忙しくて遊んではやれてもなかなか遠くには連れていけない、とか嘆いてたろ？」

「そう……だったな。旅行、か……なるほど、良いな……！」

力矢が名案をもたらしてくれた。

旅行ならば、一芽と一緒に過ごしつつも視察調査の任務を進められるという一石二鳥である。さらにアニメの取材まで兼ねられると考えれば一石三鳥。そして私自身も日本の名所を観光してみたいとかねてより思っていたから、一石四鳥だ。

「明日は金曜日だから、退院したら保育園に一芽を迎えに行行って、色々準備をして……早速土曜日から旅行に行こうかな……！」

「おお、そうしろそうしろ、思い立ったが吉日だぜ。来週末にはゴールデンウィークもあることだしよ……この際ドカンと休みを取って、お前と一芽の行きたいところ全部回っちゃえよ」

「全部は流石に辛いと思うが……ああ、出来る限り回ってみよう」

「パパ……リキヤ……どうしたの……？ ……ふわ、あ……」

一芽の声。ベッドの方を見ると、一芽が体を起こし、大あくびをしていた。どうやら小声でも聞こえてしまっていたらしい。

私は手に持ったおでん缶を近くのテーブルに置いてから、笑顔を見つめ一芽に歩み寄る。それから両手を伸ばして、一芽を抱き上げた。

「一芽。明日の保育園が終わったら、次の日から一緒に旅行に行こうか」

「え……!? パパとりよこう!? ホントに!? いいの!?」

旅行と聞いて嬉しくて目が覚めたのか、一芽の声は大きく、はつきりとした調子になる。「うん、本当だよ。一芽はパパが眠ってる間、いっぱい我慢して、たくさん頑張ってくれたから……そのご褒美だ。どこでも好きなところに連れて行ってあげる」

「わあー！ やったー！ パパだいすきっ！」

一芽は歓喜し、突進するかのように勢いよく私の胸に抱きついてきた。

一芽の眩しい笑顔を眺めながら、私は早速、旅行の計画を頭の中で練り始めた。



退院後、私と一芽は予定通りに土曜日から旅行へ出発した。

鈴二は自動車免許を持ってているが私は当然ながら無免許であるため、一芽には負担を掛けることになってしまいが、移動には交通機関を利用することにした。

私たちが初めに訪れたのは、茨城県に所在する海浜自然公園。目的はちょうど満開を迎えた、ネモフィラの花が咲き誇る丘である。

快晴の青空も併せ、丘一面に青い花々が咲き誇るといふ見渡す限りの青、青、青。

心が洗われるような美しく澄んだその光景には一芽はもちろんのこと、私も大興奮だった。景色を楽しんだ後は海辺で遊んで、その日は旅館に宿泊した。

次に向かったのは、私に少しばかり因縁のある場所——東京エアーツリー。

「赤マントの怪人」として空からエアーツリーを見下ろした時にもその大きさには驚かされたものだが、人間の視点で地上から見上げてみると、さらに途方もなく巨大に見えた。

最上階の天望フロアから眺める眼下の景色もまた、デジモンの目で見た時よりも壮大に映った。一芽は外を見ながら「あかマントさん、いないかなー」とデジモンの私のことを度々探していたが、もちろん私がそうだと伝えるわけにはいかなかった。

一旦東京へ戻ってきたのは一芽が連日の外出で疲れているようであれば自宅で数日休もうと考えていたからなのだが、一芽は二日連続で終始はしやぎ回っていたにもかかわらず、就寝するまでまったく疲れた素振りを見せなかった。

どうやら一芽は、同年代の子供の中ではかなり優れた体力の持ち主らしい。むしろ、運動不足で体力もあまり無い鈴二の体を使って歩き回ったせいで、私の方が疲労していたかもしれない。

一芽には問題が無いということで旅は続行。その後私たちは一週間をかけて、南日本の観光名所を巡った。

京都では伏見咲夜大社で千本の鳥居をくぐり、鹿に群がられながらせんべいを与えたり、金洛寺が金色だというのに銀洛寺が銀色ではないことに二人で文句を言った。

大阪では有名アニメ作品の世界をモチーフとしたテーマパークで、様々なアトラクションを楽しんだ。

香川の爺婆ヶ浜おきなばがはまでは、干潮時に水面に空が映る「天空の鏡」と呼ばれる絶景の中で、写真集が作れるほどにたくさん一芽の写真を撮った。

砂漠のような鳥取の砂丘を歩いた。広島に遺された人間同士の戦争の傷跡をこの目に焼き付けた。鹿児島では様々な温泉を巡って癒された。

そして、沖縄。宝石のようにきらめく透明な海は、実に美しかった。

世界最大級の巨大水槽が設置されている白海水族館しろうみでは、初めて目にする海洋生物と出会うたびに一芽は真っ黒な目を輝かせて、大喜びしていた。水族館というものはあたかも

水棲型デジモンに進化して水中を散歩しているかのような新鮮な気分になって、なかなか楽しかった。

流石の一芽にも疲れの色が見え始めており、そして何より私——鈴二の体が悲鳴を上げ、体の節々が痛むような限界を迎えつつあったため、今回の旅はそこで終わりとなった。

一芽は満足してくれた様子で、帰路に就くことになってもご機嫌なままだった。

そして、『こんどはにほんのうえのほういこうね！』と次は北日本側への旅行を希望していた。

東京へ向かう帰りの飛行機機内。

一芽は私の隣の席で、笑顔を浮かべながら眠っている。

きつと彼女の心の傷も、ずいぶんと癒えたことだろう。

そして一芽との旅は、私にとっても実りあるものであった。

鈴二の記憶の中の情報だけで一芽のことを知ったつもりになるのではなく、実際に交流することで彼女に対する理解を深められたことはもちろんだが、それだけではない。

私はこの旅を経て、人間が作り出した文化の中でも特に素晴らしく、しかも大半のデジモンが気に入るのであろう魅力的な文化の存在に、改めて気が付くことが出来たのだ。

その文化とは、料理である。

人間が作る料理は、せいぜい肉を切って焼いた程度でしかないデジタルワールドの原始的な料理とは比べ物にならないほどに手間が掛かっていて、何より美味しい。

実際、私が訪れた先で口にしたグルメは、いずれもデジタルワールドでは味わったことのないほどのとびきりの美味だった。

食事という習慣は、どんなに強大なデジモンだろうと、どんなに凶悪なデジモンだろうと、一個の生命体である以上は切っても切り離せない必要不可欠なもの。そして、美味しい料理が嫌いな者など居るはずもない。

ゆえに人間が作る料理という存在は、デジモンと人間の共存を推し進めるにあたり、デジモン側が得られるメリットとして提示出来る交渉材料になると私は考えたのだ。

人間の作り出した文化——今回の旅行で巡った観光地の景色や、アニメや小説を始めとしたサブカルチャーに私は大きな魅力を感じているが、他のデジモンがそれらに惹かれるような感性を持っているかは分からない。

だが食事であれば、幼年期から究極体までの形態^{レベル}、ウイルス・ワクチン・データの属性、さらには善悪すらも問わず、あらゆるデジモンが興味を持つことだろう。

私が何かしらの機会を設けて人間の作った料理を多くのデジモンに食べてもらい、『人間を害してしまえばこの料理が食べられなくなる』ということを広く知らしめれば、デジモンたちもファーストコンタクトから人間を攻撃しようとは思わないはずだ。

誰にでも分かりやすいメリットというのは、シンプルゆえに強い。詳細な案はこれから

練るとして、ひとまず良い交渉のカードが見つかったと思う。

あとは私が作るアニメを通じ、架空の存在という体でデジモンという存在と生態をあらかじめ人間たちに知っておいてもらえれば、交渉も多少は円滑に運べるようになるだろう。そのためにはある程度——いや、かなりの規模であるアニメを流行させなければならぬ。

だが一芽との旅のお陰で、色々とアイデアも思い浮かんだ。きっと上手くやれるはず。

一芽が座っている隣の席越しに、窓から機外の景色を眺める。

暗い空の下。地平線の向こうまで広がる街が、この世界に生きる命たちの息づき——色とりどりの灯りに照らされて、煌めいていた。

「鈴二……貴方の知識と技術を借りて、私はやり遂げてみせよう。人間とデジモンの未来のために、必ず……」

決意の言葉を吐きながら、傍らで眠る一芽に目を向ける。

人間とデジモンの共存を実現させてこの世界を守ることは、鈴二から託された一芽を守ることにのみなる。

デジモンのために、人間のために、そして一芽のために——私は持てる全力を尽くそう。



月日は流れていく。

私は甘岡鈴二として人間の社会の中に紛れ、日々の生活とアニメ製作の仕事を通じて多くの人々と関わり、人間というものを識^しっていった。

そして、可能な限り一芽と多くの時間を共に過ごした。人間にデジモンを識^しってもらうためのアニメの制作を進めつつも、取材という建前で二カ月に一回は旅行に連れて行った。条件さえ整えば瞬時に進化出来るデジモンと異なり、人間は体も心もゆつくりと進化していくものだ。しかしだからこそ、人間の子供の育成では、その緩やかな進化の過程をじっくりと愛おしむことが出来る。

デジモンの段階^{デジタル}的な進化の方が生存戦略として優れているとは思いますが、人間の連続^{アナログ}的な進化は眺めていて面白い。アナログにもデジタルにはない良さがある、と感じた。

日々を過ごすごとに新たなことを覚え、新たなことに挑戦し、心と体を少しずつ進化させていく。

そんな一芽の成長を眺めていられる毎日は、楽しくて楽しくて仕方がなかった。

そうして、月日は流れていく。

流れていく——

2019年、十一月。鈴二となってから約二年半が過ぎた、ある日曜日の朝。

私は書齋を兼ねた仕事部屋でパソコンに向かい、明日提出しなければならない新作アニメ用のキャラクターのデザイン案を練っていた。

「三つ目の案は……うーん……全体的に鎧の装飾を派手にアレンジして、ところどころに水晶状のパーツを……演出的にも映えそうだし、グラムはいっそ穂先を伸縮自在のビームセイバーにするとか……？」

ぶつぶつと呟きながらもペンタブレットの上で専用のペンを滑らせ、頭に浮かんだイメージをペイントソフト上の白紙に描いて形にしていく。絵では伝えにくいデザインの詳細や意図は、文字で記して補足する。

「それ赤マントさん？」

「うわっ!？」

背後から唐突に声がして、肩がびくりと跳ね上がった。

「一芽、いつの間に入ってきてたんだい？　びっくりしたよ……」

「へへ……びっくりさせるために、そーっと入ってきた」

椅子を回して振り返ってみると、白い歯を見せて自慢げに笑う一芽が立っていた。集中していたとはいえ、彼女が部屋に入ってきた音と気配にまるで気付かなかったのは不覚だ。

一芽は今年の春に都内の区立小学校に入学し、小学一年生となった。初めて会った時よりも背が10センチほど伸びて頭身が少し上がり、体型もすらっとしてきた。

「それより、なんで赤マントさん書いてたの？」

一芽はそう言いながら、私の背後にあるパソコンのディスプレイを指差した。

その画面上に表示されているのは、背中にマントを纏い、大仰なランスと円形のシールドを携えた、騎士を思わせる姿をしたキャラクターのラフスケッチ。

一芽が言った通りにそのキャラクターのモデルは、二年前に東京エアーツリー付近の空に現れた赤マントの怪人——デュークモンである。すなわち、私だ。

『もし私がさらなる進化を遂げるならこう成りたい』と格好良く、かつ大胆にアレンジしたつもりだが、赤マントの怪人のファンである一芽には一目でモデルが分かったようだ。

「これは、その……ネタバレになるから言えないなあ」

私はひとまずペイントソフトのウィンドウを最小化して隠し、一芽に向き直った。

この二年ばかりで一芽は体が成長しただけではなく、ずいぶんと頭も良くなった。

身体能力については幼稚園の頃から運動会のあらゆる競技で勝率100パーセントと極

めて優秀な能力を見せていたが、小学校に入ってからの一芽は全教科のテストで満点を連発し続けるという賢さも発揮していた。

だが、そんな知能と知性の萌芽ゆえか、最近は何かをごまかそうとしたり嘘をついても、一芽には見抜かれてしまうことが多々ある。

「パパ……ネタバレだって言っちゃったのがネタバレになってるよ。デジモンのアニメに出てるってことでしょ？」

「……うん……」

まさに、このように。凶星を突かれた私は、苦笑いする他なかった。

「パパが今書いてた絵の赤マントさんもカッコイイけど、なんでそのままの見た目で見えないの？ ふつうの赤マントさんが一番カッコイイよ？」

「パパもそうしかかったんだけど……偉い人に『そのままだとクレームが来るかもしれないから駄目』って言われちゃったから、こうやってアレンジしないといけなくてね。他にも鎧を真っ赤にしたり、天使型デジモンみたいに翼を生やしたりとか、色々考えてるんだ」

「そうなんだ……アニメ作るお仕事って、大変だね……」

一芽の表情には、私に対する同情の色が浮かんでいた——かと思えば、彼女は何かに気付いて目を見開く。

「あっ！ それよりパパ、デジモン始まつちやう！ 早く来て！」

「おっと、もうそんな時間だったか。急がないと」

腕を引かれて急かさねながら席を立ち、私は一芽と共に仕事部屋を後にする。

L字型の廊下を走っていく一芽を早足で追いかけて、広々とした大部屋にやって来た。

リビング・ダイニング・キッチンに仕切りを設けず、開放感のある間取りを演出すると同時に機能を統一させた、いわゆる一体型LDKの部屋である。

初冬に入って外出すると肌寒さを感じる季節になってきたが、床暖房のお陰で室温は適度に保たれており、ほのかに暖かい。私と一芽が二人とも涼しげな服装をしていられるのはその恩恵だ。

「パパ！ もうオープニング始まつちやったよ！」

一芽は先んじてリビングにあたるスペースでロングソファに腰掛けており、幼年期のデジモンを模した球状のクッションを片腕で抱きながら、私に手を振っていた。

「よっこいしょ、つと。今日は三十七話だったかな？」

「そう！ 三十七話、『最強の進化』！ ルクスモン、どんな究極体になるのかな!？」

はしゃぐ一芽の隣に一足遅れて座り、前方の壁際に設置された8K対応の大型液晶テレビに注目する。そのタイミングでちょうどオープニング主題歌のイントロが終わり、アニメのタイトルロゴが表示された。

「デジタルモンスター」。

亡き鈴二の知識と名声を活かして私が企画と総指揮を務め、数多のスタッフたちの技術

と努力を結集して創り上げた、国内外で現在進行形の一大ブームを巻き起こしているほどの人気を誇る子供向けアニメである。

崩壊の危機に瀕するデジタルワールドに何者かの力によって召喚された少年が、絆を結んだパートナーである小さな子供のような天使型デジモン——ルクスマンと共に各地を巡り、多くのデジモンとの出会いと別れ、そして戦いを経て成長していくという物語だ。

今年の四月から放送が始まったのだが、嬉しいことにDVDとブルーレイの売り上げも良く、年間を代表する覇権アニメの座は堅いとされるほどの高評価を受けている。

これまでの歴史で覇権アニメという玉座に座ってきた作品は、その多くが深夜帯に放送される大人向けのアニメ——いわゆる深夜アニメばかりなのだが、それにもかかわらずキッズ向けの「デジタルモンスター」がその座を得ようとしているのは、今作を製作するにあたって大いに参考にさせてもらった「ジークの剣」のように、子供のみならず大人にも人気が出ているという証明だろう。

主人公とパートナーがデジタルワールドを旅する模様と、状況に応じて様々な形態に進化するパートナーの戦闘シーンを派手に描いたオープニングが終わり、いよいよ本編——ではなく、CMが始まった。

CMというワードでふと思いついたが、主君から授かった複合プログラムには、「プラグインCM」という用途不明のプログラムが含まれていた。

厳重なロックが掛けられていて解析も不可能なのだが、いったい主君は何の意図であれをグラ―ネに入れたのだろうか。

「……せっかくオープニングで盛り上がったのにCM……パパー、CM無くせないの？」

「そうしたいのは山々なんだけど……色々難しい事情があつてね——つと？」

本編が待ちきれず足をばたばたと動かしながら文句を言う一芽をなだめっていると、ふと小鳥のさえずりにも似た電子音が聞こえてきた。

小刻みに連続して鳴っているその電子音の源は、テレビとソファの中間に配置されたテーブルの上——レンガ造りの壁をイメージした外装が目を引く、キーホルダー付きの四角形の玩具だ。

「えーっ!? 朝起きた時にいっぱいエサあげたのに、もうおなか空いちゃったの!? テイラノモンだったらしようがないな——」

「ふふ……恐竜型デジモンの中でも、テイラノモン系は特によく食べるからね」

一芽はソファから降りて四角形の玩具を手にとると、慣れた手つきで三つのボタンを操作して、液晶画面に白黒のドット絵で描写された恐竜型デジモン——テイラノモンにエサを与え始めた。手の掛かる子ほど可愛いという感覚なのか、呆れつつも楽しそうだ。

その玩具の名は、デジヴァイス・ギア。アニメの放送開始と同時に発売された、本編で主人公が使用している同名同形のアイテムを再現した液晶玩具で、いつでもどこでも架空のデジモンの育成と戦闘が楽しめる携帯型育成ゲームだ。

近年の液晶玩具はカラー液晶が主流にもかかわらずデジヴァイス・ギアにモノクロ液晶を採用したのは、同メーカーにてリバイバル発売が予定されていた90年代後半に一世を風靡して社会現象にまでなった液晶玩具——「タマゴツ」の開発が諸事情で中止となつてしまい、それに用いられるはずだった部品を流用したためである。

流用というと聞こえは悪いが、そのことは計らずも追い風となつた。16×16のドット絵、携帯型育成ゲームなどのタマゴツを思わせる共通の要素が大人たちのノスタルジックな琴線に触れたらしく、かつてタマゴツのファンだった人々という想定外な購入層の獲得に繋がつたのだ。

アニメとのメディアミックスにくわえてそのような幸運の助けもあり、販売を担当している玩具メーカーによれば、『デジヴァイス・ギアはこれまで自社から発売された玩具において現時点でも歴代二位の売り上げで、いずれは一位に躍り出るだろう』との話だ。

アニメとゲームの相乗効果により、「デジタルモンスター」は成功した。私の目的通りに、日本のみならず世界中にデジモンという存在キャラクターを浸透させることが出来たのだ。

目的を達成出来たことはもちろん喜ばしい。しかしそれ以上に私は、自分の関わったコンテンツが一大のものとなり、それを多くの人々が楽しんでくれているというこの現状が、楽しくてたまらなかつた。

様々なものを遺して私に貸してくれた鈴二と、「デジタルモンスター」の製作に関わってくれた人々には、どれだけ感謝しても足りない。

「よし、エサもプロテインもオツケー！ あ！ 始まった！」

CMが終わってアニメの本編が始まると、一芽はデジヴァイス・ギアを手にしたままソファへ軽快に飛び乗り、あぐらを掻いて座つた。

主人公のパートナーを務めるルクスモンは——アニメの構成と演出の都合で——基本的に成長期の形態で活動しており、有事の際は主人公が所持するデジヴァイス・ギアの力によって状況に応じた進化を行う。

今回放送される第三十七話は、エンジェモンやシーサモン、ペガスモンにクアトルモン、ホーリーエンジェモン——その他にも十種以上の多彩なデジモンに進化してきたルクスモンが、初めてデジモンの最上級の形態たる究極体への進化を遂げるという、この作品の一つのクライマックスとも言える重要なエピソードだ。

前編が終わり、再びCMを挟んでからの後編。「伯爵」と呼ばれる魔王型デジモンの率いる悪の軍団との戦いのさなか、援軍として駆け付けたこれまで助けてきたデジモンたちからエネルギーを分け与えられ、『罪の無いデジモンたちを悪のデジモンから守りたい』という主人公の強い想いに応えるために、ルクスモンはついに究極体へと進化する。

その姿を初めて目の当たりにした一芽は、「カッコイイ……」と呟きながら、きらきらと瞳を輝かせていた。

黄金の五対十枚の翼を携え、青と金の装飾が施された白銀の鎧を全身に纏う熾天使型デ

ジモン——その名もセラファイモン。

モデルとなったのは、本・当・のデジタルワールドにおいては三大天使と呼ばれ、遙か古代から“カーネル”というデジタルワールドの要所を守護し続けている偉大なデジモンだ。

そして私にとっては、偏見によって忌み嫌われて孤立していた成長期こどもの私に寄り添い、心身共に救ってくれた恩師——あるいは父親のような存在でもある。

主役である主人公のパートナーが進化する最強形態という重要なポジションにセラファイモンを据えさせてもらったのは、彼こそが私の最も尊敬するデジモンだからだ。

私情が多分に含まれた選定理由だが、セラファイモンはデジタルワールドの“正義”と“秩序”の象徴であり、あらゆるデジモンに畏敬、または畏怖の念を抱かれるほどに高名な存在なのだから、アニメでの活躍を通して人々にデジモンを代表する存在として認識されるには、これ以上ない適任者だろう。

『罪無きデジモンを蹂躪する邪悪どもよ……消え去れ！ セブンヘブンズ!!』

必殺技の名を叫び、セラファイモンが連続で光弾を撃ち放つ。避ける間も無く高速で飛来した七つの光弾は空を覆い尽くす悪の軍団の中で次々と爆ぜ、巨大な閃光となって広がっていき、悪のデジモンたちを飲み込んで跡形も無く消し去っていく。

悪を圧倒するセラファイモンの勇姿に夢中な一芽の隣で、私もまたアニメの中で躍動する彼を眺めながらに思う。いずれ本物のセラファイモンにもこの世界を訪れてほしい、と。

それが実現して、もしセラファイモンが人間の街に降り立ったとすれば、きっと彼は“デジタルモンスター”のファンに囲まれてしまうに違いない。

そして、その人気の要因が私の作ったアニメだと知れたら、意外にも照れ屋などころがあるセラファイモンはきっと『なぜ私を晒すような真似をした?』と私のことを叱るだろう。

究極体おとなにもなって叱られるのは嫌ではあるが、むしろ私はそんな日がやってくることを望んでいる。

デジモンと人間が互いを理解し合い、今の私が抱えているようなしがらみも無くデジモンが人間の前に姿を現すことの出来る時代が訪れることを、私は強く望んでいる。



“デジタルモンスター”の本編が終わり、エンディングと次回予告まで見届けた後。

「セラファイモン、すごかったー……あんなにたくさんの敵を一人で倒しちゃうなんて」

「ふふ、強くて格好良かったよね。僕が一番好きなデジモンなんだ、セラファイモンは」

私たちは昼食を調達するために散歩がてら、手を繋ぎながらコンビニへ向かっていた。

元々、昼には一芽の好物である焼きそばを作ろうと思っていたのだが、当の本人が『今日は焼きそばモンより、とりからボールモンとお米な気分!』などと言って踊り出したため、予定を変更したのである。

初冬ながら外の気温は冬本番のように低く、吐く息も白い。私も一芽もふっくらとした厚手のジャンパーを着ており、フアスナーはきっちり一番上まで閉めている。ちなみに一芽は体温が高いせいで、厚着が嫌いなようだ。

「一芽も大好きになっちゃった、セラフィモン。来週も楽しみー」

「そうかい、好きになってくれて嬉しいな。一芽が一番好きなメタルティラノモンと比べたら、どっちの方が好き？」

「メタルティラノモン！」

「ははっ、勝てないかあ……」

一芽の元気な即答に思わず笑いつつも、私は彼女の小さな手をしっかりと握りながら、濃い赤に色づいた紅葉が並ぶ歩道を歩いていく。最近によく冷えるせいか、見上げてみれば木々の葉の数は減っており、樹冠に隙間が生じていた。

アスファルトの上には、深紅の葉がところどころに散っている。

それはまさに、デュークモンたの自慢のマントと同じ色をしていた。

「そうだパパ！ アニメ始まる前に書いてた赤マントさんモン、いつアニメに出るの？ まさか敵じゃないよね？ ネタバレしていいから教えて？」

「うーん……いくら一芽が可愛くても、それだけは言えないなあ」

「えーっ、気になるよー！」

一芽は足を動かしながらもプラスチックを表すかのように、握り合っている私の手をぶんぶんと前後に振り回して食い下がる。

「一芽、小さい頃から赤マントさんのこと大好きだし、もしかしたらメタルティラノモンより好きになるかもしれないよ？」

「あのデジモンのことを好きになってくれたら、パパはもちろん嬉しいけど……そういうアニメでまだやってない部分のことは秘密にしようね、ってアニメを作ってるみんなで約束してるんだ。一芽だってパパや友達に約束を破られたら、嫌な気持ちになるよね？」

「……なる。ムカつくーってなる。うーん、それじゃあしようがないね……」

怒っているわけではないと伝わるように声色を優しくし、子供にも理解しやすい簡単な言葉を用いて諭すと、彼女は少し不満げにしながらも納得してくれた。

一芽は年相応にわがままもそれなりに言うものの聞き分けが良く、しっかりと向き合っ

て話をすれば必ず分かってくれる。

「パパの言うことが聞いて偉いね、一芽は。とりからボールモン、二つ買っちゃおうか」

「ホント!? やったー！」

私がそう言うと、一瞬の通り雨が過ぎたかのように一芽はご機嫌に戻った。

本当に利口な子だ。そしてだからこそ私は、ついつい一芽を甘やかしがちである。

すっかり足取りが軽くなった一芽と手を繋いで歩きながら、彼女が話題に出した流れで私は、赤マントさん——デュークモンのことを考える。私自身ではなく、アニメに登場さ

せるキャラクターとしてのデュークモンについてだ。

実は嬉しいことに「デジタルモンスター」は大好評につき既に続編の製作が決定しており、現在放送されているアニメの全五十話が終わり次第、後番組として続編——「デジタルモンスターD」の放送が始まる予定になっている。

デジタルモンスターDというタイトルの「D」には意味が三つほど隠されているのだが、その内の一つが「DUKEMON^{デュークモン}」であり、続編の新しい主人公のパートナーを務めるデジモンが進化する最強形態として、デュークモンが登場する。

私がデジモンとしての自分を主人公に設定したのは、「赤マントの怪人」をモデルとしたデュークモンというデジモンを活躍させることで、いずれ最前線に立って人間とデジモンの橋渡し役を務めることになるであろう「赤マントの怪人」に対する人々の警戒心と恐怖心を少しでも薄れさせておこうと考えたためである。

実のところ、放送中の一作目の企画時にもそのアイデアを思いついてはいたが、『自分を物語の主役にするなどおこがましいし、恥ずかしい』と止めてしまったのだ。

しかし、私にはもう甘岡鈴二で居られる時間があまり多くは残されておらず、ゆえにこの二作目においては四の五の言っていられなかった。

『それまでは一芽の側に居よう』と私が鈴二と約束した期間は、^{アナログワールド}こちらの世界での五年——^{デジタルワールド}あちらの世界での約一年。現時点で二年半が過ぎており、期限も残り二年半。

その期間は誰に強いられたわけでもなく、あくまでも私が独断によって設定したに過ぎず、きっかり五年が過ぎた時点で一芽と別れなければいけないわけではない。

だが、何事も区切りは必要だ。

「近くに居るとおなか空くよー、とりからとりからボールモン」

上機嫌で何やら歌っている一芽の手を引きながら、交通量の多い大通りの歩道に出た。

あとはもう少し進んだ先にある長い横断歩道を渡れば、目当てのコンビニに到着する。

私は、一芽のことを大事に思っている。今や私は父親というものの在り方を理解し、彼女の父親として、一芽を我が子として愛しているつもりだ。

しかし、一芽の父親である以前に私はデジモンで存^あり、デジタルワールドを守るために在^あるロイヤルナイツなのだ。

弱きデジモンを守るために戦い続けながらもなお疎まれてきた私をロイヤルナイツの一員として見出ししてくれた我が主君には、返しても返しきれない大恩がある。

主君のお陰で私はようやく「災^{デジタルハザード}いをもたらす者」と恐れられる存在ではなく、名実共に「デジタルワールドの守護者」と称えられる存在となれたのだから。

ゆえに私は主君の期待に応えたい。その恩に必ずや報いなければならぬ。

たとえ一芽を悲しませることになろうとも、私は主君から与えられた視察任務を放り出すことは絶対に出来ない。

それに私がデュークモンに戻り、主君やデジモンたちに人間の素晴らしさを訴えかけ、

人間とデジモンの狭間に立って両者の対立を防ぐことは、一芽を守ることになる。

だからその日が来れば、私は一芽との別れを決して先延ばしにはせず、主君に視察調査の報告を行うためにデジタルワールドへ帰還するつもりだ。

「パパ、信号チカチカしてる！」

長い横断歩道に足を踏み入れてから数歩というタイミングで一芽が言い、私は青信号が点滅し始めたことに気付く。

「おっと、本当だ。一旦その交通島で止まろうか」

「急げー！ 上陸ー！」

私たちは小走りで駆けて、背の低いブロックで仕切られている中央分離帯の間に設けられた、小さな島のような歩行者用の待避所の上で立ち止まった。

私がデジタルワールドへ帰るにあたって、一つ悩み続けている問題がある。

私がこの体を鈴二から奪う寸前、生命維持装置があつてなお、彼の意識は消えかけていた。あれは意識だけでなく、体にも完全な終わりが迫っていた兆候だ。

脳の機能を代わりに担っている私が頭の中から居なくなってしまうえば、鈴二の体は再び脳死状態に陥り、そしてまもなく完全に死ぬ。つまり私がデュークモンに戻ることはイコール、一芽が今度こそ父親を失ってしまうということになる。

では、いざ別れの日が来たその時——私は自分の正体と鈴二との約束について、一芽に全てを伝えるべきだろうか。

あるいは一切を伝えず、父親の中身が私というデジモンに入れ替わっていたと知らないままで、五年越しに父親の死を受け入れてもらうべきなのか。

一芽のためだけを思うなら、彼女の心に父親との離別以外の傷が付くことはない後者の選択肢を選ぶべきだろう。それならば一芽は仮初めの父親を、私は一芽との関わりを失い、互いに本来あるべきだった形に戻るだけなのだから。

しかし私はどうしても、一つ目の選択肢になら有り得る可能性のことを考えてしまう。

父親の中身が私に替わっていたと知つてなお、もしも一芽がそのことを許してくれたのなら、受け入れてくれたのなら、私たちの関係はまだ終わらない。

そうなれば、私がデジタルワールドから再びこの世界へ戻ってきた時にも、堂々と再会することが出来る。

それは私のエゴに他ならない。

もし一芽が私のやっていたことを否定し、私が告白した内容を大人に話したりすれば、デジモンは人間の意識を乗っ取る危険な存在だと人々に認識されてしまい、両者に亀裂を生じさせる可能性すらある。

だが、だとしても、私はやはりその可能性を諦めきれなかった。

かけがえの無い我が子として、一芽という娘を確かに愛してしまったがゆえに。

「——っ!?」

硬い物体同士が激しく擦れるような音が、唐突に耳朶じだを打った。はっと我に返り、鼓膜を揺らし続ける轟音の方へ顔を向ける。

そうして目の当たりにしたのは——中央分離帯のブロックに片輪を乗り上げたまま、耳をつんざくような音を伴い突進してくる、運・転・席・に・誰・も・居・な・い・大・型・ト・ラ・ッ・ク。

それは、私と一芽が立つ交通島へと猛スピードで迫っていた——

危機的状况を体が認識してか——思考の処理はそのままに、目に映る世界がスローモーションに変わる。

トラックとの衝突まで三秒。鈴二の体から脱することは間に合うが、デジモンとしての体を実体化させてトラックを止めるには足りない。

視界の端に映る車用の信号は黄色。硬直している一芽を抱き上げ、私は横断歩道を引き返す方向へ駆け出した。

しかしその瞬間——トラックは中央分離帯を乗り越えて、私が逃げた反対側の車線へと進路を変えた。

前傾して全力で走っていることが仇となり、もう身を翻すことは出来ない。

一か八か——私は走る勢いに全てを委ねて地面を蹴り、頭から飛び込む形で一芽を抱えたまま跳躍した。

そして空中にて、私は目撃する。

トラックが私の跳んだ先へ、進行方向をわずかに変えたのを。

まるで、私と一芽を狙うかのように。

——体が動かない。痛みや苦しみはおろか、あらゆる感覚が無い。

状態は分からないが、トラックに跳ね飛ばされてしまったのだろう。

「——パ——パ——きて——」

途切れ途切れだが、微かに声が聞こえた。一芽の声だ。

泣いている。

だが泣いているということは、生きているということ。

衝突される寸前に一芽を前方に投げたのだが、一芽は助かったようだ。

返事をしてやりたいが、口を動かすことすらままならない。

せめて、最期に一芽を守ることが出来て良かった。

思考が遅くなっていく。止まっていく。

意識が薄れていく。消えていく。

最期に私は、次の私に希う。

信じて、想いを託す。

一芽を守れ。
他の何を失ってでも。

“デジタルモンスター”。

2018年に放送されたアニメと、その作品内に登場するアイテムを基にした携帯型液晶ゲームのメディアミックス展開によって世界中の国々で人気を博し、特に日本においては社会現象を巻き起こしたコンテンツだ。

しかしながら、そのブームは一過性のものだった。

諸般の事情により、前作から製作陣が一新されて始まったアニメの続編——“マジデジ”こと“マジでデジタルモンスター”の不振がコンテンツ全体の急激な凋落を招き、たった一年ばかりでかつての栄華は見る影もなく失われたのである。

だが、アニメ“デジタルモンスター”の放送から十二年が経った2030年の現在——ある要因により“デジタルモンスター”は再度、そして当時よりもさらに大きな注目を集めていた。

ある意味、最悪の形で。

季節は冬。冷え込みつつも日本ではいまだ初雪が降っておらず、北海道の初雪観測の最遅記録が更新されようとしている——そんな十二月上旬。

快晴の昼頃。新宿区に所在する東京都立馬目高校^{うまのめ}では、迫る冬休みに心を躍らせていた生徒たちが先週の期末テストの答案を返却され、その結果にそれぞれ一喜一憂した後で授業を受けていた。

二年生の教室が連なって並ぶ校舎二階、その西側。

二十八人の生徒が所属する2・Aのクラスの教室では現在、三限目の現代文Aの授業が行われている。教室の前方では、このクラスの担任でもある初老の男性教師がタッチペンを用いて、電子黒板に登場人物の心情の解説を書き込んでいた。

馬目高校^{うまのめ}では、私服での登校が許されており、一足制で靴も自由。ゆえに公式の制服である紺色のブレザーを着用している生徒も居れば、各々で選んだ私服を着ている生徒も見受けられた。

廊下側の最後方の席に座っている、毛先に跳ね癖がある黒髪のショートカットの少女は、その内の後者だ。上はパーカーで下はショートパンツにタイツ、靴はバスケットシューズと、動きやすさを重視した服装をしている。

正面から見ると頭からつま先まで黒一色であり、それゆえに前髪の一束だけに施された深紅のカラーメッシュがよく目立つ。

周囲の一部の生徒——特に男子——が時折ちららと一瞥を送っているのは、彼女が目鼻立ちのはっきりとした目を引くような美少女だからということもあるが、何より彼女が教室で授業を受けていること自体が珍しいからである。

「では、105ページを一行目から……せつかくですから、甘岡さんに読んでいただきましょうか」

男性教師もまた、珍しく出席しているからという理由でその少女を音読に指名した。

前髪の赤いメッシュの部分を手で触っていた当の少女は、デジタル教科書が表示されたタブレットとアナログのノートに向けていた顔を上げると、目を丸くしながら男性教師と視線を合わせる。

「え？ あたしですか？」

「はい、甘岡さんです。せつかく、ですから」

「……せつかく、ですか。分かりました……！」

少女は頷くと教科書を開いたまま両手で持ち、堂々と起立した。

その身長は女子の中では高い方で、同年代の男子の平均に並ぶ程度。袖を捲ったパーカーとタイツ越しに窺える手足はしなやかで長く、立ち上がるとよく映える。

また、彼女の腰のベルトループには、レンガの壁を模した四角形の赤い液晶玩具——“デジヴァイス・ギア”のようなのが、リール付きのカラビナによってぶら下がっていた。

「ああ、甘岡さん、立たなくて構いませんか？」

「あつ、すみません、つつい気合入っちゃって……！」

男性教師からの指摘で周囲から笑いが起こり、少女は照れ笑いをしながら席に着く。

(恥ずかし……元声優志望の力をお見せしましょう、って前のめりになりすぎた……！)

頬をほのかに赤く染めて少女は内心で反省しつつも、せつかくなら自分の演技力をみんなに見せたいと、密かに深呼吸をして声を整える。目立ちたがりな気質の少女なのである。

幼い頃から小説で活字に触れてきた彼女は、今回の授業で取り扱われている“爆心地”という名作小説を小学生の頃に読破しており、何度も読み返している。

自分なりにではあるが、登場人物の心情についても充分理解出来ている自信があり、演技に必要な材料は揃っていた。

そして少女がいよいよ、指定された箇所から読み上げを始めようとした、その時——

廊下から壁越しに、何かが走る足音が聞こえてきた。

小気味良く軽快でありながら、靴からは生じ得ないであろう独特な足音。

「……はあ……せつかく、だったのに……」

接近する足音によって事態を把握した少女は教科書を閉じると、意思の強そうな眉をひそめてため息をつきながら、名残惜しそうに立ち上がった。

そんな少女の様子に周囲は初め首を傾げていたが、段々と大きく近くなってきた足音を耳にした者から、彼女のリアクションの意味を理解していく。

皆がにわかになわつき始める中で廊下側の窓を赤いシルエツトがよぎり、まもなくして教室の後方——少女の真後ろで、スライドドアが勢いよく開かれた。

「一芽！ デジモンが来る！」

少女の名を呼ぶ声が、教室に響き渡った。

開け放たれた出入り口に立つその声の主は、人間ではなかった。

一言で形容するのならば、赤い恐竜。

姿勢はやや前傾しているものの通説の恐竜ほどではなく、ほぼ直立に近い。体高は小学校高学年の男子程度。形状としては獣脚類のディノニクスやヴェロキラプトルに似ているが、後頭部には小さな一對の翼のような鶏冠が生えており、四肢はいずれよりも大きく、手足には長く太いかぎ爪が備えられていた。

深紅の鱗に覆われた体のフォルムは全体的に丸みを帯びていてどこか愛らしい印象だが、注視して見れば、その全身は岩のようなたくましい筋肉の塊で成っていると分かる。

そして、胸部から腹部にかけての皮膚が白くなっている箇所には、ハザードシンボルを思わせる黒いマークが刻まれていた。

彼は実体を持ったデジタル生命体——デジタルモンスター——こと、デジモンである。

種族名はギルモン。分類としては恐竜型ではなく、爬虫類型のデジモンである。

教室中の一切の視線が、そのギルモンの元に集中している。対して当のギルモンはそれをまったく気かけず、爬虫類らしい縦長の細い瞳孔が浮かぶ金色の瞳で、少女——一芽だけを真つすぐに見つめていた。

「……来ちゃったか。力矢に連絡は？」

「もちろんしたよ。ビートルは正門に停めておくって」

「オッケー、ありがとギル。リュック貸して、置いとくから」

一芽は教室に現れたギルモン——ギルの背負っていたカーキ色のリュックサックを受け取って机の上に置くと、腰のベルトループから外したデジヴァイス・ギア型のプログラムフォン——スマートフォンの後継にあたる小型携帯電話——をリュックサックのストラップに取り付けて、それからパーカーを脱ぎ始めた。

話す口調は互いにフランクで、それだけでもふたりの付き合いが長いことが伺える。実際のところ、彼女らはお互いのことを姉弟きょうだいのようなものにして、家族だと思っていた。

一芽のクラスメートや男性教師は突然ギルがやって来たことには驚いているが、ギルという恐竜のようなデジモンの存在に戸惑ったりはしていない。

それは現代においてデジモンというものが、アニメやゲームの中だけに存在するフィクションではなく、実在する生命体であるという事実が常識となっているからだ。

パーカーの下には、黒い長袖のシャツ。Tシャツ姿になった一芽は、脱ぎ終えたパーカーを椅子に掛ける。

特注のアイテムである黒いパーカーの背には、バンドTシャツ風のクールな絵柄でギルのイラストが描かれていた。

「——とのことなんで先生、私ちよっくら行ってきます！」

「お願いします、甘岡さん。無事を祈ることしか出来ず悔しいですが、ギルさん共々、ど

うかお気を付けて」

一芽が片手を挙げて気楽な調子で挨拶する一方、男性教師は苦渋の色を滲ませながら彼女へ深々と頭を下げた。

続いて一芽は教室を見回し、クラスメイトたちに大きく手を振る。

「じゃあねみんな、またそのうち来るわ！ せいぜい地下でプルプル震えてなっ！」

「おう、行ってこい！」 「頑張れー、一芽っ！ ギルちゃんっ！」 「無事に帰ってきたらジュースおごるよ、ふたりとも！」 「負けんじゃねーぞっ！」

クラスメイトからの応援を受けて高揚しながら教室を出た一芽は、ギルと頷き合うと、学校の正門へ向かうべく走り出した。

2・Aの教室のすぐ隣にある階段を二段飛ばしで下り、一芽は歩幅の大きいランニングフォーム、ギルは一芽にスピードを合わせつつ前傾姿勢で、並んで廊下を駆け抜けていく。

「ギル、みんな応援してくれてたけど、今の気持ちは？」

「至って普通かな」

「普通か！ あれで何にも感じないかあー、相変わらず冷えっ冷えだな、ギルは」

人間味のないギルの返答に苦笑しながらも一芽は走り、まもなく校舎の玄関を出た。

直後、校内の放送設備と校外の防災用拡声器から発されるけたたましいサイレンが、様々な方位から同時に聞こえてくる。

『デジモン出現警報。デジモン出現警報。第二ホールからデジモンが出現します。ただちに付近のシェルターに避難してください。車両を運転中の方は、避難の前に必ず、車両を道路外か、道路の左側に寄せて駐車してください。デジモン出現警報——』

事態は、警報の合成音声が述べた通り。

六年前に突如として東京都文京区の上空に発生した、デジタルワールドと繋がる二個目のワームホール——「第二ホール」。そこからデジモンが出現し、怪獣映画のように街や人々を襲おうとしているのだ。

デジモンの襲撃は今回でちょうど三十回目。これまで現れた二十九体の内の二十八体の敵性デジモンは、政府公認のデジモン研究対策組織——「ジークセイバー」に所属するたったふたりの「デジモンバスター」の活躍によって討伐されてきた。

デジモンバスターとは、通常兵器ではほとんどダメージを与えられないデジモンという強大な敵を、同じデジモンの力を以って制する者のこと。

そして他ならぬ一芽とギルこそが、そのデジモンバスターである。彼女らは六年前から常にデジモンとの戦いの最前線に立ってきた、若き勇士なのだ。

警報が繰り返される中、一芽とギルは正門に到着する。校門前の車道には、奇妙な形状をした赤い戦闘車両が停まっていた。

単座型の操縦室と弾薬庫で前後に分かれた、曲面装甲で構成される楕円形のボディ。短い関節が設けられ、車体の外側に配置されている六本の足のような大型特殊タイヤ。そし

て車体の正面からまっすぐに伸びる、頭角のごとき長大な大型ホーンアンテナ。その丸っこい外見は、兵器というよりもまるで巨大な玩具のよう。

パイトナーデジモン支援用戦闘車両——「D・ビートル」^{デー}。名前の由来ともなっているカブトムシにも似た愛嬌のある見た目とは裏腹に、各国から提供された数多の技術を結集させ、数千億円もの巨額の費用を投じてデジモンバスターのために製造された、ワンオフの超高性能戦闘車両である。

「ビートルっ！ スーツ出してっ！」

手を振りながらD・ビートルに駆け寄り一芽。車体の前面に目のように配置されているメインカメラが彼女の姿を認識し、D・ビートルの上部の二つのハッチが開く。

それから後部の弾薬庫の中からロボットアームが伸びて来て、車体の横で足を止めた一芽にパイロットスーツを差し出した。

大剣を振るう甲冑騎士をあしらったジークセイバーのエンブレムを右胸に掲げる、赤と黒を基調としたギルの体色と同じカラーリングのパイロットスーツ。

一芽はそれを受け取ると、ファスナーを降ろして前面を開き、ツナギを着るようにして素早くそれを服の上に着込んだ。

「行こう、ギル！ 帰ってきたら誕生日&祝勝パーティーと行こうやっ！」

「うん。頑張ろう、一芽」

SFじみたパイロットスーツ姿となった一芽は跳躍し、巨大なタイヤを踏み台にしてD・ビートルの上に軽快に飛び乗ると、開いたハッチからすると操縦室へ入った。

そこは鋼鉄の閉鎖空間。

外部の様子と様々な情報を映し出す三面の大型ディスプレイ、壁や床とあらゆるスペースを埋め尽くす多数の器材、衝撃吸収技術の結晶たる堅牢なコクピットシート——操縦室の内部は腕を広げたり、立ち上がったり出来るほどの余裕はなく、常人であれば閉所恐怖症の気が無くともストレスを覚えようほどに狭い。

スムーズにコクピットシートへと収まった一芽は、六点式のシートベルトを慣れた手つきで次々と留めていき、パイロットスーツに包まれた体をシートへ固定した。

続いて、側面の壁に掛けられていたフルフェイスヘルメットを頭に被り、操縦桿を握ってフットペダルに足を乗せる。

D・ビートルの操縦は、ヘルメットに内蔵されたセンサーがパイロットの脳波を読み取り、それをAIが補完して動作に反映するという脳波操縦がメインだ。

操縦桿とフットペダルは緊急時用の運転装置に過ぎず、モードを切り替えない限りはいかに操作しようとD・ビートルの動作には反映されないが、脳波操縦には『どのよう動いてほしいのか』という明確なビジョンをイメージすることがパイロットに要求されるため、それらは操縦イメージを補助するアイテムとしての役割も備えているのだ。

一芽の脳波操縦の練度は高く、補助が無くとも問題はないが、ほんの少しだろうと正確

性を向上させるため、そして何より『カッコイイから』と、彼女は操縦桿とフットペダルを使用している。

操縦室の天井から鈍い音が聞こえて、同時に車体がわずかに揺れた。出勤時にはいつもそうしているように、ギルがD・ビートルの上に乗ったのだ。

「ギル、掴まった!?」

「大丈夫!」

「了解、出すよ!」

天井の装甲越しにくぐもったギルの返事を聞いた一芽は、アクセルを踏み込んで始動をイメージし、脳波操縦によってD・ビートルを発進させた。

直後、一芽たちが所属するジークセイバーの本部から通信が入る。まもなくディस्पレイの右下でウィンドウが開き、金髪のドイツ人風の男性がバストアップで表示された。

その男の名は、力矢・ラインハルト。一芽が小学一年生の頃に交通事故で失った父親の古くからの親友であり、事故によって天涯孤独となった一芽の後見人を買って出てくれた、彼女にとっては第二の父とも言えよう人物。そして、デジモン研究対策組織ジークセイバーの設立者にして最高責任者だ。

デジモンが現れた際には全体を統制する総司令官の役割も務めており、ジークセイバーのメンバーのみならず、防衛出動を行なう自衛隊の指揮も彼が担っている。

『よう、悪いな一芽。お前にはしばらく学生らしい生活をさせてやりたいと思ってたんだが……悪いな、ホントによ!』

「二回も悪くなって言った……いちいち謝るな、っていつも言ってるでしょ。デジモン討伐は他にやれる人が居ないんだし、あたしとギルが出るしかないんだからさ!」

ディस्पレイの枠の中で雲った顔を浮かべながら謝る力矢に、一芽はやれやれという声色で返した。

彼女が力矢に対して呆れたような反応をしたのは、戦うことが嫌だからではない。

一芽は力矢の心情を理解している。高校生という子供を、そして親友から預かった娘を、貴重な青春の時間を奪ってまで命懸けで戦わせなければならぬ——その葛藤と自分の不甲斐なさに溢れた、彼の心の内を。

だが、力矢に限らず誰にだろうといくら気遣ってもらったところで、デジモンを倒せるのが自分とギルだけである現状は変わるはずもない。

それにそもその話、一芽は父親が身を挺して二度も救ってくれた自らの命は、父親がそうしたように誰かを守るために使うべきだと考えており、無辜の人々を守るべくデジモンと戦うことは彼女にとってむしろ望むところである。

だから一芽は、力矢に限らず誰からも『戦わせてしまっただけで申し訳ない』と謝られるのが嫌いだった。謝った方は勝手に抱いた罪悪感が薄れて満足かもしれないが、彼女からすれば自分自身の意思で戦っているということを否定されているようで、不快なのだ。

「で、第二ホールまで二分ちよいで到着するけど、状況は？」

『ああ……デジモンはまだ出てきてねえが、こんな短い間隔で出現したのは初めてだから、全体的に避難が少々遅れてる』

「そっか、間に合ってくればいいけど……しっかし、三日前のエアドラモンから中二日のハイペース……今までは最短で一週間、長い時は三ヶ月ぐらい間があったのにね」

第二ホールからデジモンが出現する頻度はまばらで、統計データから様々な法則性が提唱されているが、どれも確説ではない。少なくとも今回の襲撃により、『デジモンが出現した後、七日間は他のデジモンが現れることはない』という一つの説が崩壊した。

立ち並ぶビルの中に“DRD・L5”なるエンジンの轟音を響かせながら、横に倒した巨大なコマのような六つの足を回転させ、灰色の地面を轟進するD・ビートル。

市民は避難しているため一般車は走っておらず、かつ避難時の規則で一般車は車道の端か道路外に寄せて駐車されているため、一芽は堂々と車道のど真ん中を時速110キロ走行している。

『それと……今度こそ成熟期で倒してくれ、って政府うゑからお願いされちゃった。食い下がったんだが、今回も初めから完全体で行く許可はもらえなかった。やれるか？』

「やるしかないっしょ。でも、メガログラウモンが強力過ぎるってのは分かるけど、初めから完全体でぶつかつた方が結果的に被害を抑えられると思うんだけどなー」

一芽は小さくため息をつきながら、ディスプレイの端に流れる街並みをヘルメットのバイザー越しに見やる。

支柱を介して車道の上方に掲げられている道路情報板がどれも停止しているのは、電気をエネルギーとするデジモンに電力を吸収されないよう、戦闘区域となり得る対象地区において意図的な停電が行なわれている影響である。

『お前とギルが頑張ってくれてるお陰でここ四年は人的被害が出てないってのが、かえって政府うゑを日和らせちゃってるのかもな。問題が起きてないなら現状維持で、ってよ』

「悠長過ぎない？ 十七歳の華のJKと十一歳のデカイトカゲに戦ってもらっておいで、そんな呑気な考えが出来るもんかな……？」

右に左にと小首を傾げ、「うーん」と低く唸る一芽。

そうして力矢と会話をしながらでも、一芽のD・ビートルの操縦にまったく狂いはない。それは数百回以上も積み重ねてきた訓練の成果だ。彼女は無関係のことを考えながらのマルチタスクだろうと、ほぼ無意識かつ正確な脳波操縦を行なえる。

『ま、いざとなったら許可が降りる前に進化したって構わねえからよ。いつも言ってる通り、お前とギルは自分たちの命を何より最優先にしてくれ。生き残るためなら何だってやらかして構わねえ。後のことは全部、俺が何とかするからよ』

「おっ、そりゃあ頼もしいことで。そうそう、戦わせてゴメンってよりも、行ってこいやって感じで送り出してほしいわけよ、あたしはね」

力矢の言葉を受けて、一芽はヘルメットの内でこりと口元を緩めた。彼女の表情を見て、力矢もまた笑みを浮かべる。

『——っと、来やがった！』

力矢が声を上げた直後、ディスプレイの隅で複数のウィンドウが開く。それらに映し出されたのは、街の諸所に設置されたカメラやドローンから伝送されるリアルタイム映像。真っ青な空に生じた暗闇が広がる大穴と、その中からゆっくりと降ってくる一つの巨大な灰色の泡。

うつすらと透けて見える泡の内部では、黒みがかかったグレーの体表をしたマツシブな体躯の恐竜型デジモンが目を瞑って真っ直ぐに背筋を伸ばし、腕組みをしながら静かに佇んでいた。

「ティラノモン系かー……」

そのデジモンの姿を目の当たりにした一芽の表情は、何とも言えない複雑な面持ち。

それは一芽にとってティラノモン系のデジモンは幼い頃からのお気に入りであり、今でもその気持ちが変わっていないからだ。

今は亡き父との思い出もあってか、一芽は父の作ったアニメの中で活躍する姿を見てきたデジモンという存在のことを、どうしても嫌いになれなかった。

もはや実の父親よりも長い間を一芽と一緒に過ごしてきた力矢は、彼女の表情からその内心を察していたが、それについてあえて言及することはしない。

『……黒いティラノモン……ダークティラノモンか。コイツが来たのは二回目だな』

成熟期の恐竜型デジモン——ダークティラノモン。

赤いティラノモンとは異なって漆黒に染まった体躯が特徴の亜種で、原種よりも非常に凶暴な性質をしており、視界に映った動く物は全て破壊しないと気が済まないというまさしく暴君テラノである。

『別の個体とはいえ、前に戦った時は成熟期で楽勝……ならヤツに進化させさせなけりやあ、完全体は使わずに済むか』

整えられた顎の髭を撫でるウィンドウの中の力矢は、少しばかり安堵した様子だった。

以前にも一芽とギルはダークティラノモンと戦った経験があるが、その時は到着してからたった一分で討伐が完了するという、力矢の話した通りの楽勝だった。

しかもそれは五年ほども前のことであり、当時よりも多くの戦闘経験を積んだ今の一芽とギルにかかれれば、ダークティラノモンなど恐れるに足りない相手と言えた。

だが、当の一芽にはそのような余裕は窺えない。その表情はむしろ張り詰めていた。

彼女は沈黙したまま目を凝らし、灰色の泡の中——瞑想するかのごとく静止しているティラノモン系デジモンの姿を観察し続けていた。

（皮膚の色は黒ってかグレー……体格はデカくてマッチョ……あの爪……背中の骨板が、研ぎ澄まされた刃みたいに立派……体中に傷跡……そして何より、あの威厳を感じさせる

雰囲気……!)

アニメとゲームで培ったデジモンに関する知識と、目に映る現実のデジモンの姿とを照らし合わせて考察し、ついに一芽がある確信に至ったその瞬間。

『ウオオオオオーツ!!』

刹那——気合いを吐くかのように凄まじい咆哮を発しながら、ティラノモン系デジモンは自らを包んでいた泡を手刀で叩き割った。

砕け散ったガラスのような無数の泡の破片を伴い、デジモンは重力に身を任せ、損傷した高層マンションが軒を並べる大通りへと落下していく。

「力矢っ！ あれダークティラノモンじゃないっ！」

そのデジモンはスーパーヒーローのごとく左手と両足、そして尻尾を地面に叩きつけ、飛沫のようにアスファルトを飛び散らせながら地上へ着地した。

「あいつはマスターティラノモン！ 歴戦を勝ち抜いて進化した、ティラノモンの中のティラノモン——完全体っ！」

ディスプレイ内の複数のウィンドウの中で、地上へ降り立ったデジモン——マスターティラノモンが、無数の古傷が刻まれた灰色の体をゆっくりと起こす。

鍛え抜かれたその筋骨隆々の体は、日の光を受けて銀色に煌めいていた。

『完全体だど!? チッ、ついにそのま・ま・出てきやがるようになっちまったか!』

一芽と力矢の間に流れる空気が一変し、緊迫感が漂い出す。

一芽たちは完全体の敵性デジモンと戦うのは初めてというわけではなく、今までにも何度か討伐した経験はある。では彼女らがいったい何に驚愕しているのかと言えばそれは、マスターティラノモンという完全体のデジモンが第二ホールから出現したことだ。

第二ホールが発生した当初、そこから現れるデジモンの形態は必ず成長期だった。

ある時期を境に成熟期も出現するようになったが、デジモン側の都合かワームホールの制約かは不明なものの、完全体以上のデジモンが現れたことは今まで一度たりとも無かったのだ。

一芽とギルがこれまでに戦った完全体の敵性デジモンは、電力を吸収する、デジタルデータが保存された媒体を撰取するといった手段によって必要なエネルギーを確保して進化した個体であり、いずれも完全体に成ったのは第二ホールから出現した後だった。

だが、今日——あのマスターティラノモンが完全体の状態でやって来たことで、そのような昨日までのパターンは完全に破壊されてしまった。

「力矢、進化許可！」

『既に申請はさせた！ だが、五分——いや四分持たせてくれ！ 俺も直接政府（うま）に掛け合
う!』

「頼んだ！ もう現着するけど、上手くやっつく！」

『どうしようもなければあ躊躇わずメガログラウモンを使い！ しばらくミュートにする

が、何かあったら呼び出——』

力矢の通信の音声がミュートに切り替わった。焦るあまりか、言い終わる前に音が消えていた。

「ギル、聞いてた!? 辛いつらと思うけど、しばらくグラウモンでお願い!」

「やってみるよ!」

一芽はギルとやり取りしながらもアクセルを強く踏み込み、現場に急行するべくD・ビートルのスピードを上げた。

これまで何度も味わってきた戦いの前の独特の緊張感を、一度だけ深呼吸をするというルーティーンによって抑える一芽。

初めての事例に遭っての困惑と戦いへ赴く時の緊張——その中にありながらしかし、一芽のD・ビートルの脳波操縦の精度はまったく乱れていない。

困惑の雨に曝されようと、緊張の風に吹かれようと、人々を守るために戦うという確固たる正義の元に根付く彼女のメンタルは、そう簡単には揺るがないのである。

ところが——

『出てこい、赤き竜とアナログの魔女よッ! 貴様らを討つ前に一度、話がしたいッ!』

「は!? 喋った!？」

マスターテイラノモンははつきりと人語を使い、何者かを指定して対話を要求し始めた。

一芽が目を見張って驚くのも無理はない。それは敵性デジモンが人間の言語を用いて話すというまたしても初の事例だったのだから。

(赤き竜はギル、ならアナログの魔女はあたし? あたしたちのことを知ってる?)

一芽は彼が自分とギルの存在を認識していることにも驚きはしたが、言葉など通じ得ない災害そのものとはかり思っていた敵性デジモンが日本語で話し始めたことには、さらなるインパクトを受けていた。

(いや、あっちが話をしたいって言うなら好都合! 時間稼ぎにもなるし、何より上手く話がつけば、もしかしたら……!)

そして同時に一芽は対話が可能なデジモンの登場により、一つの可能性を見出して——否、思い出していた。

それは、初めてギルと共にデジモンと戦った時からずっと抱き続け、しかし叶うわけがないと決めつけて、胸の奥にしまい込んでいた希望——人間とデジモンが相互理解し、共存の道を歩むという夢。

一芽は彼らを征する者だ。だがそれでも確かに、彼らを愛している。

人々に背中を押されながらも確かに自らの意思でデジモンと戦い、しかし心の奥底ではデジモンとの共存を願っているという彼女の心の在りようは、言うなれば二律背反アンビバレント。しかし矛盾していようと、それは紛れもなく一芽の本心である。

人類とデジモンは、双方がこれまで互いの言語を理解出来ていなかったがためにそもそ

も会話が成り立たず、ゆえに今まで一芽の夢が実現に至ることは決して有り得なかった。

だが人語を扱い、しかも自ら話がしたいと要求してくるデジモンがついに現れた。彼との対話は、ともすれば人間とデジモンが共存するための第一歩となるかもしれない。

一芽の心に期待の感情が芽生える。

しかし対話とは、互いが平等な立場にあつてこそ成立するもの。そして戦闘種族たるデジモンたちにおける立場の上下とは主に、戦闘力によって決定される。

完全体を相手に対話を望むのなら、出来得る限りは力を誇示しなければならない。

「進化してっ！ ギルっ！」

「了解っ！」

一芽から指示を受けたギルは、D・ビートルの上から跳躍する。

そして彼は、定期的な電力補給によって常に体内で一定量を維持しているデジモンの進化に作用する因子を、自らの意思によって活性化させた。

空中へと高く飛び上がったギルの体が、0と1の数字のみで構成されたシルエットとなる。そのデジタルなシルエットが膨れるようにして一瞬で巨大化する。

それこそはデジモンの進化。電気や食事などから摂取する他、バトル戦闘やトレーニング鍛錬の経験によつても生じる“デジモンナチュラルアビリティ”なる進化因子の蓄積によつて引き起こされる、デジタル生命体のアップグレード成長。

ネオングリーンのシルエットがクリムゾンレッドの実体が変わる。

現れたのは深紅の魔竜——グラウモン。

頭部に二本の角、後頭部には鋭い針のような白い羽毛が生え、両腕には弧を描く刃状の突起が備わるなど、そのフォルムは以前よりもワイルドにして攻撃的。頭身も伸びて、体長は元の四倍の6メートル程度まで巨大化していた。

成熟期となったギルは大型の肉食恐竜のごとき体軀を躍動させ、力強く重い足音を打ち鳴らして、先を行く一芽のD・ビートルを追いかける。

「一芽！ ボクの後ろに！ 話したいなんて言っておいて、不意打ちしてくるかもしれない！」

「ギルが言うなら、そうしよう！」

一芽は減速してギルを先行させ、ふたりで大通りへ出る。

そこはかつては高級住宅街とも呼ばれた、立ち並ぶ高層マンションによつて形成されるメインストリート。第二ホールの直下であるがゆえに戦闘に巻き込まれて破壊されることが多く、道路やほとんどの建物はどこかしらが損傷しており、一部の建物に至つては瓦礫の山となっている。

その大通りの中ほどで、マスターテイラノモンが腕を組んで仁王立ちしていた。

「ぬッ……来たか」

彼は瞳だけを動かしてD・ビートルとグラウモンの姿を認めると、ゆらりと巨体を揺ら

しながらそちらへ向き直った。

「ギル、信号の辺りでストップ！」

対する一芽は対象との距離を確認しながらギルに合図し、消灯している信号の付近で停止した。

敵との距離は50メートルほど。一芽はギルが言っていたような不意打ちを警戒し、攻撃されても対応出来るだけの距離を空けている。ギルはいつでも一芽を庇えるよう、D・ビートルの斜め前に立っていた。

「初めまして師匠！ あたしは甘岡一芽って言う者です。アナログの魔女ってあたしのことですかね？」

D・ビートルの大型ホーンアンテナが搭載するスピーカーから一芽のライトな敬語が発せられ、大通りにエコーした。

初対面でありながら一芽がマスターテイラノモンを師匠と敬って呼んだのは、彼が百戦錬磨の戦士としてだけでなく、成熟期のテイラノモンたちを鍛え上げる師匠としての一面を持つデジモンであることを、アニメ『デジタルモンスター』を通して知っていたからだ。

そのように、アニメに登場するデジモンたちの設定は、本物のデジタルワールドへ行った経験があるとも噂される甘岡鈴二の手によって、実際のデジモンの特徴や生態が極めて忠実に再現されている。

ところが――一芽の第一声を聞いた師匠は、凶器のように厳つい顔をグツとしかめると、D・ビートルを睨みつけた。

「師匠だど？ 我が弟子たちの仇であるキサマに、師匠などと呼ばれる筋合いは無いわ」

「えっ……あー、そっか……そういう……」

いきなり地雷を踏んだことに気付き、苦い顔をする一芽。

一芽とギルには、これまで三体のテイラノモンを倒した経験があるのだ。

「もしかしてこっちに来たテイラノモンたちって、あなたの……？」

「いかにも、全員ワシの弟子だ。テイラノモンにテイラノモン、テイラノモン……どいつも出来の悪いバカ弟子だが、未来ある若者だった。……し……になど……されおって……」

懐かしむように語りながら、マスターテイラノモンは青空を見上げていた。

「えっと……師匠って呼んでしまったことについては謝ります、ごめんなさい。まさかあなたがテイラノモンたちの関係者だったとは思わなくて。……ところで、あたしたちと話したいことってのは？」

テイラノモンの名の発音の違いがまったく分からなかったことと、最後の呟きの内容が気に掛かりながらも非礼を詫び、本題に入るよう促す一芽。

そう話す中で一芽は視線を流し、ディスプレイの隅で六桁のデジタル時計を確認する。力矢が音声をミュートにしてから経過した時間は、まだ二分足らず。

一方で、マスターテイラノモンが鋭く尖った牙が覗く大きな口を開く。

「では問おう。キサマらはなぜ、我々デジモンと戦っている？」

「なぜ戦ってる、って……？」

そう問いかけられた一芽は、眉を寄せて不快感を露わにする。

「あんたたちがこの世界にやってきて、人や街を襲うからに決まってるでしょ？ まさか何もしないで黙ってブツ殺されてるよ、って言いたいわけ？」

一芽が返した言葉は声色こそ静かだが、怒りが滲み出ていた。

直近の四年間こそ人的被害は出ていないが、それ以前は襲撃のたびに少なからず死傷者が出ていた。だというのに、その被害をもたらした敵性デジモン側から『なぜ戦う？』などと他人事のように言われては、守ることの出来なかった犠牲者たちの存在を一日たりとも忘れたことのない一芽は、憤らずにはいられなかった。

対するマスターティラノモンは一芽の返答を通じ、そこに込められた彼女の怒りを感じ取っていた。

そしてその反応を根拠としてあることを確信し、合点が行ったとばかりに深く頷く。

「やはり、か。では、自分たちこそが最強だと証明するために挑戦者を募り、アナログワールドへデジモンを呼び込んでいるという話は、デタラメというわけだな」

「は……？ あたしたちは言っていないし、思ってもない、そんなこと！ あたしたちは本当は、デジモンと戦いたくなんてないんだからっ！」

一芽は必死に否定した。敵性デジモンとの会話は今回が初めてな以上は当然だが、そんな話にはまるで覚えが無かった。

一芽が困惑する一方でギルはまったく動じず、彼女を守るためにと敵の一挙一動を注視し続けている。

「なるほど。それを確かめるため、セーバードラモンのヤツに大枚をはたいてまでアナログワールドの言語データを手に入れたが……その甲斐はあったようだな」

(セーバードラモン……攻撃も一切せず散々飛び回った後で帰っていったけど……あいつの目的はこっちの世界のデータ収集だったってこと……？)

漆黒の炎を全身に纏う巨鳥型の成熟期デジモン——セーバードラモン。

第二ホールから出現した後、終始逃げ続けた挙句にデジタルワールドへ帰っていった、デジモンバスターが唯一討伐出来なかったただ一体の敵性デジモンである。

「とにかく、誰がそんな適当言ったのか知らないけど……あたしたちは戦いだとか強さだとか、そういうのは求めてないの。分かってくれた？」

「うむ、あい分かった。では……赤き竜に、アナログの魔女よ——」

マスターティラノモンは頷いた後、胸元で組んでいた腕を解く。

ゆっくりと右腕を上段に、左腕を下段に、足と足の幅を広げ——さながら武術の構えのような、ファイティングポーズを取った。

「——死合おうかッ！」

「えっ!?　なんでそうなのっ!?　挑戦者なんて求めてないって分かったんでしょ!？」

停戦の流れと思いついていたところがやはり戦う羽目になり、戸惑う一芽。

ギルは依然冷静であり、黙って一芽を庇うようにD・ビートルの前へと踏み出た。

姿勢を前傾させながら右足を一步前に出し、巨大な三本の爪を備えた左手を地面に着け、戦闘態勢に入るギル。

戦意の高揚により、彼の四肢に刻まれたデジタルワールド特有の文字——デジタル文字が輝き始めた。

「それが嘘かどうかを確かめるのはついでのことッ！　キサマらがバカ弟子を討ったことは変わりやうのない事実ッ！　ワシの目的は最初^{ハナ}から、バカ弟子どもの仇を討つことよッ！」

「それはっ……！　戦うにしても、一つだけ聞かせてよ！　あたしはそっちの質問に答えただから、そっちだって——」

「——ゆくぞオオオッ!!」

いったい誰が嘘をついていたのか——そう問おうとした一芽の声を咆哮のごとき氣勢で遮り、マスターテイラノモンが巨軀を振り回すかのようにして駆け出した。

「ああもうっ——ギルっ！　おもいつきり!!」

「ああ!」

D・ビートルを後退させながらの一芽の呼びかけに応じ、ギルは前傾姿勢をより低く構え、迫り来る重戦車のごとき敵を真っ直ぐに見据えた。

左手と両足に力を込め、タイミングを計る。その様はまるで、立ち合いを待つ力士。

接触まで20メートル、15、10——刹那、ギルは左手を使って全身を前へ押し出すと同時にアスファルトを蹴り上げ、突進した。

弾丸のごとき勢いでマスターテイラノモンへと肉薄するギル。その突進の動きの中でギルは上半身を左へ捻り、右腕を体の内側へ向けて折り畳む。

肘打ちのフォーム——しかし鋭利な刃の備わる肘から繰り出されるのは打撃ではなく、敵を貫かんとする刺突。

ギルが前に構えた肘の刃が甲高い音を伴い、火花のごとく弾ける金色の光を纏う。

プラズマを生じさせた刃で敵を切り裂くグラウモンの得意技——「プラズマブレイド」の予兆。

右の拳に左手を押し当て、振り上げた右足で地面を踏み締め——突撃してくる目標の胸部目掛け、ギルは渾身の肘突きを放った。

正面衝突。深紅と銀灰の体軀がぶつかった衝撃で街が、大地が揺れる。

「^{ラピッドフライトリンク}神速電光突^ク、決まった!？」

ギルの後方100メートルほどの位置まで退避した一芽は、D・ビートルのカメラをズームさせて状況を確認する。

だが——ギルの右腕はマスターティラノモンの両腕によって受け止められ、そのプラズマで輝く刃は、大きな古傷が残る胸に届く寸でのところで阻止されていた。

「ほう、敵ながら天晴れッ！ ファイル島最強のワシでなければ、今の一撃で仕留められていただろうッ！ お返しだッ！」

マスターティラノモンがギルの右腕を掴んだまま、右ストレートを放つ。

だがギルも負けじとマスターティラノモンの右腕を掴み取り、反撃を防いでみせた。

クロスレンジ。ギルとマスターティラノモンは互いに互いの片腕を掴み合い、手四つでの力比べを始めた。

「ほう、止めるか！ それに見たところ成熟期のようなだが、なかなかのパワー！ グレイモンだった頃のワシでは、とてもキサマには及ばなかったことだろうなッ！」

「その、感じてっ……！ グレイモン、だったんだねっ……！ キミっ……！」

「ガハハハッ、冗談に決まっておろうッ！」

両者の力と全体重の負荷が掛かり、互いの足が地面に食い込んでアスファルトが割れ、そのヒビは段々と大きく広がっていく。

互いに一步も退いておらず、一見すると力比べは膠着しているようにも見えるが、実態は違う。

至近距離で対峙すると顕著だが、ギルの体高が約6メートルでマスターティラノモンは約7メートルと、両者の体格には明確な高低差がある。マスターティラノモンが自分の体重を掛けつつ上側から押すことが出来るのに対し、ギルは下から自分の力だけで相手を押し上げなければならぬ不利な形勢になっているのだ。

加えて、ギルは力んだ声色から窺えるようにフルパワーを發揮しているが、対するマスターティラノモンは声に余裕がある通り、まだ本気を出してはいない。

このままでは、間違いなくギルは押し負けてしまうだろう。

だが、ギルのパートナーがそれを黙って見過ごすはずがない。

「おいっ！ この元グレ腐れ外道っ!!」

街の谷間に木霊する、大音量の少女の罵倒。

一芽はギルとマスターティラノモンの元へ高速で迫りつつ、脳波による操作でD・ビートルの側部装甲を展開させる。

「あんたの弟子っ！ ティラノモン、ティラノモン、ティラノモンって——」

開かれた装甲の内部からせり出したのは、左右それぞれ二門ずつの短い砲身。

「——三人とも全員っ、同じ名前にしか聞こえないっのっ!!」

「キサマッ！ 我が弟子たちの名を愚弄——ぬウッ!？」

計四門の砲身が、コルク栓が抜けた時のような音を伴って四発の弾頭を発射——それらは取っ組み合うギルとマスターティラノモンの頭上で爆発し、二体の周囲に色付きの濃煙を大量に撒き散らした。

「タイムマンを邪魔された気分はどうっ!? ねえ師匠っ！」

一芽はD・ビートルでオレンジ色の煙幕の中を駆け抜けながら、すれ違いざまにマスターティラノモンを煽っていく。

「元より一対一をさせてもらおうつもりなど無いッ！ そしてキサマに師匠と呼ばれる筋合いは——」

炎のような色の煙に包まれた世界の中で、不意にマスターティラノモンは気付く。

それは煙に視界の一切を遮られていると言えど、本来ならばもう一瞬早く気付いていたはずの異変。しかし一芽に意識を引き付けられていたことで、感知がわずかに遅れた。

正面。マスターティラノモンのオレンジ色に染まった視界の下部に、煙と同じ色をした光が浮かんでいた。

次の瞬間、光は視界の中心まで上昇し、高音を伴って急速に膨張——爆発音と共に煙を突き抜け、マスターティラノモンの顔面へと襲い掛かった。

その正体は、鋼鉄をも溶かす超高温の火炎で形成された球——グラウモンギの口から放たれた必殺技、エキゾーストフレイム。

ギルはオレンジ色の煙幕に紛れながら下を向くことで、口から炎が溢れ出すという必殺技の予兆を隠し、直前に頭を振り上げて発射したのだ。

D・ビートルが散布した発煙弾は、妨害とかく乱の目的の他、強力な代わりに発射のタイミングが視覚的に分かりやすいギルのエキゾーストフレイムの予兆を掩蔽えんぺいする役割を兼ね備えていた。

今回、その発煙弾が見事に役割を果たした、かのように思えたが——

「——嘘っ、ステルスフレイム“見えざる豪炎”を避けたのっ!」

必殺技の命中を確信していた一芽は、思わず驚愕の声を上げる。

マスターティラノモンはギルと掴み合ったままで頭部と上半身を反らし、エキゾーストフレイムを回避していた。

胴体を狙えば確実にダメージを与えられたことだろうが、格上である完全体を一撃で仕留めようと頭部を狙ったギルの焦りが仇となった。

「危うい危ういッ！ まともに喰らっていけば美味しいマスターステーキになっておったところッ！ 魔女め、見ているだけかと思えば、そのような連携を隠していたとはなッ！」

火球が通り過ぎたことよって、二体の頭部周辺だけは煙が晴れている。

マスターティラノモンはギルを見下ろしながら、強面をにやりとさせた。対するギルはマスターティラノモンを鋭く睨みつけるが、それしきのことでは怯む相手ではない。

「あまり遊んでいてはやられかね——反撃と行かせてもらおうかアッ！」

「ギルっ！」

一芽は狼狽えつつもD・ビートルを急停止させ、バックカメラをサーマルモードに切り替えてズームし、煙幕の中の状況を確認する。

「おオオオオーッ!!」

野太い咆哮と同時に、二つの熱源——二体のデジモンの赤色のシルエットが大きく動き、直後、片方のシルエットが猛烈な勢いで空高くに吹っ飛ばされた。

巨体を翻す勢いと全力全開のパワーを相乗させたマスターティラノモンの背負い投げによって、ギルが投げ飛ばされたのである。

ギルは真っ逆さまの体勢のまま、高層マンションの中層に背中から叩きつけられた。

「ギルっ……! 気絶はしてない、けど……ハマってるっ!」

小さくないダメージを負いつつもギルは正気を保っていたが、凄まじい勢いで衝突したせいで体が外壁に深く嵌^{はま}ってしまい、あたかも拘束されたかのようにマンションのクレーターから抜け出せなくなってしまっていた。

「ガハハハッ! 動けんか赤竜ッ、運が無いなッ! そしてその力はハッキリと見極めたッ! キサマのみになれば問題無く捕えられるッ! であれば、先に殺^{ころ}るべきは——」

マスターティラノモンはマンションに逆さのまま礫^{れき}になっているギルを愉快げに笑った後、ゆっくりと体の向きを変えた。

その青い瞳が差し向ける鋭い視線の先にあるのは、D・ビートル。

「何を仕出かすか分からぬ、小賢しい魔女の方よッ!」

「やばっ!」

マスターティラノモンは地面を蹴り、D・ビートル目掛けて猛突進を開始した。

「一芽っ!! 逃げてっ!!」

「なんとかするけどっ!! 早めにつ、早めに抜け出してえええーっ!!」

ギルの必死の叫びに必死の叫びを返して、一芽は全速力でD・ビートルを始動させる。

「待てエイッ! アナログの魔女ッ!」

マスターティラノモンは口を大きく開くと、一直線に駆けながら火球を連射し始めた。

一芽はディスプレイに前方と後方の映像を分割表示させ、進行方向と迫り来る敵を同時に確認しつつ、D・ビートルを不規則に蛇行させて飛来する火球を回避していく。

(このままじゃ追いつかれるか、火球を喰らうっ……!)

ヘルメットの中で、一芽の額を一筋の汗が伝った。

D・ビートルの最高速度は時速130キロだが、回避のために大きく車体を左右に振っている現在はその六割程度までしか出ていない。対してマスターティラノモンはストレートに走り続けており、D・ビートルとの距離はぐんぐんと詰まっていつている。

一芽はほんの一瞬、ディスプレイの隅の時刻を確認する。

(時間——四分過ぎてるっ! こうなったらもう全部力矢のせいにして——)

一芽は脳内で動きのイメージを描き、六輪の大型タイヤが織り成すドリフトによってD・ビートルを180度急旋回させた。

(——メガログラウモンで行くっ!)

破れかぶれの決心と共に、一芽はアクセルペダルをフロアまでいっぱい踏み込んだ。全速前進——逃げるのではなく、真正面からマスターティラノモンへ突貫していく。

『一芽っ、進化許可が降りたっ！ だから待っ——』

「うるさい黙って見てろおっ!!」

力矢から連絡が入ったが、一芽は集中するため通信をミュートにした。

ギルはいつでも進化出来るよう常に一定量の進化因子——デジモンナチュラルアビリティを体内に蓄えているが、一度次の段階グラクモに進化した時点でそれらは全て消費されてしまうため、成熟期から完全体と成るには再度進化因子を補給しなければならない。

一芽がD・ビートルの機能を使えば、完全体への進化に必要なだけのデジモンナチュラルアビリティをギルへ遠距離から補給することが可能なのだが、問題はその射程範囲が100メートルであり、現在の位置からではとても届かないこと。

ギルを完全体に進化させるためには、マスターティラノモンを突破する必要がある。

「ほう、向かってくるか魔女ッ！ 次は何をするつもりだッ!？」

「スモーク、八発発射っ！」

D・ビートルの側部の砲身から発煙弾が二度連続で一斉発射され、次々と爆ぜて煙をばら撒き、わずか数秒で前方の一带をオレンジ色に染めた。

対するマスターティラノモンは、あまりにも暴力的にして合理的な行動に出る。

「ならば、一切合切まとめて吹き飛ばしてやろうッ——」

マスターティラノモンは減速して煙幕の中で足を止めると、巨大な口を大きく、火球を連射してきた時よりもさらに大きく、限界にまで開いた。

しかし、前兆をサーマルカメラ越しに目にした一芽の脳波により、D・ビートルが底部に搭載されたジャンプスラスターを発動させる。

「跳べえええっ!!」

乾いた音を響かせながら六基のノズルが火を噴き、D・ビートルの車体が一気に空へと飛び上がった。

「——ガアアアアッ!!」

D・ビートルの跳躍の直後、マスターティラノモンの口腔から放射されたとてもない量の火炎が地を這い、津波のごとく押し寄せた。

必殺技——「マスターブレス」。ギルのエキゾーストフレームをも超える超高熱の炎が煙を吹き飛ばして一掃しながら、マスターティラノモンの前方数十メートルのごとくを溶かし尽くしていく。

もしも前兆に気付けていなければ、一芽はD・ビートルごと骨さえ残らず溶解していたことだろう。だが一芽は、見事に状況を切り抜けてみせた。少なくともこの局面における駆け引きについては、彼女は勝った。

「っく!」

マスターティラノモンの頭上を飛び越える7メートル超の大ジャンプを経てD・ビートルが着地し、それに伴う激しい縦揺れを一芽は歯を食いしばって耐えた。

後方——マスターティラノモンはまだD・ビートルが跳躍したことに気付いておらず、苛烈な火炎放射で目前の一带を焼き溶かし続けている。

そして前方からは——

「ギルっ！」

クレーターから自力で脱出したギルが向かってきていた。

深紅の皮膚は負傷によってどこどころが欠け、緑色の数字が流れ出ている。

それでもギルは、一芽の元へと全力で走っていた。

ギルの姿が目に入ったその瞬間、一芽はD・ビートルを真っ直ぐに走らせながらも操縦桿を手放し、指を互い違いに絡ませながら胸の前で両手を組み合わせた。

多少の差異はあれど全世界共通にして、老若男女を問わず誰にでも分かるであろう、それは天上へ想いや願いを届けるための祈りの作法。

「ギル……みんなを、この世界を守るために……何より、ギルがあいつに勝つために……メガログラウモンになって……！」

一芽は目を閉じ、言葉を紡ぐ。神仏ではなく、共に戦う相棒へ想いと願いを捧げる。

その祈りは彼女の内でも脳波という形と成って、彼女が被るヘルメットのセンサーを通じ、D・ビートルへと伝わった。

D・ビートルは内蔵のアクセラレーターで一芽から送り込まれた脳波を強力に増幅させ、車体前面の大型ホーンアンテナが備える指向性ワイヤレス伝送システムによって、ギルに向けて発信した。

人体から生じる脳波には、デジモンナチュラルアビリティを進化させる因子が含まれている。さらに、それを受け取るデジモン本人に対する強い感情がその脳波に込められていた場合には、都市の一日分の消費電力に含有される量にも及ぶほどの莫大な因子が得られる。

脳波とは微弱な電気信号であるため、本来ならば一芽が額をぴったりと接触させてもしなければギルは脳波を受け取れないが、D・ビートルならば100メートルという射程範囲の制限はあるものの、遠隔からギルへ脳波を送信することが可能である。

D・ビートル——デジヴァイス・ビートルは、一芽を守る移動要塞にして、ギルを援護する戦闘車両、そして一芽がギルを進化させるためのデジヴァイスなのだ。

一芽の想いと願いが込められた脳波を受け取ったギルのデジコア電脳核が、アクセルを踏み込まれたエンジンのごとく急激に回転数を上げていき、その体が進化を遂げる。

疾駆するままにギルの巨軀が0と1のシルエットへと変じ、さらに巨大化。上半身のフォルムが著しく膨大化していき、頑強にして機械的な輪郭を纏った。

シルエットはまもなくして実体化し、その全貌が明らかとなる。

両腕は、振り子斧のごとき三日月状の巨大な刃を装備する「ペンデュラムブレイド」に

強化。胸部に左右一対の砲門、背部には二基の可動式大型バーニアームと鞭状の姿勢制御装置「アサルトバランサー」を備えるその上半身は、「クロンデジゾイド」によって九割以上がサイボーグ化されていた。

進化前に負っていた傷は進化に伴う構成データの書き換えによって全て消滅しており、コンデションは万全。進化前より遥かに重量が増した体を、しかし思いのまま操れるほどに筋肉量が増加した両脚を躍動させ、メガログラウモンへと進化したギルは空高く跳躍する。

入れ替わるような形でD・ビートルを飛越して飛び上がったギルは、ちょうど火炎放射を止めたマスターティラノモンの背中を見据えた。

青空を背負うギルの両腕の刃に稲妻が迸り、黄金の輝きを纏う。

高出力プラズマの発生に伴って生じたバチバチと弾ける激しい音を聞き、異変に気付いてマスターティラノモンは振り返った。

「何ッ!?」

「ギル、やったれええーっ!!」

D・ビートルをドリフトで急旋回させつつ一芽がエールを送った直後、ギルは背部バーニアから青白い炎を噴出させて加速――

「くたばれえええーっ!!」

――右腕を振りかぶりながら雄叫びを上げ、マスターティラノモン目掛けて急降下した。

「ぬウッ――」

マスターティラノモンは咄嗟に両腕を前に構えてギルが繰り出す右腕の軌道を見極め、その刃が届く前に受け止めようとギルの拳を両手で掴んだ。

だが、ギルは受け止められようとも構わず臂力に任せて右腕を振り抜き――マスターティラノモンの諸手を弾き飛ばし、その胸へ金色に輝く刃を叩きつけた。

「――グアアアアアーツ!!」

一閃――返す刃でもう一閃。連続で切り裂かれたマスターティラノモンの胸に、元あった古傷に重ねてさらに大きな二筋の傷が刻み込まれた。

「よくも一芽を――焼き殺そうとしてくれたなあっ!!」

大出血のごとく0と1のビットが噴き出す胸を目掛け、ギルは容赦ない左の追撃を放つ。

しかし、歴戦の猛者たるマスターティラノモンもただでやられはしない。

「グッ――どりゃあアアーツ!!」

マスターティラノモンはダメージを受けて一歩後ずさった左足を軸に、巨体を振り回すように回転――決死の回し蹴りでギルの左手を打って弾き返し、追い打ちを防いでみせた。

メガログラウモンはサイボーグ化によって上半身が重量化していることに加え、大仰な斧のようになった両腕は威力と引き換えに取り回しが悪くなっており、こと至近距離に關してはギルより生身のマスターティラノモンの方が小回りが利く。

マスターティラノモンはそのアドバンテージとギルの進化によって逆転した体高差を活かして懐へ入ると、全身を使って突き上げるような体当たりをかまし、ギルがわずかによろめいた隙に後方へ大きく跳び上がった。

「クロンなんちゃらだろうがッ！ コイツを受ければタダでは済むまいッ——」

空へと跳躍したマスターティラノモンが、口を一気に大きく開く。それは彼の必殺技、マスターブレスの前兆。

マスターティラノモンの口腔が赤く光り、今まさに炎が吐き出されようとしたその瞬間——彼の右脚へ鞭のような銀色の物体が絡み付く。

その正体は、ギルの背部から伸びるアサルト balanser。姿勢制御に用いられる balanser でありながら、攻撃にも使用可能な伸縮自在の装備である。

ギルは腰の横を通してマスターティラノモンの片脚へと伸ばしたアサルト balanser を右手で掴み、思い切り振り下ろす。

「落ちろおおっ!!」

「グアアアアッ!!」

マスターティラノモンは受け身の取りようもなく、自らのブレスによって赤熱した地面へと背中から叩きつけられた。

「ギル！ ックラッシュッ”だよ！」

「ああ！ 終わらせてくるっ！」

後方で戦闘を見守る一芽と言葉を交わした後、ギルは前傾しながらバーニアを最大出力で噴かして飛び立ち、うつ伏せの低空飛行で目標へと急接近する。

「グオツ!! 何をッ、キサマツ!!」

そうして体を起こそうとしていたマスターティラノモンを抱きかかえる形で捕まえると、バーニアアームの角度を変えて推力を偏向させ、ギルは上空へと浮上した。

「ぬウウウツ!! 放せエエツ!!」

マスターティラノモンは両の拳でギルの頭を連打するが、クリンチのように密着した状態ではパンチの威力が出ない上、ギルの頭部を守る超硬度のクロンデジゾイド製拘束具の防御力は高く、ギルはまったく動じないままみるみる空高くへと上昇していく。

「ならばッ、死なばもろともオッ——」

自らが吐く超高熱の火炎に己も巻き込まれることも覚悟で、マスターティラノモンは今度こそ必殺技を放つべくギルの眼前で口を大きく開いた。

対するギルは、マスターティラノモンの両腕を掴んで体から引き離し、右足をその腰に押し当て——

「死ぬのは——お前だけだあ——!!」

——バーニアアームの推力偏向を活かして後方へぐるぐると高速回転し、その勢いと驚異的なパワーを掛け合わせた巴投げで、マスターティラノモンを上空へと投げ飛ばした。

空中へと放り出されたマスターティラノモンが四肢を滅茶苦茶に動かして必死に体勢を整えようとする一方、ギルはバーニアを噴射しながらアサルトバランサーをスイングさせ、瞬時にマスターティラノモンへ向き直る。

ギルの両腕のペンデュラムブレイドから金色の光が失われていき、代わりに両胸の砲口から赤い光の粒子が溢れ始めた。

前方に突き出した両手を照準として、ギルがターゲットをロックオンする。エネルギーの高まりに伴い、左右一対の砲口の中で深紅の光が強まっていく。

メガログラウモンとなったギルの必殺技の破壊力は、直撃せずとも余波だけで敵性デジモンを撃破するほどに凄まじいが、最大出力で使用する場合はバーニア以外の出力を砲門へ集中させてなお、チャージ開始から発射まで五秒も掛かるという欠点も抱えている。

そしてその欠点がまさに今、危機を招く。

発射準備の半ば——マスターティラノモンは根性と筋力によって土壇場で姿勢を制御してみせ、ギルを正面に捉えた。

その開かれたままの巨大な口の内には、必殺の炎が燃えたぎっていた。

「——ガアアアアアーツ!!」

咆哮と共にマスターティラノモンの口腔から撃ち放たれたのは、もはや火炎ファイアーブレスの吐息ではなく、紅炎プロミネンスビームの熱線と化した必殺技。

放射する炎の範囲を極限まで絞って収束させることで、面の攻撃範囲を犠牲に点での威力を大きく高めた、歴戦と鍛錬によって編み出されし渾身のマスターブレス。

だが——ギルは間に合った。否、敵の挙動を見て間に合わせた。

「——アトミックブラスター!!」

ギルが両腕を左右に開いたその瞬間、胸部の一対の砲門から赤い光線——アトミックブラスターが同時に発射された。

最大出力での発射は間に合わないと思ったギルの機転により、チャージの途中で撃ち出された二筋の極太の光線は、七割の出力にもかかわらず対向の熱線をかき消し、そしてマスターティラノモンを貫いた。

「……見、事オ……ッ……!!」

両腕ごと胴体の半分ほどを消し飛ばされたマスターティラノモンは、しかしギルを見ながら満足げに笑い、真つ逆さまに落下し始める。

「弟子、たちよ……キサマらも……強者と……戦えた、のなら……本望……だろう……」
綺麗にくり抜かれたように体の両側に穿たれた二つの跡から、大量の0と1——デジモンの体を構成するデジタルデータが流れ出しては、消えていく。

敗北と死を受け入れて目を瞑り、墜ちていくマスターティラノモン。

しかし——突然、落下が止まった。

バーニアを噴かして接近してきたギルが尻尾の根元を乱暴に掴み、落下を阻止したのだ。

「……赤、竜……何の……つもりだ……？」

「勘違いするなよ。一芽を殺そうとしたヤツに情けを掛けてやるつもりなんか微塵も無い」
ギルはバーニアによって滞空し、逆さ吊り状態のマスターティラノモンを見下ろしながら言い放つ。

彼が向ける視線は氷のように冷たく、その金色の瞳に宿る感情は、ただ一人の家族を手に掛けようとした敵への蔑みだけ。

「……では……何故、助けた……？」

「デジモンを倒す時は出来る限りデジタマを遺せるように倒してくれ、って一芽から言われてるんだ。だからクラッシュで収めるために直撃はさせなかったのに、このまま地面に叩きつけられてデリートになったりしたら、本末転倒だろ」

「クラッシュ」は倒されたデジモンが転生したデジタマが残る形での撃破、
「デリート」はデジモンの核たる^{デジコア}電腦核を破壊することでデジタマも残さず完全に消滅させる形の撃破を、それぞれ意味している。

敵性デジモンをクラッシュで倒せというギルへの指示は、デジモンが好きでありながらそれを倒さなければならぬ一芽なりの、彼らに対するせめてもの償いである。

そんなギルの言葉を聞いたマスターティラノモンは、自嘲するように鼻を鳴らす。

「あれで……手加減……されて……とは……な……」

「ついでだ、最期に一つ聞かせる。嘘をついていたデジモンってのは誰だ？」

ギルがそう問いただす途中から、マスターティラノモンの体内の電腦核からハウリングのような高音が断続的に鳴り出した。デジモンの今際の時に生じる症状である。

「……やつ、は……てん……————」

デジモンの死を報せる音が青空に響き渡る中——残っていたマスターティラノモンの体が一瞬にして緑色の数字の羅列に分解され、それらは楕円形の塊を形成した。

ギルは首を横に振って小さくため息をつきながら、0と1の塊の下へ手を差し伸べる。

高音が止むのと同時に塊は実体を持ち、緑色の大きな斑点が特徴のデジタマと成って、ギルの金属の手のひらの上に落ちた。

ギルは拘束具に覆われた口を開けて小さなデジタマを舌の上に乗せると、それを飲み込まないように細心の注意を払いつつ、バーニアを噴射して街へ降下し始めた。

共に戦うパートナーにして、何よりも守るべき人——一芽の元へと帰るために。



デジモンバスターの活躍により三十回目となる敵性デジモンの撃退が成し遂げられた、その日の夜のこと。

夜の帳が降りてもなお煌びやかな秋葉原のネオン街を、一芽とギルは並んで歩いていた。

「えっ、ホント？　じゃあ次からはメガログラウモンスタートで良いわけだ？」

『良いわけだ。もちろん、相手が完全体の場合に限ってだがな』

一芽はデジヴァイス・ギア型のホログラムフォンを左手で胸の前に掲げながら、力矢とスピーカーモードで通話をしている。反対の手には、行きつけのケーキ店で購入したホールケーキの入ったポリ袋を提げていた。

言うまでもなく既にパイロットスーツは脱いでおり、服装は上下真っ黒な普段着に戻っている。

今夜は冬らしく気温が低い上に風も強く、通行人の多くは厚着をしている。

一芽はパーカーを着ている上はともかく、下がショートパンツにタイツと比較的薄着だが、生来から体温が高く寒さに強い体質をしている彼女は、寒がるような素振りはいま一つ見せていない。

「ま、完全体が出てくるようになったんだから、そうしてもらわなきゃ困るけどさ。今日だって危うくブレスでドロッドロに溶かされて、ビートルとジヨグレスするところだったし」

『……………笑えねえ……………』

「いやいや、メタルヒメモンにでもなるのかよ、って笑うところっしょ」

一芽はにやにやとしつつ、隣を歩くギルへと視線を移す。

ギルは好物のおでん缶を両手で持ち上げ、上手く角度を調整しながら具を一つずつ口へと流し込んでいた。

両腕にはパンパンに膨れたエコバッグがそれぞれぶら下がっているが、その内容は全て同一のおでん缶である。

ギルが特に気に入っているメーカーのおでん缶は通販で手に入らない自販機限定品であるため、彼は秋葉原を訪れるたび、このように大量のストックを購入していくのだ。

「それよか、これからギルの誕生日&祝勝パーティーやるんだけどさ、力矢も来る？」

『行こうと思えば行けるが……………俺が来たら嫌がるだろ、主役が。なあギル？』

ホログラムフォン越しに力矢に呼ばれ、ギルが一芽を見る。

目が合った一芽は無言で首を傾げ、ギルに返事を促す。

「力矢なら構わないよ。いつも一芽のために色々やってくれてるからね」

『……………そうか？　そうか……………じゃあ、俺が来たら嬉しいか？』

「まったく嬉しくないね」

『なんだよ、じゃあ行かねえよクソツ！　誕生日おめでとさんがよお！　あばよお！』
抑揚のない声色での即答を受けてへそを曲げた力矢は、それでもしっかりとギルの誕生日を祝ってから通話を切断了。

「あ、切れちゃった。もう、ギルが意地悪するからー」

「意地悪のつもりはないよ、本心を伝えたままでのことだから」

ギルはそれだけ言うと再びおでん缶を両手で傾けて、口の中に具を一つ流し入れた。

そんなマイペースなギルの様子に微笑みを向けながら、一芽はホログラムフォンを手放す。すると、ベルトループに取り付けられたリールキーホルダーのワイヤーが自動で巻き取られ、ホログラムフォンは定位置である一芽の腰へと戻った。

ネオンに照らされる夜道を行く一芽とギル。

外見がほぼ恐竜そのままであるギルは、街を歩いていれば否応なしに歩行者の視線を集める。そしてギルと同行している少女が居れば必然、それは同じデジモンバスターである一芽ということになり、結果的にふたりとも注目されることとなる。

すれ違う人々どころか、車道を挟んだ反対の道を歩く人々すらふたりに視線を引き付けられているが、しかし当人たちはそうして注目されることには慣れ切っているため、特に気に掛けてはいない。

少々ざわつきはしているものの大きな騒ぎにまでならないのは、第二ホール周辺であれば、彼女らが街をぶらついているのもそう珍しいことではないからだ。

ふたりがそのように平然と街を歩くようになったのは、二年前——それまで秘匿されていたデジモンバスターの正体が、大手暴露系ユニチューバーによって世間へ晒された事件がきっかけである。

そうしてデジモンバスターだと公に知られてしまった一芽は、多少の精神的ショックを受けつつも『バレてるならもうギルと一緒に出掛けたって良いっしょ』とポジティブに開き直り、事件以降はギルとふたりで外出するようになったのだ。

一芽とギルに声を掛けたり手を振ったりなどすら誰一人しないのは、日本政府およびジークセイバーから、ふたりに対するあらゆる接触、迷惑行為を厳禁とする旨の注意喚起がなされているためでもあるが、何より——そのような過程を経るまでふたりで外出することの出来なかつた子供たちに対する、市井の人々からの配慮によるところが大きい。

なお事件の発端となった「貝文かいぶん」というユニチューバーは訴訟などはされなかつたものの、怒り狂った何者キルかの夜間襲撃によって所有する事務所ビルを瓦礫の山になるまで破壊された挙句、一芽が若い少女であったこともあいまって日本のみならず全世界から壮絶なまでの猛バッシングを受け、チャンネルを永久凍結永久凍結されてユニチューブ界からデリートされるという末路を迎えた。

「パパもおでん好きだったけど……もしかしたらギルがデジタマに転生する前——デュークモンだった時代にパパからおでん缶をもらったことがあって、その記憶がこう……どこか奥底に残ってるのか？」

「さあ、どうだろうね。そもそもボクの前世がデュークモンっていう話も、一応はまだ仮説に過ぎないからね」

「いやー、設定資料にはギルモンの最終進化形態って書いてあったしな……ギルとデュークモンの体と同じマークがある上に、デュークモンの額当てがまんまギルの顔なんだし、ほぼ確っしょ」

ギルは一芽の父親——鈴二が亡くなった後、彼の自室にて力矢が発見したデジタマから生まれたデジモンであり、一芽が挙げたようなそれぞれの特徴の一致から、巷ではデュークモンという名のデジモンが転生した個体だと噂されている。

第一ホールから出現した、この世界に初めて現れたデジモン——それがデュークモンである。

出現した時期がデジモンの存在が世に広く認知される以前だったこともあり、彼は十三年前の当時には人知の及ばぬ怪異、あるいは宇宙からの侵略者として人々に「赤マントの怪人」と呼ばれて恐れられていたが、デジモンバスターとして活躍するギルの前世の姿だという説が広まったことをきっかけに、第一ホールを閉じてデジモンの出現を未然に防いだという本人の功績が評価され、現在では英雄のデジモンとして扱われている。

デュークモンという名が人々に知られているのは、ジークセイバーの公式ホームページにて、甘岡鈴二が遺したアニメ「デジタルモンスター」とその続編に関連する設定資料やアイデアを記したメモの一部が、実在のデジモンに関する参考文献としてパブリック公開されているからだ。

「あたしはニワカと違って、赤マントの怪人って呼ばれてた頃からデュークモンのこと好きだし、ギルが進化してくれたらアツいなーって思うんだけど……そもそも話、どうしてギルは成れないんだろうね、究極体」

赤信号の交差点に差し掛かり、足を止める一芽とギル。同じく交差点を渡ろうとして立ち止まっている周囲の人々は、避けるようにふたりと少し距離を取っていた。

ある者は、プライベートの時間を楽しむふたりを気遣って。ある者は、ただなんとなく。またある者は、禁止されている接触行為の冤罪を被ることを恐れて。人、それぞれに。

「言っても仕方ないと思うから、今まで黙ってたけど……なんというか、進化に必要なものは器の中に揃っているんだけど、その器に鍵が掛かっている……そんな感覚がするんだ」

「器に……鍵、ねえ。……わかんね。もつと分かりやすく例えられない？」

「悪いけど、そうとしか例えようが無いんだ」

「そっか……ま、究極体になったらパワーがスゴすぎて相手をクラッシュで撃破するなんて調整は効かなくなりそうし、現状はメガログラウモンで充分なんだけどさ」

信号が青に切り替わり、再び歩き出す一芽とギル。

一芽は赤、ギルはカーキとカラーは異なるが、ふたりは同じ形をしたお揃いのリュックを背負っている。そのファスナーにはそれぞれ、ふたりが好きなアニメ——「ジークの剣」に登場する武器を象ったメタルチャームが付けてあった。一芽は主人公のジークが使う光の剣「グラム」、ギルの方はそのライバルのシングルドが振るう闇の剣「バルムンク」のチャームである。

「しっかしホント、どういう関係だったんだろうね、パパとデュークモン。パパがデジモンの存在を誰よりも早く知ってたのは、デジタルワールドに行ったことがあるから——っ

て説もよく聞くけど、だとしたらいつ行ったんだろう。少なくともあたしが生まれてからは、そんな暇無かっただろうし」

「デュークモンがこっちの世界に来てから知り合ってたって可能性もあるけど……ふたりとも既に亡くなってる以上は、誰にも分からないね」

交通事故によって予期せず命を落としてしまった鈴二は、自らとデジモンの関係について言及する文書はおろか、遺書すらも残していなかった。ゆえにその真相は、娘である一芽にも分からないのだ。

交差点を渡り終え、一芽たちは駅へと繋がる歩道へ入った。

帰宅ラッシュの時間帯ということで、駅へ近づけば近づくほど人通りも多くなっていくのだが、行人人が大抵ふたりのことを避けて歩くお陰で、ふたりは何のストレスも無く歩を進められている。

2000年代の最盛期に比べれば、秋葉原の通行人はずいぶんと少なくなった。いわゆるアキバブームが過ぎての衰退の影響でもあるが、何より秋葉原は第二ホールに近く、デジモンが現れるようになった六年前から店舗の数が減少し続けており、訪れる人の数が減っているのだ。

もっともそれは秋葉原に限らず、第二ホール周辺——東京都全域における共通の問題である。近年、デジモンの襲撃によって生じる様々なリスクを鑑みて、東京から多くの店舗やオフィスが撤退している。また国会では、首都機能を東京から移転しようという議論も本格的に進められている。

歩いている途中、ギルがおでん缶を食べ終わり、汁の一滴まで残さず味わい尽くして空になった缶を、左腕の方のエコバッグへ放り込んだ。

その動作の中——ギルの大きな両手を爪ごと覆うレザーグローブを見た一芽は、ふとノスタルジィな想いに駆られる。

「その手袋も今日でちょうど十年選手かあ……ギルが自分で頻繁に手入れしてるとはいえ、よく壊れたりしないね」

「当然だよ。初めての誕生日に一芽からもらったものだし、ずっと大事に使ってるから」
そのレザーグローブは、十年前の今日——ギルの一歳の誕生日に『ギルの大好きな読書中に本を破かないように』と一芽がプレゼントした、手作りの品だ。ギルはデジモンバスターとしての出勤時以外には、ほぼ必ずそれを着用している。

「さて、誕プレ繋がりで——ここで問題です。今年のプレゼントは何でしょう？ ヒントは……名称に缶が入っていて、五文字のもの。制限時間はあたしが飽きるまで」

唐突に思い立ち、ギルへクイズを出題する一芽。

「五文字で缶と言われたらおでん缶——と言いたいところだけど、ひねくれてる一芽にしてはそのままなヒントだから、違うね」

「ちよっ、別にひねくれてないでしょ、あたし……！」

むっとする一芽だがギルはスルーし、顎に左手を当てながら考察を続ける。

「一昨年はリュック、去年は木製のカトラリーセット——一芽が毎年の誕生日にくれるのは必ず手作り且つ、日常的に使う物か身に着ける物。その傾向と缶ってワードから思い当たるのは……缶バッジだね」

「……正解は……缶バッチでした。バッジじゃなくてバッチね。しかも、缶バッチ十一個セット、ってところまで完璧に当ててくれないとダメだよねえー、不正解です」

「ひねくれてるよね、本当に……缶バッチ十一個セット、って五文字じゃないし……」

正解を捻じ曲げた挙句なぜかしたり顔を浮かべる一芽へ、ジト目の視線を送るギル。

ちなみに缶バッチの絵柄は、一芽がギルとふたりで撮った中で最も良いと思った写真を一年ごとに一枚ずつ選んだ、十一年分の思い出が描かれた十一種である。

「それよりも一芽……パーティーが終わって少しゆっくりしたら、早めに寝なよ。明日もデジモンが現れないとも限らないからね」

「うへー、流石にそれは勘弁してほしい——けど、最近の傾向的に有り得ない話でもないってのがまた嫌だね。ギルは進化で体力全快になるから良いよね……退化の場合はダメだけど、今日もノーダメージの速攻で圧勝だったし、そんなに疲れてないっしょ？」

「確かに一芽よりは疲れてないだろうけど、人間とデジモンってそういうものなんだから、言っても仕方ないよ。とにかく、ボクがメガログラウモンにしっかり進化出来るように、一芽にはちゃんと休んでもらわないと」

「はいはいよ、っと……まったく、いつになったら第二ホールの周りから離れて、ゆっくり旅行やら何やらに行けるようになるんだか……」

一芽は左手で前髪を触りつつ、小さくため息をついた。

そんな一芽の憂鬱げな様子を見たギルは、頭を向けて両方の目でまっすぐに彼女を見ながら、ある提案をする。

「本当に何もかも嫌になったらいつでも言っよ、一芽。その時はハワイにでもブラジルにでも、好きなところへ一緒に逃げよう。一芽を連れ戻そうとする連中が来たとしても、ボクが皆殺しにしてあげるからさ」

「……久しぶりに聞いたかも、ギルの悪魔の囁きシリーズ。外ではやめてよね、それ……」
「大丈夫だよ。誰かに聞かれたとしても、一芽と力矢以外の人は冗談って受け取ってくれるだろうし」

ギルの口調は至って平静。ゆえにこそ、ギルと密に接したことがなくその本性を知らない人間が聞けば、本人の言う通りその発言は冗談と捉えられるかもしれない。

だが、ギルは本気だ。一緒に逃げようという提案も、その際は追手を皆殺しにするという宣言も、紛れもなく本気で言っている。一芽さえ望めば、彼は今すぐにでもそれを有言実行することだろう。

比喩でも何でもなく、ギルは一芽以外の存在をどうでもいいと思っているのだ。

誰も、何も、世界も、自分さえも——一芽を守るためなら、他の何を失おうとも構わないとさえ考えている。仮にトロッコ問題的状况に直面したとしても、彼は何の迷いも後悔も無く、一芽一人が助かる方の選択肢を取るだろう。たとえその選択によって何万人、何億人が犠牲になろうとも、構わずに。

家族としてギルと長らく付き合ってきた一芽は、ギルのそのような性質を把握し、理解していた。しかし彼女は恐れるどころか、むしろその性質を頼もしく思っている。

たとえどんなことがあっても、自分にはあらゆる意味で絶対の相棒が居る——それは、本来あるべき青春の日々をかなぐり捨てても戦わなければならない若き少女にとって、何よりも心の支えとなっているのだ。

「……ま、気持ちだけ受け取って、まだまだ頑張るよ。あたしは知り合いにも知らない人にも、とにかく誰一人にも死んでほしくないからさ。デジモンとの戦いが終わったら一生遊んで暮らせるようにしてやる、って力矢にも言われてるし……色々我慢した分はその時に取り戻せばいいっしょ」

「一芽がそうしたいって思うなら、ボクはいつまででも付き合うよ。一芽がおばあちゃんになったってね」

「ありがと、ギル。んまー、でも三十代になる頃には終わってほしいかな……」

頼もしさを感じさせると同時に、将来の不安も煽っていく——そんなギルの言葉に、一芽が複雑な笑みを浮かべていると。

「あーっ！ ギルちゃんだーっ！」

幼気いたげな高い声。ふたりが足を止めて背後へ振り向いた直後、駆け寄ってきた小さな赤い影がギルに正面から抱き付いた。

その影の正体は、小さな体に蛍光色の赤いコートを纏った幼女。

自分たちに干渉しようとする者は居ないと思っていたばかりに一芽は一瞬戸惑ったが、相手が無垢な幼女だと判った瞬間に頬を緩ませ、満面の笑みを浮かべた。

「あらー、こんばんはー。お嬢ちゃん、ギルのこと好きなのー？」

「うん！ ギルちゃん好き！ あっ！ おねーちゃんって、ヒメちゃん!? わたしヒメちゃんも好きっ！」

「えーっ、あたしのこともー!? 嬉しいなー！」

その場にしゃがんでギルの胸ほどの背丈の幼女に目線を合わせ、優しい声で応じる一芽。一方で抱き付かれたままのギルは、おでん缶が詰まったエコバッグがぶつかからないよう両腕を広げつつ俯き、胸元の幼女を見つめながら威嚇するかのごとく牙を剥いていた。

「ああああーっ！ すすすすみませんっ、うっう、うちの子があっ！」

今にも噛み付こうとしているようなギルの形相を目にしてか、父親と思わしき男性が半ば悲鳴のような声を上げつつ大慌てで飛んできた。

「こらっ、離れなさいっ！」

「えーっ、やだーっ！ ギルちゃんとはじめてあったのにーっ！」

幼女の脇を持ってギルから引き離そうとする、青ざめた顔の男性。ところが幼女は必死にしがみついて、ギルから離れようとしない。体幹が強いギルは引っ張られようとしがみつかれようと微動だにせず、鋭い牙を剥き出しにしながら無言で立ち尽くしていた。

道行く人々の注目が、親子とギルの元へと集まっていく。通行人たちの表情に動揺や不安の色が見られるのは、非関係者によるデジモンバスターへの迷惑行為には罰則が定められており、子供のわがままによって父親が処罰を受けることになるのではないかと心配しているからだ。

「あー、落ち着いてくださいお父さん。大丈夫ですよ、ギルは嘔み付いたりしないんで。あとの顔、本人は笑顔のつもりなんで……あんまり怖がらないであげてください」

「えっ……ええっ？ そ、そう……なんですか……？」

一芽が苦笑いを浮かべつつなだめると、恐る恐る男性はギルを見た。

男性と目が合ったギルは自分なりの笑顔のまま、怪訝そうに首を傾げる。

「そう見えなかった？ おかしいな、少し前にひとりで笑顔の練習したんだけど」

「ひとりでやってたら色々ダメでしょ、そりゃあさ。今度あたしと一緒にやろうね。……とにかく気にしないでくださいね、お父さん。接触禁止って言っても子供がやったことですし、どこかに言いつけたりなんかしませんから」

「そ、そうですか……良かった……ってこら！ いい加減にしないで！」

「やだーっ！」

一芽の言葉を聞いてほっと安心したのもつかの間、男性はまだギルから離れようとしないう幼女を再び引っ張り始めた。

「ほら、お嬢ちゃんもパパの言うことはしっかり聞かないと。ね、ギル？」

「そうだね。言うことを聞かないと、ボクが喰いこ——食べちゃうぞ？」

「えーっ、ギルちゃんにたべられちゃいたくない！ じゃあやめる！」

(今、喰い殺すって言いかけたよね、ギル……お嬢ちゃんたちは気付いてないけど)

ギルからの注意を受けてようやく幼女はしがみつくのを止め、そしてそのまま父親の男性に抱え上げられた。

「本当にすみませんでした……！ 失礼します……！」

「ホント、お気になさらず。またねー、お嬢ちゃん！」

「バイバイ！ ギルちゃん！ ヒメちゃん！」

何度も頭を下げながら去っていく男性と、彼に抱えられながら小さな手を大きく振る幼女を、一芽たちは手を振り返しながら見送った。

「あの子のコートって、ギルをイメージしての赤色なのかな？ しっかり子供ってホント良いよねー、純真無垢で可愛くってさー」

「そうかな？ 騒がしくて面倒なだけだと思うけど」

「うわ、冷たー……ま、作り笑いだろうと笑顔で接しようとしただけ、昔よりはマシンなってるか……」

子供からのピュアな好意を浴びてすっかりご機嫌の一芽と、同じように好意を向けられたにもかかわらず風いだ海のように穏やかなギル。

対照的なテンションのふたりは雑談を続けながら、駅を目指して再び歩き始めた。



東京二十三区に隣接する埼玉県最南端の町、和光市。

その町に所在する、国内最大規模の科学研究所——「小門理学研究所」（こかどりがくけんちゅうじよ）には、ジークセイバーが管轄するデジモン研究センターが設置されており、拠点となる「デジモン研究センター研究棟」では、デジモンに関する研究が日夜行なわれている。

そしてその研究棟の地下深くには、デジモン研究センターに籍を置く者の中でもごく一部しか存在を知らない、敵性デジモンが遺したデジタマを厳重に管理するための保管室が極秘に設けられていた。

生物学から転向して初のデジモン研究者となった第一人者にして、ジークセイバーの最高責任者とデジモン研究センターのセンター長を兼任する力矢・ラインハルトは、その部屋の奥部にて、三段十列の水槽のような空間（チャンネル）を備える長方形の大型機器——デジタマ保管器のタッチパネルを操作し、動作確認を行っていた。

「加熱および冷却機能、各チャンネル共に問題なし……つと」

それらの機能は、あえて不適な環境に置くことでデジタマの孵化を防ぐためのもの。

敵性デジモンのデジタマから生まれてくるデジモンは前世の記憶こそ失っているものの、人間（ヒト）とギルに殺されたという恨みだけは引き継いでいるようで、人間にもギルにも懐かず生まれたその瞬間から大暴れし始めるため、なるべく孵化をさせないようにしているのだ。

そのような危険を抱えてまでデジタマを処分せずに保管している理由は、研究が進めばいずれデジモンを従える方法が見つかるかもしれない、敵性デジモンとの交渉材料に使えらるかもしれない、などといった現実的な訳もあるが、何よりも『デジモンと和解決した時に、デジタルワールドに返してあげたい』という一芽の意思によるところが大きい。

力矢が操作していたデジタマ保管器はまだ運用前の二台目であり、特殊強化ガラス越しに窺える通り、チャンネルの中にはまだデジタマが入っていない。対して二台目の隣に並んでいる一台目のデジタマ保管器には、合計二十九個のデジタマが収められていた。

力矢はぐっと伸びをして筋肉質な体をほぐしつつ、一台目の保管器の方へ視線を向けて、色とりどりにして模様も様々な二十九個のデジタマを眺める。

デジタマというものを見るたび、力矢はとあるデジタマのことを想起する。

赤い殻に黒い線状の模様が刻まれた、ギルのデジタマのことを。

(ギル……アイツが居なきや、今頃この世界はどうなっちまってたんだろ。それに……一芽が鈴二の死から立ち直れたのも、アイツが生まれてきてくれたお陰だ)

およそ十一年前——父親の鈴二が交通事故で亡くなった後、一芽は学校にも行かず部屋に引きこもり、塞ぎ込んでしまっていた。

力矢がなんと声を掛けようと、いかに献身しようともろくに反応してくれず、ついには時間が解決してくれるはずと半ば匙を投げてしまった、そんな折——一芽から預かって力矢が保管していたデジタマが孵化し、小さな翼が生えた赤いお手玉のような幼年期デジモン——ジャリモンが生まれた。

後にギルと名付けられることとなるそのデジモンは、生まれた瞬間から「ヒメ」と「まもる」という二つのワードを連呼し続けていたため、力矢が一芽に会わせてみたところ、ふたりはすぐに心を通わせた。まるでずっと以前からの親友と再会したかのごとく、ほんの一瞬にして。

その結果、一芽はものの数日にして立ち直り、元の快活な少女へと戻った。

手の施しようがないと力矢が諦めてしまったほどに深く傷付いていた一芽の心を癒し、救ったのは、ギルの存在に他ならないのである。

(だってのに……あの頃の俺はギルのことを、鈴二ダチに成りすましてたヤツが遺した卵から生まれてきた、得体の知れない生物だと……いまだに俺がギルに嫌われてんのは、その時の名残だろうな……)

力矢はため息をつきながらデジタマたちに背を向けると、壁際のデスクの上から鞆を拾い上げ、保管室を出るべく歩き出した。

力矢は世間や一芽に対し、ギルのデジタマは鈴二の遺品の中から見つけたものだと言っているが、事実はそうではなく——鈴二が運び込まれた病院に駆け付けた際、一芽が抱きかかえていたものを預かったというのが真相である。一芽自身がそれを覚えていないのは、父親を失ったことによる激しいショックと多大なストレスの影響だろう。

では力矢がなぜその事実を一芽にさえ隠しているのかと言えばそれは、事故の映像を確認したところ明らかになったギルのデジタマの出どころが、大型トラックに撥ねられてまもなく死亡した鈴二の体であったからだ。

(鈴二の中身が赤マンントの怪人——デュークモンに変わってたなんて……正直、今でも信じられねえ。だが、脳死から復活した時のあいつの口調、明らかにおかしかったもんな。それに……事故で死んだ鈴二の体から出てきたのがギルのデジタマだったってのが、何よりの証拠だ)

鈴二は壁の隣に取り付けられた指紋認証リーダーに指をかざして扉を開き、エレベーターに乗り込む。するとエレベーターは自動で動き出し、地上を目指して上昇し始めた。

いつの間にか父親の中身が人外の生物に成り変わっていた——そんな不気味なことこの上ない事実、一芽がデジモンが好きだと言えど、赤マンントデュークモンの怪人が好きだと言えど、と

でも告げられるようなことではなかった。だから力矢は可能なら墓にまで持っていくつもりで、今でも彼女に嘘をつき続けているのだ。

(デュークモンがいったい何を考えて、何のために鈴二に成りすましてたのかは分からねえが……ヤツは一芽のことを本当に大事に想ってた。それだけは、あのデジタマから生まれてきたギルを見てりゃあ、分かる……)

敵性デジモンのデジタマから誕生したデジモンが前世での怨嗟から人間とギルを敵視するように、デジタマから生まれるデジモンは前世で死の寸前に願ったこと、もしくは未練の影響を強く受ける。

つまりギルが一芽を守ることに執着しているのは、彼のデジタマを遺したデュークモンがそのように願ったからなのだろう。

ゆえに力矢はデュークモンのことは信用していないが、生前の彼の一芽に対する想いについては本物だったと信じており、そしてその想いを引き継いで生まれたギルには、全幅の信頼を置いている。

(……デュークモンと言やあ、気に掛かるのは……デュークモンが入った鈴二をハネたトラックのことだな。無人だったが、ありやあ間違ひなく誰かが動かしてやがった)

静かに昇っていくエレベーターの中で、力矢は事故のことを思い起こす。

デュークモン 鈴二を撥ねた大型トラックには、誰も乗っていなかった。だが事故映像を見た限り、トラックは明らかに^{デュークモン}鈴二を狙った動きをしていたのだ。

(デジモンならそういうことが出来るヤツも居るんだろうが……そもそも第一ホールから出てきたのはデュークモンが最初で最後だし、アイツより先にデジモンがやって来た様子は無かった。ならいったい、何があのトラックを動かしてやがったんだ？ ソイツはどうしてデュークモンを狙った……？ どうしてデュークモンが鈴二の中に入っていることを知ってた……？)

それは事故以来、これまでも幾度となく考えてきたこと。

当時から今に至るまで、ありとあらゆる手段を用いて調べ尽くしたこと。

だから考えても、考えても——やはり今日も力矢は、その答えに辿り着くことはなかった。



無限の0と1。二つの数字がどこからともなく生じては、どこへともなく流れていく。

異次元空間。

それは人間の世界と^{アナログワールド}デジタルワールドの世界を繋ぐ現在唯一の道。アナログワールド側の出入り

口は東京都の文京区に、デジタルワールド側の出入り口は「ファイル島」の恐竜型デジモンたちが暮らす「古代境」と呼ばれる地域に存在している。

そして今——灰色の球状の障壁に包まれた一体のデジモンが、その道を進み、アナログワールドを目指していた。

（ロイヤルナイツの会議に乗り込んでイグドラシルに直訴し、奪還の任を拝命してから一年と半年……長かったものだ）

青と金の壮麗な装飾が施された銀色の甲冑で身を固め、背には黄金の十枚の翼を広げた、大天使と戦神を掛け合わせたような姿をしたそのデジモンは、0と1の激流に身を任せながら、静かに思いを巡らせていた。

（この時のために私は、多くの罪無きデジモンを陥れ、捨てられた世界の出入り口を広げるための犠牲としてきた。もし貴公が今の私を見れば軽蔑することだろうが……許せ。貴公ほどのデジモンの転生体を倒してデジタマに還すには、一つ上の形態で戦わなければ危うい）

デジモンの頭部は金色の十字のモールドが目を引き兜に覆われており、表情を窺い知ることは出来ない。

しかし彼は胸の前で拳を握り、死者たちを悼むかのような所作をしていた。

（犠牲となったデジモンたちのお陰で、ワームホール出入り口は完全体のデータ量でも通行出来るまでに広がった。せめて、彼らの犠牲には報いなければならん）

拳を振り払い、デジモンは前方を見据える。

進む先には、目的の場所——アナログワールドへと通じるワームホールが見えてきた。

（転生体もついに完全体にまで進化してしまったようだが……聖騎士と成るに足る志を失い、邪竜の因子さえも抜き取られた今の転生体が、究極体に至ることは有り得ない。ならば私が究極体に戻りさえすれば、負けることは万に一つもあるまい。そして、あちらで再度進化するための算段もついている……）

デジモンは0と1の流れの中に空いた大穴の前で停止すると、白銀の鎧を纏った十枚羽の究極体から、白装束に身を包む大きな一對の翼を持つ完全体へと意図的に退化した。

「待っていてくれ、デュークモン。私が必ず、貴公の魂をデジタルワールドへ連れ帰る。そして私が貴公をもう一度、正義と秩序を守る聖騎士にまで導こう」

デジモンは己の決意を言の葉とした後、ワームホールへ飛び込んだ。



その日の東京の天気は、早朝から夜にかけて曇り。気温は最高8度、最低3度。

幸い雨は降らなかったが、空はずっと雲に覆われたままで日がまったく差さず、一日中寒く、暗かった。

多くの人が心の隅に憂鬱さを抱えつつ過ごした、そんな日の終わり際——休息していた、あるいはしようとしていた人々に追い打ちをかけるかのように、第二ホールからデジモンが現れた。昨日のマスターテイラノモンに続いて、連日の出現だ。

そのデジモンはこれまで現れたデジモンに比べ、様々な意味で異質だった。まず、出現するまでの速度。ワームホールの周囲の空間が歪んで見えるという予兆が観測されてから実際に出現するまで平均五分程度はかかるはずが、そのデジモンはものの一分で第二ホールから現れた。

次に、姿勢。今までの敵性デジモンはいずれも恐竜型や獣型など、地球にも存在する動物にも似た形状をしていたが、そのデジモンは初めての人型——否、天使型のデジモンであった。

そして、挙動。そのデジモンは第二ホールから出現して間もなく、すぐに別の街へと飛び去っていったのである。まるで、何らかの目的があるかのように。

曇天の夜空を切り裂くように、光芒を曳く深紅の彗星が飛んでいく。

その彗星の正体は、メガログラウモンに進化したギル。彼は背部のバーニアを最大出力で噴かし、D・ビートルに搭乗する一芽と共に、全速力で目的地へと急行していた。

「ホーリーエンジェモンだよ、ギル！ 本物だよ本物！」

底部に装備された電磁吸着装置^{サクシヨンリフター}によってギルの左腕に貼り付くD・ビートルの中で、一芽は興奮して目を輝かせていた。それは戦闘を前にしてのアドレナリン的な興奮ではなく、「デジタルモンスター」のファンとしての興奮である。

ホーリーエンジェモンは、アニメにおいては主人公のパートナーであるルクスモンが進化する完全体であり、格上の形態^{レベル}である究極体すら倒すという活躍を見せた非常に強力なデジモンだ。劇中に登場するデジモンの中でも指折りの人気を誇っている。

「ボクはジークの剣^{ツルギ}は好きだけど『デジタルモンスター』はそうでもないから、どうでもいいよ。それより油断しないでね、一芽。天使^{エンジェル}ってことは、アイツが言ってたでんに当てはまる」

「確かにてんはでんだけ……ホーリーエンジェモンだよ？ 下っ端ならまだしも、大天使型デジモンが嘘つきデジモンの正体だなんて、有り得る？」

ふたりが向かっている先は、秋葉原。三十一体目のデジモン——ホーリーエンジェモンは、一芽とギルが現れるのを待っているのか、攻撃もせずただ秋葉原の上空にて待機しているようだ。D・ビートルのディスプレイには、その様子を捉えたりリアルタイム映像が映し出されている。

「パパがわざわざ主人公のパートナーの進化形態に設定したぐらいなんだから、実際に良いデジモンなんだと思うけどな。もしかしたら、実際にパパのパートナーだったとかさ。戦闘形態じゃなくてローブ着てる神官形態だし、脳筋野郎のマスターテイラノモンと違っ

て、ちゃんとした話し合いをしに来てくれたんじゃない？」

「その可能性もゼロではないけど……マスターテイラノモンの時みたいに、戦いになる前提で居た方がいい。アニメで知ってるよね、ヤツの必殺技の恐ろしさは」

「ヘブンズゲートね……ま、確かにアレはヤバいけどさ……」

「ヘブンズゲート」。自身のみがアクセスすることの出来る固有の亜空間へと繋がる扉を生成し、悪と認識した対象全てを吸い込んで封印する、ホーリーエンジェモンの必殺技である。

亜空間に閉じ込められてしまった者は自力では二度と現世には戻れず、無の空間を漂いながらただ死を待つのみとなる。あらゆるデジモンの技の中でもある意味で最も恐ろしい、まさしく必殺技だ。

ギルの言葉を受け、一芽はそんなヘブンズゲートを受けてしまったもしもの自分とギルの結末を想像し、身震いした。

その恐怖によって、一芽の興奮は急速に落ち着いていく。

「……ギルの心配も分かるよ。分かるけど……やっぱり、話し合いだけはさせてよ。ヤバいと思ったらギルの判断で打ち切って良いからさ」

「一芽がそうしたいって言うのなら、もちろんボクは従うよ。ボク個人としては、隠れながらアトミックブラスターで狙撃して処理したいところだけど」

「……ギルはいつだって、現実主義者だなあ……」

興奮が収まるなり、入れ替わるように今度は心身の緊張を感じ始めた一芽は、腕を組みながらコクピットシートにもたれて、適度なリラックスを試みる。

そのように緊張感が押し寄せてきた要因は、戦いになるかもしれない懸念よりも、念願がついに叶うかもしれないという期待によるところが大きいだろう。

「でも……もしもだよ？ もしも話し合いが上手く行ったとしたら……今日で人とデジモンの戦いが終わる可能性があるんだよ？ なら、やるだけやってみるべきだと思わない？」

一芽が口にしたのは、デジモンと戦い続ける彼女が六年もの間ずっと夢見てきた理想、まさしくの念願である。

ギルもちろん、一芽の念願のことは承知している。彼もまた六年の間、それが彼女の願いなら叶えてやりたいと思いつけている。そう、思いつけてはいるのだ。

一芽の念願を聞いたギルは、目を瞑り——しばしの沈黙の後で、拘束具に覆われた口をゆつくりと開く。

現実主義者は夢想家を肯定する。

自分というデジモンの全てである彼女の想いを、偽りではなく、本心から肯定する。

これまでずっとそうしてきたように。

「……そうだね。もしも一芽がもう戦わなくて済むかもしれないのなら、やってみるべきだとボクも思うよ」

「でしょ？ もちろんギルの言う通り、常に戦いになってもいいって心構えでは居るからさ、やらせてよ。ねえ力矢、聞いてるでしょ？ 時間稼ぎも兼ねてさ、構わないよね？」
一芽がそう問いかけると、ディスプレイの右隅にウィンドウが表示されて、力矢がバストアップで映し出される。

一芽がD・ビートルに乗り込んだ時点から通信は繋がっており、あえて割り込もうとはしなかっただけで、力矢はこれまでのふたりの会話も聞いていた。

『クソ天使の野郎が何のつもりか秋葉原に行きやがったせいで、避難がまだ終わってねえからな。確かに、時間稼ぎはしてもらった方が助かる。だがくれぐれも気を付けろよ、お前らの片方だけでも吸われたら一巻の終わりなんだからよ』

「まだクソ天使って決まったわけじゃないっしょ……！」

「いいよ、一芽。ボクはいつでも対応出来るようにしておくから、話したいように話せばいい」

「ありがと、ギル。……さあて……見えてきた……！」

敵性デジモンの出現に伴う停電によりネオンが消えた、暗い秋葉原の街——その上空100メートル。D・ビートルの目のごとき二基のカメラが、夜空にこそ映える純白のロープを纏った天使を遠くに捉えた。

既に彼はギルの接近に気付いていたらしく、一芽たちに向かって正対していた。

ホーリーエンジェモンである。体長は4メートル程度で、メガログラウモンとなったギルの半分ほど。

一芽は眩しいまでに真っ白な彼の姿をじっと見つめながら、一度だけ深呼吸をして、緊張を和らげる。

ギルは出力を落としてバーニアを飛行モードから滞空モードに切り替え、ホーリーエンジェモンから80メートル程度離れた位置で停まる。

すると、突然——ホーリーエンジェモンは右手に携えていた銀色の剣を消滅させ、まるでふたりを歓迎するかのように両腕を大きく広げて見せた。

「初めまして。ギルさんに、アマオカヒメさん。私の名はホーリーエンジェモン。デジタルワールドの秩序を保つべく戦う天使たち……その監督者を務めているデジモンです」

「えっ？ あ……あつ、ど、どうも。えっと、甘岡一芽とギルです。初めまして」

予想外なホーリーエンジェモンの丁寧な挨拶に一芽は面食らい、たどたどしくなりながらも挨拶を返す。

「攻撃をしてくれないということはつまり、話し合いでの解決を望んでいると解釈しても？」
「話し合い、で——そう、そうなんです！ あたしはずっと、デジモンと話し合いがしたいと思ってる……！」

デジモンの側から『話し合いでの解決』というワードが出たことで、融和がもう目の前まで迫っているような気になって、一芽は希望で胸が高鳴った。

ホーリーエンジェモンの顔は、銀色の十字のモールドが施された紫色のバイザーによって半分ほど覆い隠されており、その表情は完全には窺い知れない。

しかし露わになっている口元は、にこやかに微笑んでいた。

「それは何より。ではまず貴方がたの要求を聞かせてください」

「は、はいっ！ えっと……シンブルに、こっちの世界を攻撃するのをやめてほしいです。そもそも、なんで襲ってくるのか分からなくて……！」

「なるほど。であれば、こちらの要求さえ呑んでいただければ、お互いの問題は同時に解決出来るそうですね」

「ホントですか!? それで、その要求って……?」

ホーリーエンジェモンは静かに手のひらを差し出す。ギルへと向けて。

「ギルさんを、デジタルワールドへ返していただきたい」

「え……?」

その要求を聞いた一芽の胸が、再び大きく高鳴る。

だがその高鳴りは、先ほどとは質の違うもの。

融和への期待からではなく、家族を引き渡せと言われたことに対する戸惑いからだ。

「ご存じだとは思いますが、ギルさんはデュークモンの転生体です。所属する勢力こそ異なりますが、彼は私と同じく秩序の維持に殉ずる者であり、デジタルワールドに無くてはならない存在なのです。そして私たちがこれまでこちらの世界を襲い続けていたのは、全てデュークモンを取り戻すという大義のため。ギルさんさえ返していただければ、我々がニンゲンを攻撃する理由は無くなるのです。どうですか、アマオカヒメさん？」

身振り手振りを交えつつ穏やかな声色で、ホーリーエンジェモンはそうのように話した。

一芽はD・ビートルのkokopittoの中で、彼の話にじっと耳を傾けていた。

鼓動の速まる胸を分厚いパイロットスーツ越しに抑え——慌てず、冷静に。

「一芽、どうする？ 一芽がそうしろって言うなら、ボクは行くけど」

ギルは右腕に貼り付くD・ビートルの中に収まる一芽に問いかける。その声は至って平静であり、不安も動揺もまるで無い。

そして、返答を迫られた一芽は——あざけるように鼻を鳴らしてから、口を切った。

「一つ教えてよ、ホーリーエンジェモン」

「なんででしょう?」

小首を傾げるホーリーエンジェモン。

「あんたってさ……今まで、誰かに嘘をついたことってある?」

「正義と秩序を司る者として——断じて、ありません」

即答。静かでありながらも強い自信を秘めた、迷いの無い美声。

それに対して一芽は、短くため息をついた。

この、クソ天使——そう、呆れて。

「こつちの世界を襲い続けていたのは、全てデュークモンを取り戻すため？ マスターテイラノモンは、弟子たちは騙されてこの世界に誘導された、って言ってたよ。あんただったんだね、テイラノモンたちを騙した嘘つきデジモンってのは」

「なんと、あのマスターテイラノモンがそんなことを？ ふむ、なぜ私を陥れるようなことを——」

「——とぼけたって無駄だよ」

しらを切るホーリーエンジェモンの声を遮って、一芽はさらに続ける。

「それに、もしマスターテイラノモンが適当言ってたとしたって、あたしは最初からギルを渡すつもりなんか無いよ。例えあたし以外の人類全員が渡せって言ったって、お断り。ギルはたったひとりしか居ない、あたしの掛けがえの無い家族なんだから」

一芽は他の誰かの存在など気にせず、ただ自分の心をそのまま口にした。

彼女のそんな言葉を聞いたギルは、笑っていた。口元に拘束具が装着されているお陰で表情はほとんど変わっていないようだが、彼は嬉しくて、確かに笑っていた。

「家族——なるほど。とても親しい者、ですか。貴方にとってギルさんがそうであるように、デュークモンは私にとって、まさしくその家族のような存在だったのですが……」

ホーリーエンジェモンは憂いを帯びた、偲ぶような口調で言う。

「は？ 何それ、また嘘？」

「いいえ、これは事実ですよ。そして私は、その家族をニンゲンに殺され、奪われた……これもまた事実です」

「デュークモンを……人間が殺した？ そんなわけ——」

「——デジタルワールドの管理者、イグドラシルは常にアナログワールドに抜け殻の世界のことを視ているのです」

やり返すかのように、今度はホーリーエンジェモンが一芽の言葉を遮った。

「そしてイグドラシルは私に教えてくれたのですよ。デュークモンはニンゲンに紛れて活動していたところをニンゲンに殺され、そのデジタマから生まれた転生体はアナログ抜け殻の魔女に洗脳され、従属させられている、と」

「イグドラシルのことはアニメで知ってるけど……よくもそんな嘘を——」

『——待て、ホーリーエンジェモン！』

予想外の人物の乱入に、一芽は思わず「え？」と呆けた声を漏らす。

突如として会話に割り込んできたのは、遠隔操作によってD・ビートルから発された力矢の声だった。

『アイツが死んだ時の映像を何度も見たが、アイツは無人のトラックに狙われてハネられたんだ！ だが、乗り込んで操縦せずにトラックでの確に誰かをハネるなんて芸当、人間には出来ねえ！ だからデュークモンを殺したのは人間じゃねえ！ それを勘違いして一芽たちと戦おうとしてるってんなら、考え直してくれ！ 秩序を守る天使様なんだから、ア

ンタは!？」

D・ビートルのスピーカーを通じて言葉を並び立て、必死にホーリーエンジェモンを説得しようとする力矢。デュークモンの死因については初耳であり、力矢がなぜそれを知っているのかという謎も併せて、一芽は困惑していた。

(力矢が否定しなかったってことは、デュークモンが人間に紛れて活動してたってのはホントのこと……? それより……トラックにハネられて、って……パパと同じ……)

「この期に及んで、まだそのようなことを？」

ホーリーエンジェモンの声が耳に入り、はっと正気に返る一芽。

「私も天使という身でありながら、デュークモンを取り戻すにあたって、今やすっかり嘘つきに身を落としてしまいました……貴方がたも相当なようだ」

『信じてくれ! 嘘なんかじゃねえ! 俺はデュークモンと五年間……』

「……わかりました、わかりました。これ以上話し合っても時間の無駄、ということがね」

ホーリーエンジェモンはそう言いながら、うんざりとした調子で首を左右させる。

「大人しく転生体を引き渡すのであれば、と思ったのですが……やはり、初めからこうするべきでしたね。それでは、デジモンらしく……」

ホーリーエンジェモンはローブの胸元を掴んで一気に脱ぎ捨て、白装束の神官形態プリーストモードから、金色に輝く羽衣状の帯を纏い、両腕に強力なビーム兵装を装備する戦闘形態へと瞬時に轉身した。

「――闘うとしようッ!」

二枚の大翼から八枚の銀翼へと変化した翼を力強く羽ばたかせ、右腕に高出力のビームソード、左腕に攻防一体のビームシールドをそれぞれ発振させつつ、ホーリーエンジェモンは上空へと一気に飛び上がった。

「ギル、アレが来るっ――低出力で連射っ! とにかく当ててっ!」

「ああ、落とすっ!」

即座にギルは両腕を広げながら体を仰向かせ、急上昇していくホーリーエンジェモン目掛けてアトミックブラスターを発射した。

一対の砲門から放たれたのは極太の光線ではなく、チャージを経ずとも発射可能な低出力ビーム弾の連射。

しかしホーリーエンジェモンは八枚の銀翼が生み出す不規則な機動で、ギルの空対空射撃を回避。そうして一発も被弾することなくひとしきり上昇した後、今度はビームソード――聖剣エクスカリバーを頭上に掲げながら平行に飛翔し始めた。

聖剣が通り過ぎた虚空には、紫色の光の軌跡が残っている。ホーリーエンジェモンはその軌跡によって、曇りの夜空に巨大な円を描いていく。

「一芽っ、一旦退くぞっ!」

「っ――お願いっ! 力矢、アキバの人たちの避難は!」

『あ、ああ、お前らのお陰で完了してる！ 問題ねえ！』

ギルは転回し、右腕に吸着するD・ビートルを左手で抑えつつ、背部バーニアを最大出力で噴射。全速力を以ってその場から離れる。

まもなくして、秋葉原の夜空に大きな——あまりにも大きな光の円が完成した。

そして光の円は一瞬にして、黄金の門へと変じる。

「へブンズゲートッ!!」

高らかな叫びに応じてその扉が開かれ、真つ白な亜空間へと繋がる門が聖なる力を発動する。悪への裁きを履行する。

「あつぶな——アニメより大きく魔法陣を描いてくれてたお陰で、間に合った……」

その必殺技——へブンズゲートの予兆をアニメで知っていたことにより、門の召喚が完了する前から既に離脱を始めていた一芽とギルは、無事にへブンズゲートの射程範囲から逃れることが出来た。

だが——一芽は思い知らされることになる。

アニメとは手がける者たちの都合によって描かれる創作に過ぎず、時にそこから得た知識を活かせることはあっても、何もかもを現実と一緒くたにしてはならないものだ。

「……え……?」

ギルが様子を窺うべく、へブンズゲートが召喚された方角へと向き直ったその刹那——一芽は目を疑うような光景を目撃する。ギルでさえも、その光景には瞠目していた。

信じられない——信じたくない、それは悪夢のごとき光景。

秋葉原の街が、白い亜空間へと吸い込まれつつあった。

道路が割れ、地盤ごと建造物が浮き上がり、次々と門の中へ飲み込まれていく。

車両が。街路樹が。街灯が。そして——人々が。抗いようも無く、飲み込まれていく。

へブンズゲートから生じる凄まじい引力は、地下のシエルターをも破壊し、内部に避難していた人々を引きずり出して、空へと吸い上げていた。

へブンズゲートとは、ホーリーエンジェモンが悪と認めたものを対象とする技。それは、アニメでの設定と同様である。

アニメにおいてのホーリーエンジェモンは悪ではない建造物や地形に影響を与えることなく、敵のデジモンだけをへブンズゲートに吸い込んでいた。

だが、アニメのキャラクターなどではない現実のホーリーエンジェモンは、デュークモンを害した人類のみならず、人類たちが築いた文明まをも悪と認識し、その一切を裁かれるべきものと判じたのだ。

アニメから得た知識により、一芽たちはへブンズゲートを回避することが出来た。

しかし同時にアニメから生じた先入観によってふたりは、自分たちさえ回避出来ればへブンズゲートの発動を阻止する必要は無い、と思いついてしまっていたのである。

「ギル、みんなを助けに……一人でも……!」

「無理だ。今行ってもボクたちが巻き込まれるだけだよ」

「……そう……だけど……！」

絶望的なまでの大惨事。

目を見開きながら、呆然自失とする一芽。

やがて——へブンズゲートの扉がゆっくりと動き出し、亜空間に繋がる門は閉じられた。

数分前までは確かに秋葉原の街が在ったその場所は、大きさも深さもそれぞれ滅茶苦茶な無数のクレーターで荒れ果てた、土色の更地と化していた。

街というものは多少壊れようと直すことが出来るが、跡形も無くなれば話は違う。

秋葉原の街が元の姿に戻ることは、金輪際有り得ないだろう。

それでも命を持たない街のことならまだ割り切れる。

しかし、人々のことはとても割り切れない。

いったいどれだけの人が命を落としたのか。

ギルと共に全力で阻止に動いていれば、あるいは止められたかもしれない——その可能性を思うと——気が触れて、狂い、壊れてしまいそうだった。

全身から血の気が引いていく。

動悸が激しくなっていく。

涙が込み上げてくる。

視界が揺らぐ。

息苦しい。

「一芽、落ち着いて」

「………分かって、る……」

ギルの声。それを聴いて、一芽の心と体を苛むものは、わずかながら鎮まった。

(そうだ………まだ、戦いの最中なんだ………倒さなきゃ………ヤツを………)

なんとか冷静になるべく深呼吸をしようとした、そんな折——一芽はディスプレイに映し出された更地の上空に、ひらひらと舞う赤い何かを見つけた。

距離があるせいで米粒よりも小さく見えるが、よく目立つ色ゆえに一芽は目を引かれた。

無意識に発された一芽の脳波に反応し、D・ビートルのカメラがズームする。

拡大映像用のウィンドウが開き、そこに表示されたのは——蛍光色の赤い布切れ。

超高倍率の拡大の影響で輪郭がぼやけており、それが本当に布切れなのかは分からない。

しかし、その特徴的な赤色を目の当たりにした一芽の脳裏を、あることがよぎる。

「あ——」

それは昨夜、ギルと共に秋葉原を歩いていた時のこと。

「あぁっ——」

布切れと同じ色のコートを着ていた、秋葉原で出会った少女のこと。

「……一芽、この事態は誰にも予想出来なかったことだ。一芽が責任を感じる必要は——」

「――ああああああっ!!」

一芽は声にならない声を上げ、グローブを纏った両手で顔を覆う。子供に帰ったかのように、泣きじゃくり始めてしまった。

「一芽……」

一芽がそれほどまでに酷く取り乱すのを見たのは、共に過ごした十一年の中でも初めてのこと。

布切れに気付いておらず一芽が錯乱し始めた理由が分からないギルは、困惑すると同時に、一芽を心から哀れむ。

そして彼女の状態を鑑みて、一つの決断を下す。

「力矢、離脱するぞ」

ギルは一芽の乗るD・ビートルを右腕から外して両手でしっかり掴むと、ヘブンズゲートに背を向けてバーニアを噴かし、力矢の返事を待たずして戦域からの離脱を開始した。

『……そうしてくれ。どこで休むつもりだ?』

「分からない。ひとまず出来るだけここから離れて、一芽が落ち着くまで――」

『――待てギル! ヤツがゲートから出てきやがったっ! いや、あいつはっ……!!』

D・ビートルのスピーカーが発した驚愕する力矢の声を聞き、ギルは上半身を前傾させて脚の間から背後の様子を確認する。

ヘブンズゲートが透明に薄れ、消滅していく。だが注目するべきはそちらではない。

一直線に、敵が猛追してきていた。

五対十枚の黄金の翼を羽ばたかせて飛翔する、白銀の鎧に身を包んだ敵。

「セラフィモンっ……!?!」

三大天使の一角にして、あらゆる天使型デジモンを統べる熾天使型デジモン――セラフィモン。あのホーリーエンジェモンが究極体へと進化した姿である。

彼は自らもヘブンズゲートに入り、亜空間へ取り込んだ秋葉原の街の残骸から大量のデジタル機器や記録媒体を吸収することで、進化に必要なデジモンナチュラルアビリティを確保したのだ。

その行動は機転などではなく、元々の計画。通過可能な容量に制限があるワームホールを通るには退化せざるを得なかったが、彼は初めからそうして究極体に戻る算段だった。

「終わりにしよう。デュークモンの転生体と、罪深き抜け殻の魔女よ――」

セラフィモンはメガログラウモンの全速力の倍以上のスピードで翔けながら両腕を広げ、眩しく輝く七つの光球を周囲に展開する。

「――セブンヘブンズ」

必殺技の名の詠唱と共に、三発の光球がセラフィモンの元から撃ち放たれた。

ギルはサイボーグ化したボディに内蔵されたリーダーによって光球を探知し、前進しつつも回避機動を取ろうとしていたが――光球は飛行するギルの遙か上を通り過ぎていき、

前方に浮かぶ暗雲の中に飲み込まれた。

だが、それこそがセラフィモンの狙い。

「何っ!？」

突如、夜空から巨大な三本の光の柱が降り注ぐ。それらは直下のビル群を焼き尽くしながら合わさって極大な光の壁となり、ギルの行方を塞いだ。

「っ——クソッ!」

ギルは光の壁を回避しようと右方向にカーブしたが、新たに降ってきた光の柱にまたしても行く手を阻まれ、やむを得ず急停止する。

ギルのレーダーは、周囲に巨大な六つの熱源を感知していた。

それらの熱源の正体は、セラフィモンの放った光球が発生させた六本の光の柱。

既にギルは、全周を光の柱に包囲されていた。

ならばとギルは唯一残された逃げ道、最後の希望である天を振り仰ぐ。

だが、そこに待っていたのは絶望。

直上の夜空には、七つ目の光球を手にしたセラフィモンが浮いていた。

「転生体よ——デジタマに還れ」

セラフィモンは右手をかざし、最後の光球をギル目掛けて撃ち出した。

——衝撃。

「っ!？」

六点式シートベルトによってシートに縛り付けられた体をガクンと激しく揺られ、一芽は目を覚ました。

彼女は強烈な精神的ショックの影響で、しばらく失神してしまっていたのだ。

「あたし……どうして……? ……システムが、落ちてる……?？」

D・ビートルのコクピットは、真っ暗闇になっていた。まだ意識のぼやけたままの頭で脳波操縦を試みるが、何も起こらない。

「ギル? 力矢? ……どうなったの……? ……確認、しないと……!」

一芽はもたつきながらも六点式シートベルトを外し、コクピットの壁面を右手で探る。

そうしてハッチの解放レバーを探し当てると、腕に力を込めて、一気に引き下げた。

無事にハッチが開き、コクピット内に薄雲越しの弱い月明かりが差し込む。

いつもよりひどく重く感じる体を動かして、D・ビートルの外へ出る一芽。

そうして彼女が、目の当たりにしたのは——

D・ビートルの傍らでうつ伏せに横たわる、ギルの姿だった。

「ギルっ……ギルっ!!」

一芽はヘルメットを脱ぎ捨てながらD・ビートルから飛び降り、ギルの頭に抱き付いた。

ギルは全身にダメージを負っており、その体の至るところから緑色の0と1が漏れ出し
ている。特に背部の損傷は酷く、二基のバーニアは基部から折れてしまい、アサルトバラ
ンサーは途中から焼き切れて、装甲に保護されていない下半身や尻尾が黒々と焦っていた。
ギルは一芽が乗るD・ビートルを庇い、光球を背中受けたのだ。

「ごめん……ごめんね……あたしが、おかしくなってる内に……ひとりで……こんなつ……
ごめんっ……!!」

涙をぼろぼろと流し、己の不甲斐なさをひたすらに謝る一芽。

「……一芽……大丈夫、夫……だよ……ボクは……まだ……」

ギルは目を閉じたまま、立ち上がるうとする。

だが力が入らず、その手足は震えるだけ。

「ギル……ギルっ……ごめ、ん……!!」

号泣する一芽は半ば倒れ込むようにして、ギルの頭に額を押し当てた。

ゆっくりと、セラフィモンが歩いてくる。

その右手に握られているのは、神官形態時のホーリーエンジェモンが手にしていた銀色
の剣。

鉄と鉄とが擦れる鎧の音を伴いながら、セラフィモンがやって来る。

(あたしが、あんなヤツと話し合おうとなんてしなれば……初めから問答無用で戦って、
へブンズゲートを使わせる隙なんて与えなければ……ギルはこんな目に遭わなかった。誰
も死ななかった。秋葉原も無くならなかった。ギルのことが大好きだった、あの子だつて
……!!)

一芽は頭の中で後悔を羅列する。ただただ、後悔をする。

(全部……全部、全部……全部全部全部、あたしのせいで……)

「——違う……一芽……」

ギルは否定した。

触れ合う頭同士を通じて伝わる脳波から想いを読み取り、一芽の自責的な考えを否定し
た。

「一芽はみんなを守るために……みんなの代わりに……ボクと一緒に、戦ってくれた……
悪いのは……絶対に……一芽なんかじゃない……悪いのは全部……デジモンだ……」

「……悪いのは……全部……デジモン……」

一芽はギルの言葉を、ぼんやりと、無意識に復唱する。

その言葉が一芽の内にエコーする。

(デジモンは……人類みんなに何をしてきた……?)

六年間に渡る断続的な襲撃。

それによってもたらされた、数多の物的被害と人的被害。

これまでにだって被害はあったが、今日はあまりにも凄惨だ。

街一つが丸ごと消し去られ、とてつもない数の人命が失われた。

自分たちを慕ってくれた子供の未来も、恐らくは失われてしまった。

(デジモンは……あたしたちに何を強いてきた……?)

この六年間、一芽はギルと共に色々なものを投げ打ち、デジモンの襲撃に対応してきた。ブライベートな時間。謳歌するべきだった青春。好きなことをやって、好きなところへ行っているという自由——挙げられればキリの無い、たくさんものを捧げてきた。

デジモンと戦えるのが自分たちしか居なかったから、一芽はそうしてきた。

父親に二度も守ってもらった命は、自分も他の誰かを守るために使うべきだ——そんな自己暗示をして、自分の心を騙して、なんとか戦い続けてきた。

そうせざるを得なかったのは、この世界を襲うデジモンたちのせいだ。

悪いのは全部、デジモンだ。

(デジモンさえ居なければ……あたしも、ギルも、みんなも、何も失わないで済んだ。それなのに、あたし……あいつらがアニメの中と同じ姿をしているからって、同じ存在だと勘違いして……そんな連中と分かり合いたいなんて……いつか分かり合える日が来るなんて、思ってたんだらう……)

一芽はギルの頭に添えていた手を強く、強く握り締めた。

「デジモンなんてみんな、全力で倒せば良かったんだ……分かり合おうなんてせず……デジタマが遺せるようになって、考えずに……容赦なんてしないで……！」

その後悔は呟きとなって、一芽の口から漏れ出した。

そして、その後悔こそが——器の鍵を外す。

「死ぬ。捨てられた世界の抜け殻」

一芽の背後に立つセラフィモンが、銀色に輝く剣を振り上げる。

刹那、鮮血がほとばしった。

しかし、その血の色は緑。

それは血液ではなく、セラフィモンの右腕から噴き出した数字の羅列であった。

「何っ……!!」

セラフィモンは理外の急襲に怯んで後ずさり、その手から弾き飛ばされた剣が地面に突き刺さった。

彼の腕を切り裂いたのは、0と1で構成された巨大なシルエットと化したギルの内から伸びる、槍の穂のごとき刃を備えた尻尾のような影。

「むうっ!？」

尻尾がその内へと引っ込んだ瞬間、ネオングリーンのシルエットは爆発するかのように黒い炎を燃え盛らせ、危機を感じたセラフィモンは反射的に上空へ飛び上がった。

「馬鹿なっ——させるものかっ！」

セラフィモンは進化を阻止するべく、光弾を連射しようと両手を構える。が——

「まさかっ——ぐおおおおっ!?」

突如黒い炎の中から飛び出した影——巨大な竜の頭の突進をまともに喰らい、セラフィモンは弾き飛ばされた。

十枚の翼を使いこなし即座に体勢を立て直し、セラフィモンは地上を睨む。

そして、彼は目撃する。

「っ……なん、だ……貴様は……!?!」

信じ難い事態に、有り得てはならない事態に、当惑するセラフィモン。

十字のモールドが煌めく兜の奥に隠されたその瞳に映るのは、焦げた大地に立つふたり。

強い意志を宿した眼差しを向ける一芽と——揺らめく炎のような漆黒のオーラを纏う、青き装いの騎士。

「デューク、モン……!? だが、その邪悪な気配は……!」

色を除けば、その姿は聖騎士デュークモンと同一。

しかし纏う気配は、神聖と対極の暗黒。

白く輝く銀色の鎧は、昏く光る鈍色の鎧に。

深紅のマントは、濃紺のマントに。

右腕の聖槍「グラム」は、魔槍「バルムンク」に。

左腕の聖盾「イージス」は、魔盾「ゴーゴン」に。

かつての聖騎士が掲げていた『弱きデジモンたちを守るために戦う』という正義は、そのデジモンには断じて無い。

その暗黒騎士の内にあるのは、『ただ一人だけを守るためにあらゆるデジモンを滅する』という究極的エゴイズム。

セラフィモンは、暗黒騎士が発する気配には覚えがあった。

遙か昔、古代デジタルワールド時代。三大天使と、ロイヤルナイトの始祖たる古代の聖騎士の四体が力を合わせて戦い、苦戦を強いられながらも撃破した最凶最悪の邪竜——メガドラモン。

眼下で佇む暗黒騎士が帯びる邪悪な気配は、「災いをもたらす者」と呼ばれたその存在の気配に酷似していた。

「デュークモンの姿を取った、メガドラモンだとも言うのか……!? なぜだ……邪竜の因子は、イグドラシルが取り除いたはず……!」

討伐されたメガドラモンが遺したデジタマは、セラフィモンによって回収され、デジタルワールドの管理者——イグドラシルに預けられた。

イグドラシルは、自らに仕えるに相応しい忠実にして強力なデジモンが生まれるようにと長い時間を掛け、邪竜のデジタマのデータを調整した。

そうしてデザインされたデジタマから誕生し、セラフィモンの導きを経て究極体にまで至り、イグドラシル直属のロイヤルナイトとなったデジモンが、デュークモンだった。

だがセラファイモンの知る限り、邪竜のデジタマからは、メギドラモンに進化するための暗黒属性のデータが多分に含まれた邪竜の因子——「CM因子」が抽出されていたはず。

つまり、邪竜のデジタマから生まれたデュークモンの転生体だろうと、メギドラモンのごとき邪悪な気配を持つデジモンに成ることなど、絶対に有り得ないはず。

「……まさか、イグドラシル……貴方はデュークモンの中に、邪竜の因子を戻したのか……!? なぜ、そのようなことを……!?」

「何をひとりで盛り上がっているのだ？ 熾天使」

うるたえるセラファイモンを見上げながら、暗黒騎士は低く落ち着いた声で、嗤うように言った。

「怖くて怖くて仕方ないでしょ。格下だと思ってたギルが、格上になったから。そうでしょ？ 臆病者で卑怯者のクソ天使」

一芽はセラファイモンを睨みつけながら毒づいた後、隣に立つギルを見上げる。

暗黒騎士に進化したギルの体長は、セラファイモンと同等の5メートルほど。

メガログラウモンよりも小さくなっているが、デジモンの進化においては珍しい現象ではない。

技術の進歩に応じて最新機器が小型化していくのと同じことだ。体を構成するデータは完全以上に洗練され、その性能は究極に強化されている。

「器に鍵を掛けてたのは、『いつか分かり合える日が来るかもしれないから、敵はせめてデジタマを遺せるようにクラッシュで倒したい』なんて考えてた、あたしの中途半端な戦意だったんだね、ギル」

ギルは足元の一芽と目を合わせ、ゆっくりと頷く。

「究極体の力を振るうとなれば、デジタマが遺るように敵を倒すことなど出来ない。ゆえに私の電脳核^{デジコア}は、我が姫のその望みに応えるためにと、無意識の内に究極体への進化を制限してしまっていたらしい」

「それで、そんなこと望まなきゃ良かったってあたしが思ったから、鍵が外れた……」

「そのようだ。既に脳波を通じて知っているが……改めて言葉で聞こう、我が姫よ」

成長期の時と同じ金色の瞳で一芽を見つめ、ギルは問いかける。

「お前は我に、何を望む？」

「……『全てのデジモンをデリートすること』」

「承知した」

一切の迷いの無い一芽の答えを受けたギルは、微笑むように目を細めた。

そして一芽とギルは共に、夜空に浮くセラファイモンを見据える。

セラファイモンは、戦慄していた。

もしも暗黒騎士が、邪竜と同一の存在だったのならば——

究極体の中でも絶大な力を持つデジモンたちが四体掛かりでようやく討った、あのメギ

ドラモンと同一の存在だったのならば――

「――貴様はいつたい、何なのであっ!!」

セラフィモンは羽ばたいて上空へ退きながら、両手から無数の光球を乱射し始めた。

「我が姫よ、乗れっ!」

「うんっ!」

ギルが左腕の魔盾を高く掲げて降り注ぐ光球を防ぎつつ、右腕の魔槍を一芽の前に差し出す。一芽は天性のフィジカルを活かしてバルムンクを駆け上がると、肩当てを經由してギルの肩に飛び乗って片膝を突き、青い額当ての翼のような突起を掴んだ。

一芽が肩へ乗った直後、ギルの全身から溢れる黒いオーラが彼女を覆った。それは一芽を守るための、ある程度の攻撃と風圧を防ぐバリアだ。

「熾天使よ。冥土の土産に、デジモンとしての我が名を教えてやろう」

ギルの背中に一瞬、深紅の竜翼が現れる。幻影の翼で虚空を打ち、ギルは目にも留まらぬ速さで夜空へ舞い上がった。

「我は、人とデジモンの争う混沌の時代に降臨せし、暗黒の騎士――カオスデュークモン」

「混沌だどっ!? ふざけるなああっ!!」

カオスデュークモンと名乗ったギルは青いマントをはためかせ、ゴーゴンで光球の雨霰をかき消し、凄まじい勢いで一直線にセラフィモンに迫っていく。

「デモンズディザスター 群影の災厄!」

ギルの纏う漆黒のオーラが燃え上がるように広がり、その内から六つの影が出現した。

それらはギルを模る、黒一色の影分身。

影分身は乱射される光球をくぐり抜けて六方向に散開し、セラフィモン目掛けて一斉に突進する。

光の弾幕の中から飛び出してきた六体の影分身を視認したセラフィモンは、攻撃範囲を広げて同時迎撃を試みるが、冷静さを失ったセラフィモンの攻撃は掠りもせず――一体の影分身が繰り出したランスが胴体に直撃し、セラフィモンは大きく突き飛ばされた。

攻撃を終えた影分身が霧散する。続けざま、災厄が降りかかる。

「ぐああああああああーっ!!」

五体の影分身がセラフィモンにそれぞれ一撃を見舞っては消え去り、そして――ギルは再び背中に竜翼の幻影を喚び出し、ただ一度だけ力強く羽ばたかせ、急激に加速する。

「が――はッ………」

体勢を崩したところへ肉薄したギルが放った渾身の突きが、その鎧に刻まれた希望の紋章を粉々に破碎し、セラフィモンの腹部を打ち貫いた。

夜空が、静寂に包まれる。

両者は沈黙したまま。両者は静止したまま。

時が止まったように。動かなかった。

間もなくして、静寂を破ったのは——セラフィモンの^{デジコア}電腦核から鳴り出した耳障りなハウリング音。

長大なランスを胴体に深々と突き刺されたセラフィモンの四肢が、十枚の翼が、力無く垂れ落ちた。

「……………ダーク……………サイド……………に……………落ちた……………か……………デューク……………モン……………」

今にも消え失せそうで、絶え絶えな言葉。それを聞いて一芽は、蔑むように鼻を鳴らす。

「ダークサイド？ それって、デジモンの視点から見た話でしょ。あたしたち人間からすれば、ダークサイドはあんたたちの方だよ。セラフィモン」

それから一芽は間近にあるギルの目を見て、指示を出す。

「ギル。おもいつきり」

「承知した」

ギルは一芽に応じて左腕をおもいつきり振りかぶり、バルムンクに突き刺さったセラフィモンをゴーゴンで全力で殴り飛ばし、一気に空高くへと打ち上げた。

さらにギルは、風穴の空いた胴体から大量のデータを溢れさせながら吹っ飛んでいくセラフィモンへ、左手のゴーゴンを差し向ける。

「^{ジュデンカプリズン}第四円の牢獄」

ゴーゴンの面に刻まれた模様が妖しく輝いた、その直後——漆黒の奔流が撃ち放たれた。万物を腐食させる闇の波動に飲み込まれたセラフィモンは、瞬く間に黒の中に溶けて、跡形も無く完全に消滅した。

それは敵性デジモンとの戦いにおける三十一回目の勝利の瞬間にして、一芽とギルにとって初めてとなるデリート。

しかし生来からデジモンに情など無いギルは元より、新たな形の決意を固めた一芽には、デリートに対する後悔などまったく無かった。

ただ、彼女には別の後悔がある。

言うまでもないが、それは多くの犠牲を出してしまったこと。

デジモンの襲撃から守れ切れず、死傷者を出してしまったことは過去にだってある。

それでも今回は、あまりにも——あまりにも、被害が大きすぎた。

その後悔は、これからもずっと続いていくのだろう。

(もっと早くに、器の鍵に気付いていたら……もっと早くに、デジモンのことを相容れない敵だって認識出来たら……)

夜空に在りながら、夜空を見上げる一芽。

ギルの必殺技——ジュデッカプリズンによって暗雲に空いた穴から、冷たい風になびくギルのマントと同じ色をした空と、煌めく星々が覗いていた。

「犠牲のことは気に病むな、とはあえて言うまい。彼らのことは忘れず、その死から目を背けず、憶えていよう。そうすれば、もう同じ轍を踏むようなことは無い。我々は今日、

前へと進んだのだ」

ギルは一芽の想いを汲み、そう語った。彼もまた、夜空を見上げながら。

「……そうだね。せめて、そうしないとね。ありがと、ギル」

一芽はギルに札を言った。

頬に一筋の涙を伝わせながら、それでも笑った。

「帰ろ。きっと力矢も心配してるしね」

「承知した」

ギルは青いマントを翻しながら振り返ると、ジークセイバーの本部へ帰還するべく、飛翔した。

ふたりは今日、新たな道に踏み出した。

その道を一步、前へと進んだ。

デュークモンの死から、ギルの「デジタルハザード 災いをもたらす者」への覚醒まで——こ・れ・ま・での何もかもを仕組んでいたイグドラシルの思惑をも超越し、やがてデジタルワールドを破滅させることとなる、その道を。

セラフィモンとの戦いから一ヶ月後——一月上旬、年始休みの最終日。

あたしは、デジモンの襲撃が始まる六年前までずっと住んでいた実家に、ギルと一緒に帰省していた。

帰省と言っても当然実家には誰も居ないし、目的も特に無し。

だからあたしとギルはリビングのソファァーに隣り合って座り、昔はパパと一緒によくアニメを見ていた8Kのテレビを使って、サブスクに加入してる動画配信サービスに追加されたばかりのスーパーヒーロー映画を見ていた。

その映画の途中——鑑賞に夢中で聞きっぱなしになっていた大きな口を動かして、テレビから目を逸らさないままでギルが話しかけてきた。

「よく受け入れられたね、一芽は。あれって寄生されてたようなものなのに」

「え？ ……まさか、パパの話？ このシーン見ながらその話題出すの最悪すぎる……」

テレビで流れているのは、スライム状の地球外生命体ヴィランが口の中からドバドバと入り込んで人間に寄生するグロテスクなシーン。そんなタイミングでその話を振ってきたギルに、あたしは苦笑いを向ける。

「ボクは父親って存在が居る感覚はよく分からないから、一芽に置き換えて考えてみたんだけど……ある日、知らない内に一芽の中身が人間じゃないものになら変わってたら、ボクは気持ち悪くて仕方ないだろうし、そうと分かった瞬間にすぐに殺すと思う」

「気持ち悪いし殺すって……ギルの前世なんだから、そこはこう……擁護してあげなよ」

「ボクはボク、デュークモンはデュークモンだから」

「ごもつとも、とは思った。」

ギルはギルであってデュークモンではないという話も、大事な人の中身が別の何かに入れ替わっていたら不快だという話も。

それでも後者の話に関しては、あたしにはその事実を受け入れるに足りた理由がある。

「ま、そりゃ力矢から聞かされた時は驚きはしたけどさ。でも、嫌な気持ちにはまったくならなかったよ。だって変わる前も変わった後も、どっちのパパもあたしにとびっきり優しかったし。めいっばい可愛がってくれたし。それに何より……そこで終わるはずだったあたしの命を、身を挺して助けてくれたんだしさ」

そうして語りながら、あたしは脳裏で思い浮かべる。

ふたりのパパと過ごした思い出を。ふたりのパパに命を救われた瞬間を。

「……そういうモンかな」

「そういうモンなの。あたしにとってはね」

いまいち合点がいつていない様子のギルに、あたしは微笑んでみせた。

それからは映画が終わるまで、あたしたちは一言も言葉を発さなかった。

▼
映画を見終わって、夕方。

「急かさないでよ、一芽」

「急いだ急いだ！ クソ映画見せられてお腹ぺこぺこなんだから！」

あたしは尻尾を持ち上げてギルにちよっかいをかけながら、夕食を取るために外出しようとして、玄関に向かっていた。

あの映画は、空中要塞に寄生して大暴れする地球外生命体をマルチバースに送り込むことで対処する、という結末で終わった。

——マルチバース。

もし現実にもそれが存在するならば、もしかしたらアニメの中のように、人間とデジモンがお互いを理解し合って、仲良く共存しているような世界もあるのかもしれない——と何気なく思った。

もつとも、あたしが生きてるこの世界はそうじゃない。

ここは、そうはならなかった世界。

玄関までやって来たあたしは、お気に入りのバスケットシューズを履き、靴箱の上に置いてある鍵に手を伸ばす。

靴箱の上のスペースには、あたしが子供の頃に集めた“ジークの剣”や“デジタルモンスター”のフィギュアが並んでいた。

ふたりのパパの写真が入った、二つの写真立ても。

「行こう、一芽」

「うん、ギル」

これまでデジモンを送り込んだ諸悪の根源が死んだお陰か、あの日以降、敵性デジモンは現れていない。

もう一生来なければいいのって思うけど、きっとそうはならない。

近い内に必ず、デジモンはまたこの世界にやって来る。

だけどあたしはもう、新しく決意を固めた。

相手がたとえどんなデジモンだったとしても、容赦なんかしない。

あたしはギルと一緒に戦って、そのデジモンを全力でデリートする。

跡形も無く。絶対に。